
聖譚曲、闇夜に響く ~ 現代滝口譚異聞 ~

世木維生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖譚曲、闇夜に響く ～現代滝口譚異聞～

【Nコード】

N8107D

【作者名】

世木維生

【あらすじ】

異端たる吸血鬼・雨月の暗躍。それを討ち滅ぼすべく動く滝口・渡辺詩緒と陰陽師・賀茂瑞穂。しかし、その野望は、ついには『セカイ』をも巻き込み始めていた。この作品は時系列的には『現代滝口譚3』後の物語になりますが、シリーズ本編とは一切関係ないパラレル小説です。この作品は月城柚先生（W0584A）の『セカイノハザマ聖譚曲』と同時進行で物語が展開していくコラボレーション小説です。物語の全貌を把握するために、ぜひこちらも必読を！

prologue” 雨月物語” (前書き)

この物語はフィクションです。作品に登場する人物、団体、事件、『刀』等は実在のものとは一切関係ありません。

また、今作の執筆に当り、時間をかけ過ぎてしまい、特に月城先生のファンの方々に迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

prologue " 雨月物語 "

ここに希有の物がたりの侍る。妖言ながら人にもつたへ給へかし。此の里の上の山に一字の蘭若の侍る。故は小山氏の菩提院にて、代々（よよ）大徳の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤学修行の聞えめでたく、此の國の人は香燭をはこびて歸依したてまつる。我莊にもしばしば詣で給うて、いともうらなく仕へしが、去年の春にてありける。越の國へ水丁の戒師にむかへられ給ひて、百日あまり逗まり給ふが、他國より十二三歳なる童兒を俱してかへり給ひ、起臥の扶とせらる。かの童兒が容の秀麗なるをふかく愛させたまうて、年來の事どももいつとなく怠りがちに見え給ふ。

さるに茲年四月の比、かの童兒かりそめの病に臥けるが、日を経てもおもくなやみけるを痛みかなしませ給うて、國府の典藥のおもだたしきまで迎へ給へども、其のしるしもなく終にむなしくなりぬ。ふところの壁をうばはれ、挿頭の花を嵐にさそはれしおもひ、泣に涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに歎かせたまふままに、火に焼、土に葬る事をもせで、臉に臉をもたせ、手に手をとりくみて日を經給ふが、終に心神みだれ、生てありし日に違はず戯れつつも、其肉の腐り爛るを齎みて、肉を吸骨を嘗て、はた喫ひつくしぬ。

世界には非日常の顔がある。

一般の常識では考えられない超常的な力、そして、その力を行使する者が確かに存在するのだ。

その存在は、普段は一般人と何ら変わりのない生活を送る人間である事もあれば、世界各地に伝承される神や天使、そして悪魔や魔物といった人間ではないモノであったりする。

それは絵空事ではなく、真実。

それは世界の裏の常識であり、現実。

これは世界の表と裏、その狭間の物語。

beginning”ピアジア”

「Fab - 26 . Sun / 00 : 13」

男は逃げていた。見るからに高級そうな上質のスーツに身を包んだ、長身、金髪、青眼の明らかに異国の地を故郷とする青年である。その端正な顔の青年 マスク 否、彼は決して、その外見通りの年齢ではなかった。人間の時間的な感覚で推し量るのだとすれば、決して『青年』と呼ばれる年齢ではないのである。彼は夜魔の血族の一員だった。

ミティアン 夜魔。文字通り、夜に生きる魔である。見た目は何一つ人間と変わらない青年である男は、しかし、人ならざるの存在なのだ。

人の精を喰らう夢魔などが、そこには分類される。そして彼は、その夜魔の中でも特に力を持った種の者だった。

スラブではヴァンピール、ロシアではウピール、マレーシアではラングスイル、ギリシャではヴリユコラカス、ルーマニアではストリゴイ、ドイツではナハツェール、スロベニアではピジャヴィカ、ブルガリアではウポウルと呼ばれる存在 もの。

それは英語ではヴァンパイア。

そして、日本では吸血鬼と呼ばれる妖 あやし である。

「ねえ。もう追い駆けつこには飽きたよ……」

前方で聞こえた声。夜魔の男は我が目を疑う。路地裏。しかし、彼の足元には、月を背にした声の主の細い影が伸びていた。そこには確かに追跡者が存在していたのだ。

「馬鹿な！？ 私が撒き切れぬと言うのか!？」

彼の身体能力は人間のそれを遥かに凌駕する。

ましてや、今は夜。彼らの支配する時間。

その力を縛る要素は何もないのだ。この時間の彼らは、生態系の頂点に君臨する絶対者なのである。それなのに。

彼は踵を返す。逃走を継続しようと試みる。

何故に、私ともあるう者が逃げようとする？ 一瞥した追跡者の目に警鐘に似た感覚を覚えたからか？

男は自らの取った行動に疑念を抱いていた。

それは不可解で、在りえない行動であるはずなのに。

それなのに思考よりも早く、身体は動いていたのだ。

それは本能がそうさせたのか？

それとも

故郷を捨て、流れ着いた異国の地。

ここは宗教色の極めて薄い国だった。それは彼にとって非常に重要な要素ファクターだったのである。

故郷を捨てた原因も、それに在るのだから。こと、宗教色の強い国では、彼らに安息は存在しないのだ。彼らを裁き、滅ぼすことを目的とした、狩人や異端審問官インクイジションナーと呼ばれる退魔の人間の手が絶えず伸びるのだから。

加え、ここは所謂、大都市と称される場所。この土地に暮らすこの国の人間たちは、他人に酷く無関心で彼の本性を詮索しようとする者さえ皆無だった。

隣人が血を吸う魔物であれ、気付く者はなく。隣人が血を吸い尽くされ変死しようとも、気付きもしない。

正に楽園。

この国には邪魔な者はなく、捕食活動に支障もない。

しかし、漸く手にしたはずの安らぎを破壊するかのようそに、追跡者は現れた。

そうだ。この樂園に居続けるためにも、面倒な争いは避けねばならぬのだ。

男は自らに、そう言い聞かせる。

いや。ならばこそ、自身の力に絶対の自信を持つこの男が、単体でしかない敵対者を排除しようと思わせない矛盾には気付きもしない。

「何!？」

そして、彼は驚愕の声を再び発していた。

「……まだ遊び足りないのかな？」

振り向いた、そこにも。追跡者は立ち塞がるように存在していたのだ。

前方に注意を払いつつも、男は後方を 追跡者が居たはずの方向を振り返る。

果たして、そこに追跡者はいない。

間違いなく、追跡者は一つ、なのだ。

「何か面白いものでもあるのかな? 童……」

それは平均的な小学校高学年程度の形にも関わらず、見た目、青年の彼を童と蔑む。

「調子に乗るな!」

吼え、夜魔の男は渾身の力をその腕に籠めると、それを振るった。否定。認めたくはない、何かを振り払うべく of 行動。男の拳は、正にそれだったのかも知れない。

細腕。彼のその腕は、そう呼ばれる部類でありながら。しかし、少年に回避された勢いに、路地裏を形成する雑居ビルのコンクリートの壁面に、轟音と共にめり込んでいた。

「あはは! らしいよ! 童! そうでなきゃ! それくらい of 抵抗』をしてもらわなきゃ、興が殺されるよ!」

しかし、その恐るべき光景を目の当たりにしながら、少年は笑う。

ただ、無邪気に嗤う。

「……貴様……狩人か？ 異端審問官か？ それとも、魔術師の類か？ 事を荒立てずに済まそうと思っていたのだが……」

彼は冷徹に少年を見据えると呟いた。

その呟きと共に、彼の拳の自由を奪っていたはずの壁は強い刺激臭と共に煙を発生させ、融解させられる。

それは強烈な毒素のもたらした反応だった。

「それは異国の人間の役職の名前かな？ ……違うよ……僕はお前の主さ」

そう言い放ち、くすりと少年は笑う。

それは頭に青いバンダナを巻いた少年だった。

少女とさえ見紛う可憐な顔立ち。その道の色を好む者ならば、どれほどの財を投げ打っても手に入りたい。そう思わせるに十分な程、愛くるしく、美しい少年だった。

「何、だ、と……？」

眩暈を覚えたように。その美貌に惹かれ、驚愕しながらも、眉間に皺を寄せ彼は訝しげにどうにか呟く。

夜魔の者は美形が多い。それは元来、人を惑わす存在だからだ。

彼とてその例外ではないのだ。

しかし。しかし、それらに見慣れたはずの彼にも、その少年の美貌は眩しいものだった。何よりも、その妖しいまでに澄んだ冷たく深い光を湛えた宝玉のような瞳は。それは既視感？ それともつい数分前に覚えた感覚？

「この日本を安住の地、とでも勘違いしていないかな？ ……この国にも、邪魔な人間はいるんだよ？ 法師だの、陰陽師だの 滝口だのさ……」

少年の形の良い唇が動き、そこから耳によく通る声が紡ぎ出される。

「滝口？」

一瞬だったのか？ 永遠だったのか？

魅入り、囚われた男を開放させたのは、他でもないその凄艶な牢獄とみを持った少年の言葉だった。

その口からもたらされた法師や陰陽師という言葉。それは確かに聞き覚えがあるものだった。男はそれを、この国の魔道師の類だと認識している。

しかし、反芻したその言葉は初めて聞く語彙だった。

「滝口というのは、この国の狩人。退魔の武士だよ……捕食を行う以上、間違いなく、お前も狙われる。いや。案外、もう狙われているかもね。ここも安住の地ではないんだよ……だから、さ。だから、僕がお前の庇護者になってあげようと言っているんだ」

「……その見返りは何だと言うつもりだ？ 服従しろ、とでも言うつもりか？」

少年の申し出に返されたのは、殺気の籠った言葉。

自尊心プライドに触る。

吸血鬼という存在はそれの強い者が多い。絶対者。その意識が極めて高いためだ。

彼とて然り。

他人に付き従える意志など、持ち合わせていないのだ。

しかし、その殺気に当てられながらも、少年は声を出して笑った。遊び場でじゃれ合う子ども達が発する、それと同じ笑声。夜闇に、薄汚れたビルとビルの狭間に、酷く不釣り合いな明るい声が響く。

無然とそれを見る夜魔の男。それ気にも止めず一頻り笑い終えると、少年はようやくやく会話を再開させた。

「……何か勘違いしてるよ。童」

その瞳により強く灯る冷酷。

無邪気に昆虫を破壊す子どものような。

そして、美しい顔に浮かぶ、純粹で、残酷な微笑み。

「服従？ 隷属の間違いでしょ？ 下賤の者が何、戯言をほざいているんだい？」

「くくくっ……下賤、と来たか……」

少年の台詞に、彼は嗤った。それは怒りを通り越した冷笑だった。「貴様こそ……異国の俗物風情が何をほざく……何のトリックを用いたのかは知らんが、単に私に追いついただけのこと。それしきの事で、自身が絶対的な優位に立つ者、とでも思い上がったか？」

耳を打つような音が走る。

それは先ほど壁面を溶かした手から聞かれた音。

その表面が異質に硬化していくのが見て取れる。

「我は爵級の者ぞ……ヴィクトラック魔装毒手。二つ名さえ持つ我を本気で怒らせたこと、償わせねばならんようだな」

その目が赤く、妖しく輝く。隠していた妖気を開放する。

禍々しい邪気が辺りには立ち込める。例え、その気配に疎い者でさえも、今の彼は絶対的な恐怖の権現として映るはずだ。

爵級。

その階級は、クラス現存する吸血鬼に於いて、絶対的な頂点に限りなく近い存在なのだ。

「この国には知る由もなからうが……」

日本。この国はその化け物とは縁遠い。

吸血鬼。その人外の存在がこの国に伝わったのは、つい近世の事なのだから。

吸血鬼という言葉にしても大正、昭和期以前の日本に存在したのか？ それさえが不明とされている程度なのだ。

「辺境の島国風情の虫けらが、その我を従えさせようなぞと……無知も罪。冥府で己の無知を呪え」

少年に立ち塞がった恐怖。それを彼は演出するかのように、ゆっくりと、威圧的にその歩みを進める。

縮まる二つの存在の距離。

「無知も罪、か……良い事を言っね。同感だよ……」

だが、少年は動じない。それどころか、先の言葉を反芻し、彼をせせら笑う。

「決めた……」

続けて呟く。

本性を現した夜魔の男は、その呟きの先を待たず、突如と駆けた。不敵に笑みを浮かべたままに、死を宣告した獲物を狙い、文字通り、牙を剥く。人を死へと、または、彼らの下僕へと誘うその象徴が口元に覗く。

「お前はもういらぬや」

硬質化され刃物となった五指が夜闇を切り裂く。それを跳躍し避けた先、中空から男を見下しながら、少年は言い放った。

声の在り家を見上げ睨むと魔装毒手も、躊躇することなく地面を蹴る。

「……命乞いをしようとも、もう聞かぬぞ！ 八つ裂きにしてくれる！」

吸血鬼は宣告する。闇を流れる弾丸。男の体は目にも止まらぬ程の速度で、少年へと迫っていた。その勢いを、己の力の総てを乗せた、重い一撃を放つ。

低く衝撃音が響いた。その衝撃に大気は震え、路地裏に面する無数の硝子窓が瞬間、碎ける。

「……そうだね……命乞いは聞かないよ」

しかし、その一撃を易々と少年は受け止めていた。ガラス片の雨の中、満面の笑みを湛えながらに。

「なっ……!?!?」

全身の力を籠め、少年のか細い片腕に囚われた腕を夜魔の男は引き離そうとするも、その部位は微動だにしない。

コンクリートを融解させたように。自らの異名を欧州に轟かせたように。そこから毒素を放ち、少年を犯そうとするも、能力は発動しない。

不可解。驚愕。混乱。

「ほら……気を付けなよ？」

ウィクトラック

思考がまとまらない魔装毒手。嘲笑い、少年はその男の全身を軽々と振り回した。そして、着地際に舗装された地面に、躊躇するこ

となく叩き衝ける。

「ぐはっ！」

男の口から吐き出される鮮血。破碎されたアスファルト片が砂埃と舞う。

「駄目じゃないか……気を付けろって教えたでしょ？」

灰色の帳の向こう。苦痛に歪んだその顔を、少年は心底、愉快に見下していた。

そして、掴んでいた手を開放すると、その手を頭に巻いていたバンダナへと遣る。

「破壊された内臓の再生に、どれくらいの時間がかかるのかな？」

……爵級だなんて強がるくらいだから、そんなにかからないんですよ？」

言いながらに、少年はバンダナを解いた。

バンダナ。そう言うよりそれは、酷く年季の入った布切れだった。その布切れを、ふさりと男の顔にかける。

「江月照らし松風吹く」

そして、呟いたのは歌。

「永夜清宵何の所為ぞ」

意味深に、その句を詠み上げる。

濛々とした灰色は地面に戻る。

戦音に代わり聞こえたのは、遠く感じられる街の喧騒と、それに混ざる絶え絶えとした呼吸音。

そして、少年は男の顔を隠していた布を再び手に取った。

その下から現れたのは、異様な汗を浮かべた苦痛に満ちた男の顔。「……どう？ 苦しいでしょ？ 再生が利かなくなっただんじやない？」

少年は笑顔ながらに、その苦しげな吸血鬼の顔を興味深く見詰める。

「き、貴様……な、何をし、た……？」

「これはね、頭巾、なんだ。尤も、単なる布切れじゃないことは身

を以って解したかな？」

狂った呂律で訊ねた異国の魔物に、少年はその頭巾をバンダナとして再び、その小さな頭に巻き付けながら返した。

「聖布。君らの国にもあるんじゃないの？ 聖人なんて呼ばれる輩が残したさ……」

男を見下ろし、教える。

「実験は成功だね。これでもう、本当にお前は用済みだよ」

続けて、そう呟くと少年は微笑んだ。

それは無垢な天使の様な笑み。

しかし、恐怖という感情を真に悟らせる笑み。

「ま、待て、」

「馬鹿はいらないんだ。自分の状態と、現状。相手との力量の差も量れないような馬鹿はね」

恐らくは魔装毒手ヴィクトラックの口をついたであろう命ごいを制止し、笑顔のまま少年は言い放つ。

「 なっ!?!? どう 」

「 バイバイ 」

男が発しようとした言葉を待たず、少年はさつさと別れを告げる。説明することが無駄だと言わんばかりに、その表情のままに、右足を男の顔へと踏み下ろす。

ぐしゃり。

肉と体液の飛び散る厭な音。辺りを斑に彩る赤。

血の臭いの立ち込める路地に背を向けて、少年はそこを後にする。

「 残念だね 祭りの始まりに立ち会えなくて、さ 」

声に反して、その表情かおに、決して遺憾な色はなく。

通りに出ると小さな少年の姿はすぐに人込みに紛れ、消えた。

night cathedral - 1 ”穢れた聖女”

「F a b - 2 6 ・ S u n / 0 0 : 2 1」

「わたなへしお 渡辺詩緒。 お前を殺す人間の名だ」

鯉口を切り、抜刀する。刀身を月光に反射させ、古雅な業物がその姿を現す。その刀 おにきり 鬼切をゆっくりと横構えすると、滝口は静かに相對する妙齡の女にそう告げた。

その滝口は黒一色に身を包んだ少年。

創り物。そう見紛うほどに整った美しい顔にある黒い瞳に、冷ややかな殺氣の色を宿らせる。

月を浮かべた空の下。

未だ眠ってはいない都市。その喧騒から離れた教会にある、三つの人影。

「気をつけなさい、詩緒！ その鞭は魔力を帯びているわよ！」

滝口の少年の後方。白いハーフトのポケットから紙片を取り出し、それを斜に構えたと少女は警鐘を發した。

少女が構えたのは、材質自体は何の変哲もない紙である。しかし、単なる紙切れではない。

その紙片に記されるは、せいめいきせき 晴明桔梗。そして、ききゅうじゆん 急急如律令の呪文。それは呪符と呼ばれるものだった。

一見、落書きのされた紙切れにしか見えないそれには、しかし、陰陽五行の秘術が封じられており、キーワード 設定された起動言語により、内包された呪術を瞬間的に発現させるマジック・アイテム 魔術道具なのである。

つまりは、その少女は魔術師。彼女は、この国の生み出した世界的水準で見ても高度に完成された魔術体系の行使者、陰陽師なのである。

そして、その陰陽師の少女もまた、美しかった。異性ならずとも見惚れさせるに十分過ぎる容姿と、少女と言われる年齢ながら、大

人顔負けの見事なボディラインを身に着けた衣類越しに見せている。滝口の少年と陰陽師の少女。

その二人と対峙するは、金髪青眼の異国の女性。

禍々しい邪気と共に、この国を母国とする人種からすれば、規格外サイズの凹凸おうとつが、嫣然えんぜんたる容姿が、強烈な色香を漂わせる。

しかし、それは常世の美であった。生ある瑞々しい美しさを放つ少女とは、対極にある美しさだった。まやかしの、妖かしの美貌なのだ。

そして、その女の手に存在する武器がそれを益々、強めていた。

少女が注意を促した得物。革製鞭レザー・ウィップである。

「お前に言われなくとも、解っている」

その鞭を一瞥し、先の警告に余計な世話だと言わんばかり呟くと、詩緒は女との間合いを詰めるべく駆けた。

「陰陽律法の従者風情が！ 出しゃばり過ぎさね！」

吼え、女はその手の鞭を振るう。

それ自体が意思を有する生物のように。風切り音を発し、女の鞭は空間を走る。制空権を、己が領域を誇示する如く、唸りを上げる。剣士を拒むべく、迎え撃つ鞭。しかし、滝口の侵攻は止まらない。戸惑うことなく、その武器の持つ長い間合いに踏み入る。

「誰が従者だ」

無表情のままに、ではあるが、そう不服を漏らし、少年は側面へとその身を逃がす。飛来した鞭を避ける。だが、尚も女の武器は詩緒を追走していた。獲物を執拗に狙い続ける蛇さながらに、それは再び少年に襲い来る。

背後に迫る、その攻撃をも。視界の外にある敵の得物の動きを、滝口は把握していた。その鞭の追撃を一切の無駄を省いた動作で回避して見せると、瞬間、少年は女との距離を詰める。回避運動を自らの間合い 斬間きしまへの跳躍動作と連動させていたのだ。

間合いの広い武器の有利性は、懐に潜り込んでしまえば、逆に不利なものに変わる。教科書通りの戦術を、詩緒は常人離れした反射

能力、反応速度、状況把握能力を以って、唯、当たり前のことのように、淡々と高次元で実行していた。

「甘いねえ。ぼうや」

しかし、男を誘う娼婦のような甘い声を発し、向かい来る滝口を女はしたり顔で迎える。その口端に覗くのは鋭く異常に発達した犬歯。人間を死へと、彼女らの下僕へと、誘う魔性の牙。

女は鞭を片手に、空いた左腕を振るう。少年を迎撃すべく振るう。その手で獲物を捕らえるべく振るう。

「ちっ！」

その女の受動は、少年の予想していた速度を遥かに凌駕していた。一つ、零し。刀を振るうことも出来ずに、詩緒はその細く白い腕を後方に跳躍してかわす。空を裂く、女の細腕。その動作に風が唸りを上げる。

カウンター・ブロー

回避された反撃打撃。しかし、少年の回避運動に目を細めつつ、女は舌をぺろりと上唇に這わせる。嬌態を見せる戯れ女さながらにそれを回避されることも、女の計算の内だったのだ。直後、妖しく閃く鞭。少年の着地点へと、それは伸びる。

「くっ！」

詩緒は防御すべく、手にした刀を構えた。

轟音。

大気を派手に振るわせ、接触した滝口の刀は、女の鞭に常識では考えられないほどの勢いで弾かれる。その作用は手にした刀だけに留まらない。後方へ掛かる強烈なベクトルが少年の身を襲う。

「くっ！」

呻いた言葉を置き去りにして。強い衝撃に襲われた黒衣の滝口の体は、一般的には非論理的に発生したものであるにも関わらず、その物理法則に従うままに、勢い良く弾き飛ばされていた。

「アハハッ！ 先に貴方から頂こうかしらねえ！」

悦に浸る声と共に、詩緒の飛ぶ先へと、女は身を躍らせる。それは人間の持つ限界速度を遥かに凌駕した速さであった。

しかし、超人的な加速をした女の、その眼前に突如と大地が隆起し立ち塞がる。

「っ！？ おふざけをつ！」

女は非難を叫びながら、足に力を籠めると、それを軸に急停止をかけ、その事象を発生させた相手 陰陽師を睨み付けた。だが、勢いを殺しきれはしない。

「くそつたれ！」

野卑た言葉を吐き出すと、女は細腕を現れた壁面へと突き出した。力強く、躊躇することなく突き出される華奢な正拳。

辺りにやたらと派手な破碎音が響く。

女の叩きつけた拳が、例え、眼前の岩壁を砕くことが叶ったのだとしても。五体が満足のままに、活動を続けることが可能なはずはない。

その衝突音の音量は、力学的に考慮して、生身の体がその衝撃に耐えうるはずがないことを言質しているかのようだった。

しかし。濛々と立ち込める土埃、その岩壁の末路の中から、女は妖艶な笑みを浮かべ現れる。

「 露払いなんて、なんてつまらない任務なのかしら…… そう思ってもいたけど 。 従者と違って、貴方は私を愉しませてくれそうね…… 伊達にバチカンにも陰陽師としての勇名を轟かせたワケじゃない、そういう感じかしら？ 陰陽律法・賀茂瑞穂……」

無駄に。そう表現できる、露出面積の極めて広い赤い皮製の上下。拘束具のように身体にぴたりと張り付く女を強調した、その申し訳程度に存在する白い肌を隠す部分。そこについた汚れを、鞭を持たない片手で払いながら、女は妖しく嗤った。

「それになんと言つても、戦闘後がとても楽しみだわ…… 貴方たち二人とも、とても綺麗。まさか、任務で極上のご馳走にありつけるなんて、夢にも思わなかったわ…… どんな甘美な血なのかしら？ 想像しただけでゾクゾクしちゃう」

「本当に悪趣味ね。吸血鬼らって…… それとも露出癖があるアンタ

は、その中でも特にイツちゃってる電波系のキャラなのかしら？」

恍惚と瞳を潤ませ、更に妖しい色香を漂わせる女に、陰陽師の少女
陰陽律法は辟易とした表情を見せる。

「フフツ……随分と余裕を見せているわね。陰陽律法。前衛のいな
バックス
い後衛の貴方に、私に勝てる見込みはないのよ？」

勝ち誇ったように腕を組み、大きな胸をさらに強調するかの様に
突き出すと、女は少女を見下した。

「甘いわね……私の従者があれしきで、やられる程度の実力だと思
レベル
ってるわけ？」

ふん。と、鼻で一つ笑い、びしっと人差し指を女へと差し向ける
と瑞穂は答える。

「……おい」

微かな鈴の音。それが聞こえたと思うと、件の話題に上がって
いた少年は、少女の横に立っていた。聞かれた音源は少年の左手首。
そこに吊られた小さな銀色の鈴である。

「あら……意外に早いお帰りね……飛距離からすると、もう数秒く
らいは余裕あると思ってたんだけど……」

笑顔を引き攣らせ、瑞穂は相方の滝口を見る。

「……誰が従者だ」

その感想には一切反応せず。いつもと変わらぬ無表情で、少年は
もう一度、先と同じ台詞を吐いた。

「い、いやねえ！ 冗談よ！ 冗談！ ほら、売り言葉に買い言葉
とか、その場のノリとか、あるでしょ？ 空気よみなさいよ？」

たじろぎながら瑞穂が弁解するも、詩緒の表情には全く変化が見
られない。

「……ね、せめてアンタ、突っ込み入れるときくらい、表情変えな
い？ ……怖いわよ……」

気圧された少女は逃げ腰になるも、そうばやいていた。

「さっさと片付けるぞ」

緊張感の欠落した会話の流れを断ち切るように、視線を女に向け

て滝口は呟く。

「武器について何か解った？」

一変、真剣な面持ちで滝口に視線を追い、陰陽師は聞いていた。「破壊力はない。触れた物体を強烈に弾く能力……今の状態では。そういう前置きを置いて、現状で判明したのは、それくらいだ」

一つ目の情報。それは三人の足元、地面の状態で推測できたことである。担い手が恐るべき怪力を持ち、詩緒を吹き飛ばすほどの衝撃を産んでおきながら、振るわれたはずの鞭が地面に接した場所には、陥没も亀裂も生じてはいないのだ。それは何らかの不可思議な制約。破壊能力の限定化が魔力とされて付与されているであろう推論を導く手がかりだった。

二つ目の情報は、その武器を受けてみて判別した事実を単に述べただけである。身体に掛かった負荷は異常にあるにも関わらず、詩緒の体にも、何より実際に触れた彼の刀の刀身にも、一切のダメージはなかったのだ。単に吹き飛ばされただけなのである。

補足するならば、それによる二次的被害も詩緒にはなかった。叩き付けにより被るであろうダメージは、弾かれながらも空中で姿勢を維持し、着地を完璧に行うことで、勢いを完全に逃がし殺し防ぎきったのである。

「なるほど、ね……」

妙に納得したように詩緒の言葉を聞くと、瑞穂はそう口を開いていた。

「貴方、名前は？」

そして、女へと問う。

「ルチア。ルチア・ダレッツォ。鋭いわね。流石は陰陽律法のソーサラーテクニスト従者……といったことこかしら？ 正解よ。私の鞭は『聖マルタンの虚構革鞭フーフラフ』。その能力を見破ったご褒美に名前くらいは教えておいてあげるわ」

投げキスを少年に贈り、ウインクを一つ。

それは絶対者のゆとりがさせる行為だった。自身の持つ武器の正

体を知られたところで、人間なぞに後れを取る可能性など皆無であると吸血鬼ルチアは考えているのだ。

「誰が従者だと何度言わせる？」

「……触れれば弾き飛ぶ。それだけ。でも、それだけで十分。一人を弾けば、必然的に一对一の状況になる。一人で爵級わたしに人間あなたたちが勝つことは不可能……加えて言うなら、さっきの鞭捌きは本気じゃないわよ？ ……本気になれば回避不能、と覚えておきなさい。解る？

もう貴方たちは『詰みに陥った（チエック・メイト）』なのよ」
詩緒の言葉を無視し、そう告げると、妖しく微笑むルチア。

「ルチア。貴方は生前、WICKウィックに在籍してたり……なんかしないわよね？」

WICKウィックとは、世界共有魔導文化保護同盟の通称である。世界規模で動くこの組織は、社会的に疎外されている魔術師・魔物・聖霊の保護を目的としており、しかし、それらが人間に害ある存在である場合は抹殺も行なう。

瑞穂が陰陽律法ソーサリーテキストと異名を持つに至ったのも、この組織と関係を持つたことに由来する。

数年前に、この組織がこの国に調査団を送った際に、瑞穂は案内者タイの任に就いたのだ。その時に発生した事件を解決したことにより、その二つ名を裏の世界に轟かせることになるのだが、それはまた別のお話である。

「ふふふ。残念。その質問には答えられないわ。ご褒美は名前だけ……女には秘密の一つや二つ、付き物でしょ？」

ルチアの返答に舌打ちをすると、瑞穂は困惑の表情を見せた。

night cathedral - 2 " 边境の吸血鬼 "

「Fab - 26 . Sun / 00 : 30」

「どうかしたのか？」

陰陽師に問う滝口。問いの内容は少女を気遣うようで、しかし、少年はいつもの無表情のままである。

そして、問われた少女の視線の先には、鞭を手にした妖婦がいた。
「^{ターゲット}雨月が、あんな西洋の魔法武器^{マジックアイテム}を持つてるはずがないでしょ？ だから、考えられるのは『滝口・陰陽寮』（わたしたち）以外の、それも国外の組織の人間が動いていて、吸血鬼^{ミイラ}取りが吸血鬼^{ミイラ}になった ってコトよ……困ったわね……陰陽寮^{わたし}的には他の組織と問題になるような接触は、できるだけ避けたいのよね……」

とりあえず、瑞穂は憶測と自らの立場を呟いてみる。

他の魔術組織と接触。特に外国の組織との接触には、様々なデリケートな問題が存在する。

思想、価値観、そして魔術体系の違い。それは思いの他多くの、そして、深刻な軋轢を発生させるのである。

それは表の世界に於ける社会・世界情勢と何ら変わりはない。加えて、この問題に於いて、陰陽寮という組織は殊更に不利な立場にあると言えた。非公式とは言え、その組織は政府機関だからである。

他の大半の魔術組織と違い、その対応は、日本という国自体の対応と執られてしまう可能性・危険性を孕んでいるのだ。

それに起因する確執。その報復行為は、つまり、日本という国自体を対象としたものになりうるのだ。

そして、その報復手段は当然、魔術によるものである。

それは決して直接的に表には顕れない、しかし、大規模な犠牲を確実に伴う『静かなる大戦』（サイレント・ウォー）を引き起こし

かねないのである。

多少大袈裟にはあるが、陰陽寮かしょう配属術者の立場を説明するとすれば前記の通りであり、それが公人としての建前だった。

だが、瑞穂の本音を突き詰めれば、極めて簡潔シンプルな答えが導き出される。

上司兼友人の愚痴を、彼女は色々な意味で聞きたくはないのだ。

「くだらない」

そういう困惑の言葉に、間髪入れずに返された詩緒の反応は、素っ気ないものだった。

しかし、その滝口の台詞を陰陽師は容易に予想していたようである。

自らの立場を理解しないことに対する抗議や、怒り、悲しみなどという感情は、少女の顔にはない。

やっぱりね。そういう言葉が如何にも聞こえそうな表情を、彼女は変わりに見せていたのだから。それを端から見越していたからこそ『とりあえず』の発言だったのである。

「目の前に『魔』が存在するなら、俺はただそれを排除けすだけだ」

『魔』。

人ならざる存在。人ならざる力を行使する者。人の世に仇なすそれらを、彼ら滝口は、そう総称する。そして、それらを排除するところこそが、彼らの活動目的である。

「迷いがあるなら下がっている。邪魔だ」

少女を一瞥もすることなく。吐き捨てるようにそう言うと、詩緒は刀を構え、単身、地を蹴っていた。

「いい覚悟ね、従者……でも、大丈夫よ」

その急襲に驚きを浮かべることはない。強襲する少年に、ルチアはただ妖しく微笑む。

「苦しませはしない。快感の渦の中で息の根を止めてあげるから」

無駄に色香を漂わせながら、手にある鞭を翳す。

「安心して、お逝きなさい」

「従者じゃない。しつこい奴だな」

向かう者と迎える者の口が動き、それぞれが違う意図を込め、言葉を発する。

そのルチアの腕が、ゆらりと動いたかと思うと直後、視界から、その腕の実像は消え失せていた。残像を見せる異常な腕の動きに繰られ、女の得物は姿を失う。そこに存在しない物体のように。しかし、聖マルタンの虚構革鞭フーラフラウは超高速で駆け巡り、その周囲の空間を一瞬に制圧していた。風を鋭く切り裂く音だけが、それがそこに確かに存在しているのだと教える。

相対する詩緒は視覚を捨てていた。感じる鞭の魔力を頼りに、自身の先の空間にその軌道を思い描く。その脳裏にあるのは、線が幾重にも重なることで形成された球体。だが、それは決して完全なる密閉空間ではない。如何に高速で動いているとはいえ、それは左手を基点に動いている一つの線で作られたものに過ぎないのだから。

剣士の感覚では、斬り込む隙間は明らかに存在している。

だが、同時に滝口は理解していた。

それは畏なのだ。女は誘っているのだ。

しかし。

詩緒は躊躇することなく、その誘いに乗っていた。

「素敵よ貴方」

真つ直ぐと誘惑に挑む少年を官能的に嗤った、刹那。

「がっ!？」

ルチアは炎上していた。

その身を炎に巻かれながら。見開いた目で、ぎろりと陰陽師を睨む。

「隙だらけよ。ルチア」

慢心を見せていた、人間を見下していた吸血鬼ルチアの隙にずけずけと付け込み、瑞穂は彼女を嘲笑う。

「ソーサラー・テクニスト
陰陽律法！」

ルチアはブロンドの髪を逆立て、怒りを叫ぶ。殺気だった魔性の本性を覗かせ、纏わされた炎をその邪気に霧散させる。

だが、それに少女は怯みはしなかった。

自分の役目を十分果たしたことを、そして、後は少年が同じように役目を果たすであろうことを、悟っていたからだ。

「いいのかしら？ 滝口を忘れているわよ？」

くすりと愛らしく微笑い、瑞穂は指摘する。

「ッ！？」

滝口。その単語をルチアは知りしなかった。しかし、自身に迫っていたもう一つの敵を、瞬時に思い出す。自身が従者と決め付けていた生餌である。

炎上したそのときでさえも、聖マルタンの虚構革鞭の構築した結界は生きていたはずだ。

ならば、それはそこに 唯一、用意していた突入可能点に、飛び込んで来るはずである。

「お痛が過ぎるよ！ 下衆どもがっ！」

鋭利な爪をその空間へと突き上げる。反射を許さぬような。突然に。人間には、そうとしか感じられないような速度で凶器を疾駆させる。

力なく宙にぶら下がる肢体。心臓を刺し貫き、胸部を貫通した細腕で支えられた美少年の亡骸。

芸術性の高いオブジェ。

そう。それは間違いなく、最高の素材を殺害することで完成した、彼女の快楽を表現する最高の作品。

ルチアの脳裏に浮かんだ映像には、鮮明にそれが描かれていた。確かにその隙間にしか、少年は飛び込む余地は無く。

そして確かに少年は、そこに飛び込んでいたのだ。だが。

「おやっッ！？」

激痛にルチアは鳴いていた。吸血鬼にとってあるべきはずの幻像は、痛覚によって一瞬にして掻き消される。

跳ね上げられ、宙を舞っていたルチアの細腕がぼとりと、持ち主の足元に転がった。

詩緒はルチアを上回る動きで、自分の命を奪うべく突き出された凶爪を腕ごと断っていたのだ。彼に宿った闇の力の一端を、瞬間的に解放し、爵級の動作をも凌駕して見せたのだ。

だが、何が起こったのかを理解できぬままに、しかし、ルチアは嗤っていた。

射抜くように自らを見る少年の手には、所謂、日本刀しか握られていないのだ。

例え理解不能な、不利な状況にあれども、吸血鬼を滅ぼすには、それでは不可能なことから。

それはその妖婦にとつて、単なる鉄の刃に過ぎない。この世ならざる魔性を、夜魔の頂点に位置する高貴なる種を、討ち滅ぼす類の銀ではないのだ。

「滝口。オレは『魔』を討つ、退魔の武士だ」

だが、滝口という言葉を知らぬルチアには、その事実を知るはずもない。

彼らはその刃に、自らの魂である日本刀に意思を籠める。

断てぬはずのない、実体のない幽体、魑魅魍魎をその刀で断つために。終わりのない穢れた命を断つために。

不浄を斬り断つ。

その意思の乗った刃に、断てぬ存在はないのだ。

加え。その黒衣の滝口の振るう刀は聖刀。『魔』を断つ力を刀身に宿した刀。鬼切の号を持つ業物なのだから。

頸部に向け、閃く斬光。

妖しく嗤ったままの顔で、ルチアは二度目の天逝を迎えていた。

「吸血鬼？ それって、ドラキュラってこと？」

みなもと ことね
源琴音は愛らしい大きな丸い目を、さらに大きく丸くすると幼馴染みの言葉に問い返した。

「……そうそう。そうザマス。ええ、ええ。ルイよ。カーミラよ。エリートよ。D I Oよ。アルクエイドよ」

それに返って来たのは、酷く投げやりな瑞穂おさななしみの答。当然、種族分類名称と個体名なまえは等号そうざマスではない。架空の名称とはいえども、ドラキュラも、ルイも、カーミラも、エリートも、D I Oも、そして当然アルクエイドも、一個体、一個人名でしかないのだから。

だが、日本人の世間一般の認識とは、その程度のものなのだろう。例えるのならそれは、一定年齢経過男女おしとん・おはんが、家庭用テレビゲームの全てをファミコンであると断言しているような、酷く大雑把で乱暴な発言なのである。

だが、それこそが、その生命体に対する日本人の認知度を示しているであろう。事実、琴音のような発言は、この教室にいる大半の一般生徒たちの間では、まかり通るであろうはずなのだから。

「も、もう……そんな冷たい反応しなくてもいいじゃない……そりゃ、まだ私は、そういう知識に疎いけど……」

あしらうような態度に出た少女に、琴音は沈みがちに呟く。

「……ちよっと、ひどいガンス」

しかし、瑞穂がそういう態度をとってしまう気持ちも解らないではないのだ。だから、彼女を一方的に悪人にしないようにフオローとばかりに茶目っ気を出したりもする。

しかし、似合わぬボケは、結果、ますます瑞穂を呆れさせる効果

しかなかった。

「……よくそんな知識は持つてるわね？」

「……か、勘違いしないで！ 友達に聞いただけ！ す、少し知っているだけだよ！？」

しばしの沈黙。

頬を真っ赤に染める琴音。

自らが発端を振っておきながら、啞然とし続ける瑞穂。

「……琴音が一般の女子高生なら、別に構わないのよ？ でもね、貴女は自分の意志で滝口になったんでしょ？ そういう知識の有無は、琴音のみならず、琴音の関わる人たちの生命にさえ直結するのよ？」

咳払いを一つして、先の発言をなかったことにすると、瑞穂はその世界の後輩である少女に釘を刺す。

「……うん。ごめん。分かってる。学校の勉強に手一杯で……なかなかそつちの知識吸収に、時間がとれなくて……」

その反応に感謝しつつも、痛い過去をぶり返さぬようにそれを表に出さず、神妙に琴音は呟いた。

「そういえば、最近は短い時間でも、単語帳開いてたりするわね。なんで？ 琴音って成績そんなに悪くないじゃない？ 勉強少女にイメチェンってワケでもないんでしょ？」

「瑞穂と詩緒くんの成績が良すぎるのよ……一緒にいると釣り合いがとれないってどうか……」

溜息に続いて口をついた言葉。しかし、それは表向きの発言に過ぎなかった。事実、琴音にとっては、瑞穂の成績の良し悪しは大した問題ではないのだ。重要なのは詩緒という少年の成績だけなのである。

少女は、その想いを寄せる少年と同じ進学先を選べることを、一つの目標にしているだけなのだ。

「……そう？」

腑に落ちない表情を瑞穂は浮かべる。

「う、うん。そう　で、それで？　その吸血鬼って、やっぱり欧州ロバから来たの？」

自身のことから遠ざけるべく、意図的に話題を戻し琴音は訊ねた。「……それも残念ながら、誤った認識ね。吸血鬼って、何も西洋に限った魔物じゃないのよ？」

吸血鬼という今では非常にメジャーな怪物が、この国に伝わったのは確かに近世である。しかし、イメージ的に程遠いような中国を始めとして、アジア圏に於いても、人の生き血を求める魔物は古来より存在するのだ。

「そうなんだ……じゃあ外国から来たのね？」

「それも違ったりするのよね。吸血鬼という単語が生まれたのは、確かに近世のコトよ。でもね。そういう妖あやしが、この国にも少なくとも江戸時代にはいたの」

陰陽師は語る。

「『雨月つづき』……今回の標的の名前。それはね、本名なんかじゃなくて、便宜上、陰陽寮わたしたちが付けた名前なの。その由来は、彼が初めて、その存在を記された文献　いいえ、違うわね。文学作品に由来するものなのよ」

「文学作品？」

オウム返しに訊ねた琴音に、瑞穂は答えた。

「そ。上田秋成著、『雨月物語』よ」

「え？　それって授業でも聞いたような……確か江戸時代の怪奇説話集だよな？」

「そうね。安永五年、1776年に刊行された作品ね」

怪訝そうな顔をした琴音に、瑞穂は笑う。

「可笑しいわよ、琴音。『魔』なんてものを実際に見といて、文学作品だからフィクションとでも決め付けるの？」

「そ、それは、そうかも知れないけど」

「事實は小説よりも奇なり、よ。実際に私も詩緒も、その後、交戦したのよ？　その雨月とね。そして、今回の厄介事は、どうもそれ

だけじゃないみたいなのよね……」

深い溜息を吐いて瑞穂は零す。

もう一つの厄介事。ルチアという人物の来歴を彼女が知ったのは、何を隠そう、その雨月の口からだったのである。

night cathedral - 2” 辺境の吸血鬼” (後書き)

「解説(?)」

ドラキユラ：日本に『吸血鬼』という単語を産み出させたブラム・ストーカーの傑作怪奇小説『吸血鬼ドラキユラ』に登場する吸血鬼。正に神祖(菊池秀行著『バンパイアハンターD』より)……って解説の必要はないか(笑)決して初の日本語翻訳版で彼が語尾に『ザマス』をつけていたわけではない(笑)これは藤子不二雄A先生の『怪物くん』に登場するドラキユラの口癖であり、某『らきすた』(隠すところミスった)の前半OPでもパロられている。瑞穂と琴音の会話しかり。

ルイ：アン・ライスによる小説『夜明けのヴァンパイア』の映画化作品『インタビュール・ウィズ・ヴァンパイア』にてブラピの演じた主人公である吸血鬼。僕はこの作品を見てないんですが…おもしろいの？

カーミラ：ジョゼフ・シエリダン・レ・ファニユ著『吸血鬼カーミラ』に登場する女性の吸血鬼。漫画『ガラスの仮面』にて姫川亜弓が演じた役でも有名。

エリート：水木しげる著『ゲゲゲの鬼太郎』に登場する吸血鬼。こいつファミコンACT版の1ステージ目のボスだったけど、ライフ制ではなく一撃死。ガメオベアになり易い激ムズシステムってメイ^{ディオ}ンターゲット層(低年齢)無視してね？いや、ハマったけどさ(笑)

ディオ：「無駄無駄」「タンクローリーだ！(ロードローラーだ！でも可)」で有名で「あ、ありのままおこったことを話すぜry」の名セリフをポルナレフに吐かせたという偉大なる功績を持つ神・荒木飛呂彦先生の『ジヨジヨの奇妙な冒険』に登場する吸血鬼。石仮面云々は省略。スタンド『ザ・ワールド』の能力により、おそらく最強の吸血鬼では？(笑)

アルクエイド：僕より読者の方々の方が間違いなく知っているとい

う説明する必要はないだろうけど説明するとTYPE-MOONの『月姫』のメインヒロインである吸血鬼の真祖。『Fate/stay night』は面白かった！はまった！『Unlimited Blade Works』サイコー！な僕は今からでもプレイした方がよろしいでしょうか？関係ありませんが心の叫びを…『BW銀第4部』まだですかー！<>

…下らないあとがきを長々とすみません^^；

night cathedral - 3 "テンプレーション"

「Fab - 26 . Sun / 01 : 04」

「へえ。すごいね、君たち」

突然と聞こえた声に、二人は空を見上げた。その声は確かに頭上から聞こえたのだ。

丘にある広い霊園を有する教会。付近には、その礼拝堂しか建物はない。しかし、声の在り処はそれよりも上だった。

そこにあるのは都会の空。まして街は未だ眠りに就いてはいない。数えるほど。そこには僅かにしか星は見えず、広がるのは人間に初めて恐怖という感情を教えたであろう闇だった。

その闇を仰ぎ見た、黒衣の滝口と陰陽師の目に映ったのは少年。美しい顔立ちの童。

それが夜闇にぼつりと浮いていたのだ。

ゆっくりと見えない階段を降りてくるかのように。そして、聖堂の屋根を飾る十字架を横ぎり、その美童は宙を歩み来る。真っ直ぐと、妖婦の最後に居た場所へと舞い降りて来ていた。

灰へと還ったルチアが、その地面に残こしていたのは、纏っていた赤のレザーボンテージと聖マルタンの虚構革鞭フーフラウ。そして、かつて彼女の信仰した象徴、その名残ロザリオのみだった。

この世ならざる存在モの末路は、ただ塵と消えるのみである。それは吸血鬼として例外ではないのだ。

頭にバンダナを巻いた少年は、優雅な身のこなして着地した。

水面に舞い降りる白鳥のように。演出された場面さながらに。それは絵になる光景だった。

見た目は小学校高学年の児童程度の身体。その一見、華奢で脆弱な身体から放たれる、凍てつくような冷たい恐怖が感じられなかったのだとしたら。

その様はあたかも、闇に墮ちた者にさえも、等しく救済の手を差し伸べる天の御使いである。

「爵級かのじよを葬ることの敵う、滝口と陰陽師……居たんだね。まだ、そういう力を有する下等生物にんげんも……」
くすりと屈託なく微笑い、足元の遺物をぼんやりと眺めながら少年は呟く。

「……アンタが雨月、ね？」

見た目、滝口の少年と陰陽師の少女よりも幼い彼に。瑞穂は身構えながら訊ねた。

雨月。

長き眠りから目覚めた『魔』。

力を秘めた聖布を、とある寺院から奪いし魔性。

詩緒と瑞穂の追っていた標的である。

「如何いかにも、そうだけど？ 僕に何か用かな？」

少年は。雨月は、あっさりとその質問を肯定してみせた。

己の敵。己の存在を排除しようとする者。滝口という退魔武士と、陰陽師という退魔術師。

そういう知識を間違はなく持つであろう雨月は、しかし、惚けた様子もなくそう言い放っていた。

それは雨月という存在にとつて、彼ら二人は、所詮、障害にもならないという認識の現われなのだ。

そして、その理由の一端を、二人は無意識の内に感じていた。刷り込まれていた。

その魔物の双眸は。

「へえ」

その瞳が瑞穂に留まる。その表情に色気がつく。

ぱつちりとした魅惑的な大きな目を細め、その乙女を値踏みするかのように雨月は乙女を見る。

無垢な子どものような外見に、その様は酷く不釣り合った。

「な、何！？」

ぞくり。

嫌悪を感じさせる視線に抗議を訴えようとするも、瑞穂は寒気に駆られ、背後を振り返る。

「え？」

そこには目の前に居たはずの、美し過ぎるほど整った美童の顔が在った。

か細い子どもの指が、驚きを浮かべた少女の顎を淫らになぞる。そこまで近い距離に、不意に、気付かずに、雨月は現れていた。

「君、とても綺麗だね。人間にしておくのがもつたいないくらいだ」
整った顔にある二つの黒い宝玉に、見初めた美しい乙女を映し雨月は笑う。

「僕とおいでよ」

その凄艶な少年から少女に贈られたのは、甘美な世界への誘い。

その存在に、瑞穂は強く魅せられてしまっていた。否、正確には最初に視られた瞬間から、そうだったのかも知れない。

何も警戒できず、何も考えられず、何も思えず。今はただ、彼の全てに惹きつけられていた。

「あ」

頬を染め、少女は身を焦がす。

「君は僕と久遠くおんを生きるんだ」

愛を囁くような、恍惚とさせる響きが瑞穂を襲う。深く魅入られた彼女に抗う様子はなかった。ただ、受け入れるべく、美童を迎える。

重なる二つの影。

雨月の唇端に鋭い牙が露わになる。

歪な永遠を約束する婚約エンゲージが、乙女の白く細い首筋に刻まれようとする。

「フフフッ」

あどけなく笑う声を残し、少年の姿をした夜の支配者は、直後、背後に身を躍らせていた。

入れ替わるように、抜き身の刀を持った黒衣の滝口が雨月の居た場所に現れる。

糸の切れたマリオネットのように、力無く崩れる乙女をその少年は支えた。

「っ!?」

詩緒の胸の中、呪縛から逃れた瑞穂の顔に玉のような汗が浮かぶ。「大丈夫だな?」

空間を裂いた鬼切を引き戻し、詩緒は訊ねる。そうでありながら、疑問を残し、答えを待たず、直後には跳躍する。『魔』との距離を一足に詰める。

「無粋だよ? 童」

向かい来る滝口を、先と同じ妖しい色を浮かべた瞳で雨月は迎えていた。

「だけど、君も十分に僕と生きる資格を持っているようだね」

「詩緒! ダメ! 魅了される!」

陰陽師の少女が、滝口の少年の背中に叫ぶ。

魅了。夜魔と呼ばれる魔物たちの多くが持つ、人を意のままに惹き付ける魔性の力。理性を破壊し、誘惑のままに人を操る魔力。

雨月の持つその呪縛は、桁違いに強力であった。

賀茂瑞穂という陰陽師は、そういう対呪的能力に、圧倒的に長けた術者だったはずなのである。

だが、不意を突いたとはいえ、その美童は、その陰陽師の魔術防御能力を容易く突破して見せたのだ。

「おや?」

しかし、雨月は異変に気付く。迫る滝口に、それ以上の、変化は見られない。

剣光が閃く。

「残念。僕は君でも構わないのに……余程、鬼切の滝口は我が強いと見える」

斬撃をかわした雨月の姿は宙に止まっていた。

詩緒は雨月の強力な呪詛を、己で在り続けることで一応は抵抗して見せたのである。

意志のもたらず力。

神氣。

それは、そう呼ばれる力であった。

「それほどでもない」

鋭く『魔』を睨みながら、剣士は呟く。

あくまで一応は、なのである。異変は、在るのだ。

そうでなければ。

そして、発動させた神氣を持続させる。

それは迷いなく、切り札を発動させる決意だった。

その危険性を踏まえた上でも。吸血鬼などという、多くの犠牲を産む存在を、一刻も野放しにするつもりはないのである。

そして、何よりも。

この状況下では、そうするよりなく、雨月の能力はそれほどに危険なのだ。

神氣という絶対的な抵抗手段を用いながらも、詩緒は今、詩緒でありながら、詩緒ではないのだから。

魅了の魔力の支配下に詩緒とて在るのだ。

それを無理矢理に神氣によって『己である』と上書きし続けている状態なのである。

「あれ？ 気にならないの？ 僕がその刀を知る理由を？ 僕は過去に当時の四天王と戦ったこともあるんだよ？」

しかし、そんな精神的なせめぎあいにも苦心する滝口を気に止める素振りもなく、音も無く地面に降り立つと、意外そうに美童は口を開いた。

「……知っている。酒吞童子討伐同様、お前の中には四天王が揃って討伐の任に着いたんだっただな」

四天王。滝口の実戦任務に就く者の頂点に位置する武人。滝口た

ちが受け継いで来た、退魔の宝具を担う者たち。

しかし、その江戸時代の四天王全員と同時に相対しながらも、彼は存命しているのだ。

加え、詩緒は四天王ではない。先代の四天王、その一角を担った兄の形見を使用しているだけである。

だが、詩緒にとってそんな過去の事実など関係はない。

この場に立つのは他の誰でもなく、自分なのだ。

「可笑しいね。君は歴史を知ってるくせして、僕と敵対する道を選んだ？」

鬼切、蜘蛛切、雷鳴、鵜貫。滝口の誇る四天王の宝具を以つてしても、僕を弱らせるに過ぎなかったのに、

しかし、身構えた滝口を前に、美童は無防備に、唯、彼を嘲笑する。

「……その傷を癒すのに、いつまでかかったんだ？」

滝口の吐き突けた問いの答え。その答えは現代。

人間を家畜として認識し、その絶対的な力の差を冷笑で示していた存在を、詩緒は無表情ながら虚仮にして返す。

雨月の表情が凍りついていた。陰陽師の少女を誘惑するために抑えていた強烈な恐怖が、再び聖堂の持つ神聖なる気配を侵すかのようにならざるを得ない。

「早死にしたいらしいね？ 童」

音を奏でるような愛くるしいはずの美声に籠められた、死。

「童じゃない。渡辺だ」

それでも。詩緒は怯むことはない。

「渡辺詩緒。お前を殺す人間だ」

迷いなく兄の遺志を宿した愛刀を振るう。

鈴の音が微かに聞こえた。

それは滝口の左手首に飾り気なく吊られた、小さな銀色の鈴が奏でた音色。

「武士道とは死ぬことと見つけたり 違うね。君は人の持つ可能性に希望を見出している。そんなところかな？」

虚空を斬るに過ぎなかった鬼切。

その上空に雨月は居た。

吸血鬼と呼ばれる夜魔。

その分類は大きく分けて四つ。

真祖、爵級、従者、異端。

一般に人間が思い描く、太陽を浴びると滅びる、流れる水に沈むという大きな弱点を持つのは従者。真祖、爵級に嚙まれ変じた吸血鬼である。

それでは目の前で飛行能力を有することを教える、雨月という吸血鬼の位とは。

「……信じ難いけど、ここまで事実を突きつけられたのなら、認識を改めないといけないわね……本当に日本にも純正の吸血鬼……それも真祖がいたってワケね……」

飛行能力を有するのは真祖と爵級。

しかし雨月は、そう零した瑞穂の目の前で、その身体を霧散させて、詩緒の斬撃を無効化させたのである。

霧散化。身体を霧に変える能力。それは真祖と呼ばれる最強種にのみ確認された能力なのだ。

「下衆。確か、渡辺……とか言ったよね？ 決めたよ。僕は君を簡単に殺しはしない」

滝口を見下ろし、雨月は宣告する。

「人の無力さを……絶望を贈った後で、君を八つ裂きにしてあげるよ」

美童の身体は再び霧と化す。

詩緒と瑞穂の視線は、彼が降り立った場所へと向けられた。

そこで実体を再構築した雨月は、ルチア・ダレッツォ 彼の呪詛を受けて堕ちた修道女の遺品の一つを拾う。

「知ってる？ 彼女はローマ十字教っていうキリシタンの一派の修道女だったそうだよ」

その事実を聞いた瑞穂の顔に、あからさまな嫌気が窺えた。

ローマ十字教。強い反異端思想を持つ宗派。その思想は、凶行とも言えるような宗教活動を実行させることも少なくない。

「元々は僕ではない別の男を追って来たらしいけど…… ああ。安心してよ。そいつを仲間にしようかとも思ってたけど、会ってみたら気に入らなくてね。すでに僕が抹殺ころしちゃったから」

同属の命を奪ったという事実を告白しながら、それは屈託のない笑顔を見せる。

「ああ、御免。話が脱線しちゃったね。でね、ルチアが言うには『ランダムカラー極彩色』っていう魔術師 召喚術師が近くにいろらしくてね」
「ランダムカラー極彩色ですって!？」

その異名が瑞穂の顔に在った嫌気の色を飛ばす。

「誰だ? 知り合いか?」

「世界でも十指に入るって言われてる魔術師よ。確か、彼女もローマ十字教の信者だったから、情報的信憑性は高いわね」

訊ねる声に、魔術界の世界情勢に明るい陰陽師は答えた。
「ルチアという修道女シスターは、雨月が今、手にしている魔術武器マジック・ウェポンを有していた。

つまりは、それ相応の地位に教団内で就いていた可能性が高いということである。そしてそれは、その人物が生前に持っていた情報なのだ。

「それで、僕は彼女を迎えに行くつもりなんだ」

美童はさらりと奸計かんけいを吐露してみせる。

「強力な力を、新世界の神になるべき力を手に入れるためにね」
「続け、歪んだ欲望に嗤う。高笑いを上げる。」

「知ったところで、君には止められないよ? 救えないよ? 否定したいのなら、僕を止めてごらん。数日の猶予は与えてあげるからさ。その上で最悪の瞬間を見せ付けてあげるよ。さぞ楽しい余興になるだろうねえ」

二人を置き去りにして、嘲笑だけを残しながら。それは三度霧になると、消え失せていた。

brake time - 1 ”少女二人”

「Fab - 28 . Tue / 12 : 50」

「極彩色？ ランダムカラー それじゃ、詩緒くんが欠席してるのって」

「そ。彼女を探して、今頃、どこにいるのやら……」

琴音の言葉を最後まで待たず、瑞穂は早々に疑問に答える。そう返答しながら、その少女は死も他人事あほかのように、窓の外、晴れ渡った冬空へと視線を泳がせた。

そこに澄み広がる冷たい大気で構成つくられた空。

透ったその青空を眺めた少女の顔は、果たしてどの種のものなのかを理解することはできないが、確かに憂いを帯びていた。

そんな物憂げな顔をした瑞穂を、同性でありながらも琴音は頬を染め見惚れてしまう。

その視線が一点に集中する。乾期にありながらも、みずみずしさを損なわず、艶やかな光沢を湛えたその紅唇が動く。

「……詩緒、大丈夫かな？」

「し、詩緒くんなら大丈夫だよ！ きつと！」

想いを寄せるの少年の名に、琴音は瑞穂に見惚れてしまっていた自分に気付く。その動揺を隠すかのように慌てて相槌を打つと、瑞穂の唇から視線を逃がして、彼女の目線を追った。

熱を帯びた琴音を冷ます様な、冷たさを感じさせる冬の空だった。

「アイツ……死んでなきやいいけど」

平静を戻そうとする少女の横で、ぼつりと瑞穂が零す。

「そ、そうだね」

雰囲気に吞まれ、なんとなくしに再び相槌を打っておきながら。

「……って！ ちよ、ちよっと、瑞穂！？ な、何、言ってるのよ！？」

しかし、琴音は慌てて瑞穂を非難した。

「あはは 冗談よ、冗談」
返された苦情に、そう前言を撤回しつつも、だが、少女の目は笑
つてはいない。

瑞穂の抱いていた憂鬱さの正体。

それは安に少年の身を案じてのことではない。今回の怪奇の裏に、
その存在が見えた宗教集団についてが、その大半を占めていた。

そして、だからこそ、自分の口から自然と零れてしまった凶事を、
完全なものとして否定できないのである。

ローマ十字教。

恐らくは、雨月を標的として、既にこの国で活動し始めているで
あろう宗教組織。

その教団の退魔実行部隊。その部隊の持つ強硬な方針ポリシーと活動は間
違いなく、件の滝口の少年との間に確執を産むであろうことが、陰
陽師の少女には容易に予想できるのである。

教団も少年も、互いの信念に従い、己が解決すべきこととして、
決して雨月ターゲットを譲ることはないのだろうから。

だからといって、詩緒は彼らを敵対者とは見なさないだろう。し
かし、『異端殺し』の名を冠するローマ十字教は違うのだ。

だからこそ、瑞穂は杞憂する。

彼らは活動の障害ジャマと判断した者を、神の名の下に、躊躇すること
なく神罰はじきを与えようとするだろうから。

生命の与奪。

その誰も持ち得ないはずの権利でさえ、彼らは天から与えられて
いるかように錯覚しているのだ。

加え、雨月が吸血鬼の頂点 真祖であることを、ルチアを始め
とした尊い犠牲により、恐らくは教団も掴んでいるはずなのである。

ならば、その教団の誇る最強異端排除部隊 『イスカリオテ』
の人間が動いていたとしても、何ら不思議はないのだ。

イスカリオテ。世界の裏の裏で暗躍する最凶の魔術集団。

白と黒。それは極端な分類方法しか持たぬ集団。己と異なる者を

敵として、排除すべき者としてしか認識しない者たち。

「聖布を強奪した『魔』の排除と、その聖布の奪還。確か、それが今回の二人の任務だったよね？」

不意に。琴音は表情を曇らせ、思案に暮れていた瑞穂に訊ねる。

「え？ ええ。そうだけど？」

我に返った瑞穂の前には、先ほどまでと変わった真剣な滝口としての表情をした少女剣士がいた。

「やっぱり、私も参加する」

琴音は決意を口にする。

「ダメよ！ 明日から合宿でしょ？ 今度の全国大会で高校剣道界引退するんでしょ？ だったら、しっかりケジメつけてきなさいな！ 会場で琴音を待つてる好敵手がいるんでしょ！？」

しかし、瑞穂は即答で、その決意を拒絶した。

高校剣道大会。毎年三月に開催される全国大会の一つである。当然、高校剣士たちはこの大会も一つの大きな目標としている。

この大会を最後に高校剣道からの引退を決意している琴音を他所に。去年の夏に高校総体を制した琴音に期待を寄せた学園は、この大会に向けて合宿費用を工面し、少女剣士を万全の状況で送り出すことを企画したのである。

「だって」

「だってじゃない！」

「イタっ！？」

反論しようとした少女剣士の脳天に、陰陽師の脳天唐竹割が炸裂していた。

「神谷先輩、高校総体本戦でも琴音に負けて、ここ半年、学業そっちのけで、剣道に打ち込んだらいいのよ！？」 琴音には、彼女の青春に応える義務があるわよ！」

神谷直子。総体予選決勝にて琴音と初めて見えた少女。一方的に琴音を永遠のライバルと認識する至って単純、もとい、非常に爽やかな剣道選手である。

「……あうう。何するのよ、瑞穂？ 大体、おかしいわよ、その認識は……神谷先輩、総体参加時には、剣道で大学に推薦が決まってるって言っていたもの。進路を考えても、剣道一本に絞るのは普通でしょ？」

その大学の名前は、体育大学として一流と評される学校だった。だからこそ、琴音が言ったことは本当であり、当然なのだ。

しかし、琴音は疑義を抱く。

琴音の知る限り、瑞穂は彼女とは予選会会場で一度会っただけのはずなのである。何故に、そうであるはずの彼女の情報にそこまで詳しいのか。

「バカー！」

「いたっ！」

しかし、再び振り下ろされた少女の手刀に、そんな疑問は吹き飛ばされる。

「神谷先輩はね！ 神谷先輩はね！ 打倒琴音を誓って、山籠りまでしたのよ！？ 好敵手と書いて親友と呼ぶ神谷先輩の想いに、琴音も女なら応えて見せなさいよ！」

芝居がかつた間まで作り、拳を握り力説する瑞穂。何故か、その目には涙まで浮かんでたり、なかつたり。

「……イヤイヤイヤ。瑞穂？ あれは高地トレーニングっていうのよ？」

だから、そんな情報をどこから。そんな、話を逸らされそうな、しかし気になる疑問を封印して。唐竹割の直撃を受けたつむじの辺りを押さえながら、琴音は冷静に捻じ曲げられた事実を正し、反論した。

「ちっ！」

知っていたのかと、弁者は舌打ち一つ。

「『ちっ！』って、あの？ 瑞穂さん？」

しかし、本心として。陰陽師は今回の件に、どうしても、この少女を巻き込みたくはないのだ。おちゃらけて見せても、それが本心

なのである。

目の前の唾然とした表情を覗かせている滝口の少女の覚悟や、思いやりには悪いと思うが、今回ばかりは、非常に事情が劣悪なのである。

ローマ十字教から下手に敵視されようものなら、神に齒向かう悪魔として判断され、刺客を向けられるだろうからだ。それも息の根を止められるまで、際限なくその刺客は送り込まれるはずである。

事実、彼女は知っていたのだ。今、この国には、そういう八つ当たりの理由で抹殺の対象となっている、いとも哀れな少年が存在しているということ。

それもそう遠くない近隣の土地に住む少年だったはずである。

「……大丈夫よ。安心なさいな。少なくとも、私たちの今回の任務は完了したも同然だから」

一つ、息を吐くと瑞穂は改めて琴音を見た。

「本当にそうなの？」

「ええ 標的排除と聖布回収についてはね」

不安げに問いただした少女に答えた瑞穂の言葉は、嘘偽りのない彼女の本音であった。

ローマ十字教の武力介入。それが雨月の排除を確実に実行するであろうことは、世界の魔術界情勢に明るい、その陰陽師の思考の中では確定されたことなのである。

圧倒的といえるほどの、その教団の持つ退魔戦闘力が強いことを彼女は客観的に理解している。いや。何も退魔戦闘能力だけに限った話ではない。ローマ十字教の信者数は世界規模であり、その教義に従う著名人が政財界にも数多い。本腰を入れたその教団に対抗できる存在が、個人、組織、裏、表を問わず、世界中を見渡してもどれだけあるだろうか。

聖布についても然り。

『天の叢雲』（あまのむらくも）『八坂瓊の曲玉』（やさかにのまがだま）『八咫の鏡』（やたのががみ）などという世界的に見て

も高名な、この国の神代から伝わる神器ならばいざ知れず。ましてや雨月の持ち去った聖布は、キリストやムハンマド、仏陀ブツダなどという唯一無二の聖人の遺物でもない、世界的に見れば無名に等しい一禅僧の遺したものである。そのような物を、数多くの超の付く強力な魔術道具マジックアイテムを保有するローマ十字教が所有権を欲し、殊更に騒ぎようはずもない。

とどのつまり、今、瑞穂が直面している一番の問題は波風立てずに、如何にローマ十字教をやり過ごすのか、なのである。

「……融通の利かない詩緒ハカには嘘の情報を与えて時間稼いでいるけど、アイツ、変に勘が鋭いから、さつさとこっちで片付けないとね……」

神妙ソウサライテキストに陰陽律法は独りごちる。

それには雨月の居場所を突き止め、彼らにその情報をリークするのが一番手っ取り早いであろうと少女は考えていた。

標的を先に消されてしまえば、流石に偏屈頑固朴念仁無愛想滝口渡辺詩緒といえど、お役御免は免れないのだから。

詩緒とローマ十字教とを接触させないこと。

それが問題回避のために瑞穂の選択した行動指針だった。

標的を他国組織たにんに奪われる面子など、彼らに絡まれることを考えれば安いものだと即決していたのである。

嘘の情報。そのために自身の占いの結果とは反対の方位を凶方と詩緒には伝えたのだ。

そして彼女は、一人で捜索を行っている。

今、この時も、である。

街の上空に彼女の使い魔である隼 式神を飛ばして。

雨月という人外じんがいの存在ならばまだしも、ローマ十字教徒である彼らは人間。目視で探すより他はないのだ。

雨月が真祖クラスの吸血鬼、強大な力を持つ『魔』であったことは、敵として相対するには難儀なだけだったのだろうが、それを狩ろうとする者を捜索するという一点に限って考察すれば、幸運だった

たのかも知れない。

それは瑞穂がローマ十字教徒だと判別できる使徒、つまりはそれだけの著名人^{ビッグネーム}が、その清掃役として来日する可能性が高いからだ。

陰陽師の少女が空を見たこと。

つまりはそれは単に感傷に浸っていたわけではなかった。

感覚を一時共有し、行使している式神の視点から、その役目を担う者を探っていたのである。

シンクロ・マジック
同調魔術。

それは賀茂瑞穂という陰陽師の独自陰陽術だった。

従来の陰陽術に、使役している式神と意識や感覚を同調させる類の術式は存在しないのである。

元来、そのように回りくどいことをせずとも、式自体に探索の判断させ、報告をさせれば良いのだから。

だが、瑞穂にはそれだけの知識、知能を式に与えることができないのだ。

陰陽師だからと言って、全ての陰陽道の魔術が完璧に使えるという訳ではないのである。

陰陽道とは学問。それは世界の総てを陰陽五行により紐解き、世界の真理を知ることが目的とした思想体系なのだ。

そこに存在する魔術とは、その解析過程で得られた副産物に過ぎず、だからこそ、その陰陽道の持つ魔術体系の一つ一つは、結局のところ術者の適正に因るところが大きい。

式神を行使する呪術は残念ながら、瑞穂は得意ではない。そういうことなのである。

そのために、探索という行為を式自体に単体で行なわせることが彼女にはできないのだ。

そこで彼女が思いついたのが、西洋魔術に於ける魔女などの使役する『使い魔』^{ロジック}（ファミリア）との感覚共有特性だった。

その論理を陰陽五行にて独自に解析し、こうして行使するに至ったわけである。

不得手であるが故、瑞穂に使役できる式は、鳥類の姿を借りた存在のみ。

しかし、この状況で、彼らはむしろ打って付けの存在だった。

上空から広範囲に渡る視野を持ち、そして、生物界で最も優れていると評される視力を彼らは持つのだから。

「『同調・開始』（トレース・オン）……………なんちゃって、ね」

本来不要な詠唱をもっともらしくわざわざ紡ぐと、瑞穂は式の視界と自身の視覚とを接続した。

鳥観。その視覚は遙か上空から街を一望しながら、しかし、注視したい場所が容易に望遠ができる。

その視界の中で、瑞穂は本日十数回目の搜索を行い始めていた。

p u r s u e - 1 ” 嘯う童 ”

「The past : a true story」

雨月物語、巻の五『青頭巾』。

その物語に登場する怪異なるモノは、元は檀家たちから厚く敬われる徳の高い僧侶であった。

しかし、修行の旅から連れ帰った美しい少年と暮らすようになり、徐々に墮落していく。

その美童に惚れ、肉欲に溺れる僧。そして終には、その性愛の対象の死を受け入れられず、その骸を愛撫し、その血を啜り、その肉を喰らい人外へと墮ちるのである。

その『魔』の姿形は一見、人間と何ら変わらず、昼間であっても何の制限もなしに活動できたという。

実際、鬼に墮ちたと噂されていた僧の預かるその山寺へと、この物語の主人公である禅僧、快庵が村人に頼まれ、訪れたのも、まだ陽のある時刻であった。

彼は快庵と通常通り会話を交わし、その申し出を断り切れず、寺に一泊することを渋々ながらも許諾する。

それは魔道に墮ちた自分が、日の入りと共に目覚める人の血肉を欲する衝動を抑える自信がなかったためであった。

つまり彼には、弊害なく人と交わることができただけの高い知性と、欲望を抑制しようとする理性があったのである。

しかし深夜を迎えると、その理性は鳴りを潜め、檀家の農夫たちの証言通り、僧は衝動のままに生きる魔性のモノと化し、快庵の血肉を求め寺中を徘徊するのだ。

だが、快庵は寝ずに経を唱え続けていた為に、『魔』と化した僧に認識されることなく、無事に朝を迎えることができたのだという。

朝日を浴びて人間を、僧侶としての自分を取り戻し、一心に経を唱えることで『魔』である己を遠ざけていた快庵を仏の化身であると敬った僧は、罪深き今より解脱するための教えを問う。

こげはつてあししよふうをふくいやししよなんのしよいぞ
江月照松風吹 永夜清宵何所為

その願いに応え、快庵は僧を目の庭にあつた平らな石に座らせると、己の青い頭巾を被せ、そう句を贈り、その意味を考えるよう、それが悟りへの標であると伝えたのだという。そして、句の真理を悟るまでは決してそこから動かぬように命じると、快庵は僧を残し、山寺を去っていった。

一年の後。快庵が再び僧を訪ねると、彼は未だそこに座していた。

そこで快庵は再び件の句を詠むと、怪僧を消滅させ、成仏させたのである。

その物語のあらましはそうであった。

しかし、その真相は異なるのだ。

オカルト的な知識を持つ者の中には、僧が堕ちた『魔』が、何かの存在に似ていると感じる者もいるだろう。

それはこの国に伝えられたのが、この物語の発表よりかなりの後、近代に伝来した、ある魔物と酷似しているのだ。

そして、それこそが真相なのだった。

その怪僧は一被害者に過ぎなかったのである。

彼は呪まじをかけられ、『魔』へと墮ちたの犠牲者に過ぎない。

正確には。

彼は呪カースを受け、爵級の吸血鬼へと成り果てさせられたのである。その元凶。つまりは僧に禁断である、血の甘美な味を憶えさせた者。

そう。それは怪奇の発端である、僧の連れ帰った美しき童に他ならない。

それこそが、その物語から名を頂く『雨月』という『魔』。西洋の組織で雨月ビアンシアと呼称される日本で生まれ出でた真祖である吸血鬼だった。

彼は宛もあの聖人のように己が血肉を与えることで魔性へと人を導き、そして、聖職者さえもいと容易く蠱惑させる魅チャーム・アイ了魔眼を持っているのだ。

その物語は事実の側面だけを脚色し、後世へと伝えていた。

雨月は魅了した僧に貪られ消えたわけではない。

僧に血を与え、人肉を喰わせ、その禁忌の味を覚えさせ、仏の道どころか人の道からさえも逸脱させてしまう同属の配下に墮としたところで、その伝承された物語の表舞台から降ろされたのである。

その存在が、あまりに唐突に跡形もなく消え失せてしまったことから、喰われ尽くした、そう認識されてしまっただけで、雨月は間違いなく存命し続けていたのだ。

舞台裏。吸血鬼という言葉がまだなかったために、鬼の一種と分類され、その『魔』を排除しようとする四人の退魔の侍と激しく争いながら。

その侍たちは滝口。そして、彼ら滝口に伝承される宝具を担つとう兵しんたち、当時の四天王だったのである。

雨月と四天王の戦いは峻烈しゅんれつであったという。

四天王の内の一人は雨月に魅了され『魔』へと堕ち、討ち滅ぼされた。また、その離反した四天王との戦いに於いて、一人は滝口としての生を閉ざされた。

残った二人の四天王。蜘蛛切くもきりと鶴貫つるぬきの担い手。

だが、彼らの二人の力をもつてしても、雨月を討ち滅ぼすことも、封じられることもできず、深手を与えるに止まったのである。

そして、雨月は、その傷を完治させるべく、力を蓄えるべく、深い眠りへ、歴史の闇へと自らの意思で消えたのだった。

「Fab - 28 . Tue / 13 : 00」

その街に少年はいた。

それは小柄な小学校高学年程度の体格でしかない幼い少年だった。愛らしさと、しかし、その魅力に反する年不相応の、妙齡の女であるうともそうそう漂わせることのできない、ぞっとする色香を覗かせる美貌を併せ持った少年だった。

少年の持つのは、此の世ものではない美しさ。人を妖しく魅了する美しさ。

その美しき少年、雨月は嗤っていた。

通りを行き交う人の流れに紛れ、嗤っていた。

その玉容を卑しく歪め、嗤っていた。

彼の抱く野望に向けて刻々と、事は驚くほど順調に進んでいるのだ。

ローマ十字教。第十三枢機課直属部隊。

「確か、名前は『ラザフォード』とかいったっけ？」

雨月を、自身を襲った異国の宗教組織、その対異端実戦部隊の名前を思い出す。

それはその部隊を率いていた修道女から聞いた部隊名だった。その人間たちとの交戦で、雨月は数名の生存者の存在を許したが、尤もそれは狙って行ったことである。

辺境の島国で出現した真祖は知りたかったのだ。

その部隊を退ければ現れるであろうと下僕となった売女が進言した、こちら側の世界の人間の最高峰の能力を誇るといふ者たちイスカリオテの実力を、である。

不安があつたわけではない。知的好奇心、興味。つまりは、現代に於ける人間という下等生物の性能を美童は単純に知りたかっただけだ。

彼らの直属部隊とやらの統率者であつた彼女は、あっさりと手中に堕ちた。異性故に魅了の魔力の効果は上がつていたのかも知れないが、それでも曰く、世界最大の宗教組織の一派、その確たる聖職者^{タゲ}だったのだ。果たして、その上に君臨する雑魚とはどの程度なのか？

「まあ、たいした手合いじゃないだろうけど、余興にはなるだろうさ」

彼女の時もそう。

別に特別、修道女 of 能力を買つたわけではない。

彼女が僕^{オレ}として、かつての同胞を血祭りにしていく様が楽しみでなかつただけだ。

それは愉快でしかなかった。

所詮、人間など家畜。食い物でしかないのだ。多少、使える駒であつても、せいぜい使い走り程度に過ぎないだろう。

そう吸血鬼という種の頂点に君臨する真祖の少年は思う。

件の女、ルチア・ダレッツオのように。

雨月は冷静に人間の歴史を見てきた。

人間たちは自分たちが進化して来ていると判断しているのだ

ろうが、その実、退化しているに過ぎない。

それが兩月の結論である。

進化・発展してきたのは人間ではなく、科学なる魔法じみた力なのだ。

その科学などという一部の人間が生み出した知識に、大半の俗物がおんぶに抱っこで縋って生きているのが現状なのである。

そして、その科学という力に頼りきった人間は、個の能力で、遙かに過去の人間に劣っていた。

肉体能力、生存能力、戦闘能力。

そして、魔術能力。もつとも警戒すべき力。特にその分野については散々たるものだ。

「科学の偉大さは認めよう。アレは僕にとっても十分に脅威と成り得る力だ。人間如きの浅はかな猿知恵で産み出された愚にも付かない力だなんて、安易な判断はしないさ。僕は愚かではない。客観的に大局を捉えることのできる賢人だよ」

街。幼い少年の姿をした強大な「魔」。その彼が歩むそこそが、その力の結晶とも言える場所である。

横手に目を遣れば、車などという化石燃料で走る、地上を走破するどの生物よりも走ることに優れた機械が列を作り。

空を仰げば、鳥よりも高く遠くに早く飛び行く飛行機などという機械が過ぎる。

地中には電気というエネルギーを、この土地の隅々まで余す所なく行き渡るようにするための銅線が編み目のように張り巡らされ、そのの作り出した光は、人の感じる恐怖という感情の象徴であった夜闇さえも退けていた。

江戸という名前であった都を中心に、この国が栄えていた頃。雨月の記憶の最も古い時代からすれば、その様相は間違いなく奇跡の、魔法の都の姿であろう。

それを生み出したのは、間違いなく科学という力である。でも。

そう、雨月は独り呟く。

「その力を扱うのは所詮、人間。その人間は僕の魔力で意のままになる。抵抗する耐魔力ちからを持つ人間なぞ、現代には少数でしかない。そして、その少数の人間は少しづつ排除こしょうしていけばいい。」

雨月は真つ直ぐと、ある場所を目指していた。

それはこの街の一角にある、某喫茶店である。

「滝口や、稀に僕を狙ってきたWIKウィック、そして、そのイスカリオテなんていう輩たぐひみたい。一つずつ丹念に、愉しみながら潰していけばいい。」

それは絶対の自信。己が能力が無敵であるという自負。

雨月は唯、傷を癒していたわけではない。

着実に力を蓄え、時勢を見てきたのだ。そして、今という世が、絶好の好機であると判断したのである。

だからこそ、動いた。

恐れるべきは、自分と同格の存在のみだろう。

WIKから聞いた世界に僅か存在するという真祖という級位の吸血鬼だけだ。

童の姿をした強大な『魔』の頭にある魔術道具マジックアイテム。それこそが、その為に入手した聖布せいふなのだ。

それには強力な破邪たいあんの力が宿っており、その効果は先の夜に、愚かな爵級の吸血鬼相手に実証済みである。

それには件の作品に記されていた通りの、不浄の命を浄化する絶対的な力が宿っているのだ。

かつての自分の配下を無力化させた力を、雨月は現代に於いて己の為に使うというのである。

そして、もう一つ。

その野望の為、決して裏切りはしない強力な僕しんせを得る方法を、雨月はこれから手に入れようとしていたのだった。

その求め欲するもう一つの力こそが、極彩色ランダムカラーの持つ召喚魔術まじくに他ならない。

「唯一神信仰、ね。近い未来にソレは僕に取って代わるさ……我を
崇め、恐怖せよ。総ての存在ものたちよ……って、ね」

そして、雨月は彼女らの信仰するモノを蔑み、嗤う。己に酔いし
れ、嗤う。

絵空事。

現代に生きる誰もが、そうとしか思えない世界征服という野望に。

brake time - 2 ”シフト”

「Fab - 28 . Tue / 13 : 05」

午後の授業開始まであと僅か。

鳴り終えたばかりの予鈴が、教室内部を慌しく変えていた。

多くの生徒は次の授業に備えた準備を始めている。

しかし、それでも瑞穂は、滝口の任務を遂行するべく欠席している少年の机を動かそうとはしなかった。

「瑞穂、予鈴鳴り終えたよ？ 時間、大丈夫なの？」

数分前に目を閉じた幼馴染の少女は、他のクラスの生徒でありながら、今だそれを開こうとする様子はない。

「大丈夫よ。次は荒川先生の授業だから」

「そ、そう？ それならいいんだけど、ね……」

それは瑞穂のクラス担任であり、琴音にとっては部活顧問の教員の名前であった。

確かに彼は、始業ベルが鳴り終えてから、教壇に立つ教室へと向け職員室を後にする。それは生徒たちにはよく知られている話だ。

始業ベルの終了と同時に二人が移動を開始したのだとすれば、職員室と、この教室の位置関係を考えると少女の方が目的地きょうしつに間違いなく先に到着するだろう。

だが、琴音が気にしているのは、そういう物理的な問題ではない心のゆとり。精神的な問題なのだ。

本来、予鈴は授業を受ける心構えを生徒たちに作らせ、その準備を行わせるために鳴っているのである。その少女のように休み時間に何かを行っていた者に対して、もうすぐ時間になるから後少しで終わらせなさいよ、と、そういうことを知らせているわけでは決してないのだ。

だから、瑞穂の言葉に琴音は本音で納得して、そう返したわけで

はない。

しかし、とりあえずそういう考えを、どうこう論じたところで、この少女には言うだけ無駄だろうと理解しているのだ。

それ故のそういう曖昧な返事なのだった。

唯我独尊的な思考や態度のことを、少女は自身が座っている机の持ち主に対して非難することが多々ある。だが、琴音からすれば、そんな瑞穂かのしよの方がこそが、より自己中心的な人物なのでは、とさえ思えてしまう。

その感懐には、若干の恋愛補正がかけられているだろう。しかし、渡辺詩緒と賀茂瑞穂という二人の人物の思考パターンの根底が似ていることは確かであった。

良くも悪くもその二人は、自分の意思や指針に揺ぎないものを持っているのだ。

「ねえ、瑞穂。詩緒くんって徒歩で搜索活動に当たっているの？」
そんな二人が問題なく、よくもこれまで任務を遂行してこれたものだと不思議に思いながら、琴音は新たな質問を幼馴染にする。

意見の対立や、それによる仲違いはなかったのだろうか。それに発する不信感を互いに抱きはしなかったのだろうか、と終わっていることながら不安にさえなる。

現に今もそうなのだ。

この二人は最終的な目的こそ一致すれど、個別に、違った方向性と手段で搜索を行っているのだから。

当初、傍目から見れば瞼を閉じ、俯いているようにしか見えない瑞穂に琴音は慌てた。まさか、突然に己の使役する式神と視界を同調しているなどとは普通、夢にも思わないだろう。

極微弱な魔力。それを感じることができなければ、琴音と同じように、彼女が突然に具合を悪くしたか何かとしか思えないはずだ。

上空からの探索と、地上からの搜索。

互いの意思を尊重し、しっかりとチームとしての方針を固め、協力体制で動いたとしたら。今回の一件も、より効率よく推し進める

ことができるだろうに。

「いえ。多分、バイクで動いてるでしょうね」

先の返答もそうであったが、瑞穂は事もなげに琴音の質問に答え
てみせる。

同調しているのはあくまで視覚だけであるらしいのだ。聴覚を始
めとする他の感覚器官は生きていて、さらには通常通りに自在に操
れるのだと、最初に驚いた直後に、その陰陽師は教えてくれた。
それを説明されたときに、琴音は改めて瑞穂が魔術師と呼ばれる
分類に属する人間であることを思い知らされたものだ。

「バイク!? 詩緒くんて、バイクなんて持ってたの!？」

しかし、今回の言葉には、違う方面で驚かされる。

それは琴音の勝手なイメージなのだろうが、件の少年は原付どこ
るか、今や国民一人が一台を所持するような普及率に至った携帯電
話という生活必需品でさえも、所有しているのが疑わしく思われ
ていたからだ。

いや。それはその少年を知る他の学友たちも、恐らくは同じ認識
であろう。クラスメイト

浮き世離れしている、古風な人物。そう言えば多少は聞こえは良
いが、極端に言ってしまうえば、何となしに彼からは現在社会に生き
ている少年の雰囲気を感じられないのだ。

滝口。『魔』を排除するという特殊な役目を持つとはいえ、それ
は侍、武士である。

その少年が感じさせる感覚は、その武士という既に失われた役割
に就いているからなのだろうか。違う。そうではない。それはもっ
と単純なことなのだ。

彼の口からは、現代社会を賑わせる用語。それは例えば流行り
の音楽やアーティストであったり、映画やドラマといった映像分野、
それに出演する知名度の高い人気のある男優や、女優の名前であつ
たり、ゲームやスポーツというような趣味娯楽分野であつたりとい
う、そんな類の言葉の一切が出ないためだ。

だから、他人は彼をそのように時代錯誤な人物だと錯覚してしま
う。

しかし、その実、同世代の一部の男子生徒たちが熱狂的にハマリ、
憧れるアイテム バイクという単語が少年の界限から飛び出した
のである。

「……それはどういう驚き方？ なんとなく、そこまで驚くと口聞
くと、アイツが携帯持つてるなんて言っても信じなさそうね……」
恐らくは少年の親族以外で唯一、それが誤った認識だと知ってい
たであろう少女は言う。その口元を微かに緩めて。

「ええっ！？ 詩緒くん、携帯持つてるの！？ それってメールが
使える機種！？」

携帯の件などは、それこそ瑞穂にとつては冗談でしかなかった。
しかし、渡辺詩緒という少年を想うだけで、彼を知りたくとも知れ
なかつた少女には、それもまた衝撃の事実として受け止められる。

「ちょ……いまどきメールできない携帯って……」
それは暗にその機能があるのならば、そのアドレスを知りたいと
いう少女の意思表示であるのだが、この陰陽師の少女は、何故にか
こつこつ分野には極端に疎い。だから、それを額面通りの言葉とし
てしか反応できなかつた。

「携帯持ってたなんて、私、聞いてない！」

本心からの悲痛な声。それがその少女の表情や態度から容易に知
れる。

鎧袖一触とは正にこのこと。

授業に際する心構え。この時間で作るべきだと彼女自身が考えて
いたものは、その真実を前に、呆気なく、意とも脆く崩れていた。

「どういうイメージ？ ……琴音の中の詩緒って……まあ、アイツ
がそついうのに疎そうだと思われるのは分かる気がするけど……で
も、バイクには変にこだわってたりするのよ？ アレで」

世界を憂う隠者的なイメージが正解。しかし、瑞穂が予想してい
る琴音の抱く少年のそれは、野山で暮らす蛮族の類だ。

「え？」

幼馴染みの少女の描いたイメージ。その正否はどうあれ、彼女の発言は琴音にとって興味深い発言だった。

琴音がバイクに興味があるからなのではなく、それが今後の二人を結ぶ鍵になるのかも知れないからだ。その分野の知識を琴音が身につければ、二人の距離を急激に縮める足懸りになるかも知れないのである。

詩緒のそんなこだわりや、趣味的な一面を、琴音は知らなかったのだから。

「食べ物でも栄養が取ればそれでいい、って感じで、ほとんど固形栄養食とかで済ませちゃうクセに、バイクだけは変に愛着というか、執着というか、こだわりの持ってるのよね。あのバカは。それで三台もバイクを持つてるんだから異常よね、笑っちゃうでしょ？」
呆れた様子で瑞穂は詩緒を、そう評する。

「さ、三台も？」

たかが三台。しかし、流石に一介の高校生が保有する数としては、普通ではない数である。

「そうそう。一般用、任務用、超緊急用……らしいわよ？ 本人曰く」

実際に少年がそれぞれのバイクを、そう少女に説明したわけではないが、ぶっちゃけ、その通りではある。

通常用の中型車輛（CBR250RR）。これは現在、少年が所持する車輛の中で、取得している運転免許証で乗れる唯一のもの。よって、必然的に一番に詩緒が利用しているバイクでもある。

任務用の大型車輛（CBR1100XX）。この排気量のバイクは、年齢的に少年には免許が取得できない。当然、これを運転する時は無免許運転ということになる。瑞穂はこのバイクの後部座席タンデムシートには座ったことがある。

最後に超緊急車輛（Y2K）。このバイクは、この国では走らせること自体が既に違法行為に当たるのだと少女は聞いている。そ

の為なのか、詩緒の持っているバイクの中で、唯一、実際に走っている姿を瑞穂は見たことはない。しかし、バイクに別段、興味のない彼女である。性能スペックを調べてみるようなつもりはないし、まあ、速いのだろうという認識だ。

「……瑞穂は、詩緒くんの後ろに乗ったりしたことあるの？」

「まあ……何度か。……言っとくケド、アイツの後ろなんて怖いだけよ？ 大体、役目が絡むと恐ろしくスピード出すし、無茶な走り方するから」

「そ、そうなんだ……」

瑞穂の感想は決して良好なものではない。しかし、それでも琴音の表情は曇る。

恐怖を感じると彼女は言うが、琴音は心の奥底からその少年を信じることができるから、その感情を抱くことは絶対ないと断言できる自信がある。それに、例えどうであれ、少年に背中から抱きつけるのだから、うらやましいと琴音は思うのだ。その時は二人だけの空間を形成できるのだから、妬けてしまうのだ。

「お。丁度、似てるバイクを発見！」

そんな沈んだ琴音の顔を、目を瞑った瑞穂は窺い知るはずもない。弾んだ声で式神の視界に見つけたものを報告する。

「そうそう、あんなカラーリングだったわよね、アイツの一般用バイク。確かCBRとか何とか……服装もメットも似てるわね、あのライダー……」

服装。それは琴音に貸したこともある、黒いライダースのレザージャケットである。しかし、それに見覚えがあるのは単に似ているからではなかった。

「……って!? アレ、詩緒じゃない! なんで、あのバカ、私が教えたのと反方向に!」

そうなのだ。それは間違いなく渡辺詩緒、本人だったのだ。

「私が信用できないってか! アイツは!」

周りを忘れたように、瑞穂は怒声を上げる。

しかし、それは誤った認識である。それは寧ろ、賀茂瑞穂という少女と陰陽師に、ある意味、全幅の信頼と置いているという少年の思考の現れだった。

だから、詩緒は少女の言った通りに言葉を受け止め、陰陽師の占いと逆方向へと搜索の範囲を拡げていたのである。

「お前の占いの当たる可能性は、限りなくゼロに近い」

よく口を吐くその台詞こそが、ソーサラーテキスト陰陽律法という二つ名を有する陰陽師の占術に対する少年の感想なのだから。

「ふ・ざ・け・る・なっ！」

続けて叫んだ瑞穂に、室内の生徒の奇異の目が集まる。

しかし、それを気にする素振りも、それに怯む様子もなく、少女は勢い良く駆け出す。

「瑞穂!？」

「私、早退するから! 放課後で構わないから、機嫌悪いってウチの担任に言っといて!」

呼びかける琴音の声に間髪入れず、一瞥することもなく瑞穂は答えた。

瑞穂の担任は、琴音の部活顧問でもあるのだ。その時間に接点は確かにある。

「……もう」

教室から消えた親友に溜息一つ。しかし、それには気をつけて、そういう想いも込められている。

その少女が陰陽師として、この瞬間から動くだろうと解っているのだから。

だが、違う意味も込められている。

「機嫌じゃなくて、気分、でしょ？」

呆れ、琴音は呟いていた。

今回更新部分よりコラボレーション作品として、いよいよ本格的にシナリオが連動を開始します。ぜひ『セカイノハザマ聖譚曲』と合わせてお読みください！

「Fab - 28 . Tue / 13 : 50」

「なんてコトを！」

それは小さな、しかし強い慨嘆^{がいたん}。

少女は予見したのだ。その予見は、脳裏に恐ろしい光景^{ヴァイジョン}を鮮明に思い描かせる『発生することの確定した未来』だった。

陰陽道の目的とは、森羅万象、此の世の総てを陰陽五行により読み解くこと。過去のことであれ、現在のことであれ、そしてそれが例え、未来のことであつたとしても然り、なのである。

だからこそ、彼女の予知は発生することが確定されている未来なのであつた。いや、彼女の予見だからこそ、確定されたものとして考慮されてしまう、と表現するべきなのか。

しかし、それは仕方がないことでもある。何故ならば彼女の、いや『彼』の占術による先見は、生前より今日に至る過去千年を超える歴史の中でも驚くべき的中率を誇り、外れることの方が稀有だったのだから。

「愚かな……それとも狂信^{くるまう}つていっても、言うのですか？」

少女は在る初老の男の顔を思い浮かべる。それは一度、面会したことのある西洋の聖職者、いや、聖人と言うべきか、つまりはある宗教の一派に於いて最高位に就く人間の顔であつた。

「……あの教皇^{トク}の意図^{トク}することではないと思いたいですが……止められねば貴方とて同罪ですよ？」

誰もが知るところである表の歴史であつても、この時代にあつても彼らは宗教戦争を勃発させるのだ。あながち、その初老の男とて、今回の事件の黒幕と同じ穴^{むし}の貉^ななのかも知れない。

しかし、この国は聖地^{エルサレム}を領土として領するわけではないのである。それに宗教的に見ても、信仰心が希薄であるとはいえ、この国の国

民は決して敵対者ではないのだ。寧ろ、彼らの信仰する神に対して友好的な民族と言えるだろう。

だからこそ、少なくともその未来の惨劇は、過去に会談したことのある、件の初老の男の意思で行われるものではないと少女は推測するわけである。

然るに、組織の頂点を預かる者としては、その無能さを露呈しているに過ぎない。内包する組織の暴走を容認し、そのことで一般の下手をすれば同じ神を信仰する使徒たちの命まで奪うことを見過ぐすなどと言語道断である。

だから、少女が呟いたのは責を果たせなかった、その初老の男への非難だった。

扇に隠されたその口元。それにより表情を完全に伺い知ることはできないが、柳眉の間、眉間に生じた変化が、その長い黒髪の少女の強い感情を代弁している。同じく組織の頂点を預かる者として、情けなくも思えてしまうのだ。

二人のローマ十字教信者、その敬謙な信者同士。しかし、その二人は単なる使徒ではなく、イスカリオテという、突出した魔術的素養とくべつなを持った者たちである。

彼らの拠点である欧州にある宗教国家ヴァチカンと、東洋の島国である日本の某所を結んだ、その両名の不穏分子による超超長距離通信魔術。

異変の起こった都市とは遠く離れた、中世時代を現代に残す文化財さながらの古い屋敷に居ながら。その白い束帯姿の少女は、中継点も持たず直通ダイレクトに回線の開かれた、本来ならば成立し得ないはずのその魔術を、異常として超感覚センサーに捉らえたのだった。

誰が、何のために行った通信魔術だったのか？

当初は当然、それさえも特定できない状態であった。

しかし、彼女は件の通信魔術が行使されたという事象、行使された土地、発生した時間、そういう僅かな情報のみで、彼らの関与したものであるという事実まで探り当てたのである。

それを可能にしたのが、彼女の行った式盤を用いた占術『三式』であつた。

式盤とは天地を構成する記号を組み合わせることで、時空間の事象を読むことが出来る陰陽道占術の秘器のことである。それを用いた占術、式占は、易者に求められる熟知難度を極めて高いものにしたがらも、占術としての陰陽道に確たる地位を与えたのである。

そして、自らの行ったその占術の結果に、少女は嘆いたのだつた。それは、この国を魔術的、超自然科学的側面から守護する役目を担う者でならずとも、超非常事態だと判断でき、目を覆うような凄惨な事態を招くと安易に想像できるものだつたのだ。

「晴歌様。よろしいでしょうか？」

御簾の向こう。低くしゃがれた老人の声が少女を呼ぶ。

次なる占い事を始めた途端に、それを邪魔するように起こつた、その声。

「どうしたのです？」

しかし、少女は気に障るような素振りを見せはしない。静かに。いつも通りの落ち着き払つた音吐で、それに応じる。

現在、過去、そして、未来。幾重にも幾重にも複雑に絡まり合い、影響を与え合う、数多くの事象が、無限の可能性と展開を示唆する盤上。ほんの僅かな読み違いが、そこに在るはずの事象を全く異なる未来に導いてしまうのである。

それは至極難解な問題を、未だ解の出されていない数式を、解いている以上の困難な作業であつた。

フランスの数学者ピエール・シモン・ラプラスはこう述べている。「もしも、ある瞬間における全ての物質の力学的状態と力を知ることができ、かつもしもそれらのデータを解析できるだけの能力の知性が存在するとすれば、この知性にとっては、不確実なことは何もなくなり、その目には未来も過去同様に全て見えているであろう」と。

その言葉が示すものとは、主に物理学の分野で未来の決定性を論

じる時に仮想された超越的存在の概念であり、演繹的な究極概念、因果律の終着点である。

簡単に言ってしまうえば、世界に存在する全ての原子の位置とその運動量を知ることができれば、それを数式化し、演算による未来の特定が可能である、ということなのだ。

しかし、当然、そういう超知覚と超知能を有する存在などありえるはずもない。未来の確実な事象を確定することはできるはずがないということだ。

故にそれは、『ラプラスの魔』と呼ばれるのである。

しかし、今現在の彼女は、その存在しえない架空の超越的な概念存在と同位なのだった。

未来に発生する確定事実を、その盤上に見出して行くのである。

「晴歌様、報告がござい　！？」

促され、発言をしようとした老人の言葉が詰まる。

式盤を読んでいる少女に気づいたからだだった。それが前記のように複雑で、高難度な作業であることを熟知するが故、自身に置き換えてしまえば、それを妨げられることが、どれほど癪に障るかを知っているのである。

「構いません。報告してください」

しかし、盤面を読み解く思考を止めず、だが、少女は落ち着いた声でそれを咎めることなく、再び発言を促す。

「は、然らば御意に。数日前に見られた天体の変異についてにございます……」

その老人は、天文学博士という少女の統制する組織に存在する重要な地位に就く者であった。天体の異変から、その意味を読み解く占星術を担当する占者たちの最高責任者である。かつては彼の安倍晴明も就任していた役職^{ホスト}である。

少女には解ってはいた。おそらく、数日前に見られた天体の変異の指し示す事象とは、自身が先ほど紐解いた凶事のことであろう、と。しかし、その老人の報告を黙して待つ。それは単に部下たちの

能力の確認作業、そして、それを信頼をしているという表現行為であった。

「じ、実は 俄かに信じ難き事なのですが……」
しかし、聞かれたのは歯切れの悪い言葉。

「……貴方の能力は認めています。だからこそその、その役職を任せているのでありましょう？ 貴方の予見したことを、ありのままに報告してください」

躊躇する齡八十路に達そうかという男に、彼女は静かに命令を下す。しかし、それは風格のある言葉だった。

「然らば……今宵、災いが空より降り注ぎます。数千という単位の人命の消失……それにより我が国に甚大な被害が発生致します。それは神々しいまでの災厄……神の怒りだとも言うのでしようか……？ つまり、此度の変異とは、天災を意」
「……？ つまり、此度の変異とは、天災を意」
「いいえ。人災です」

報告を聞いていた少女の口が不意に開くと、きつぱりとそう否定し、断言する。

「じ、人災ですと！？ は、晴歌様！？」

言葉を遮られた老陰陽師は狼狽する。

「いえ……咎めているわけではありません。昨日今日で、そこまで解析しただけでも見事なものです。しかし、私の視た結果、それは人の力によるものだとは判明しています」

「晴歌様自ら！？ そ、それでは我々の立場が」

「貴方たちを信頼してはいないわけではありません。ある魔術関知に對して、胸騒ぎがしたのです。その胸騒ぎが、たまたま先日の日天体の変異に繋がったに過ぎません」

体裁を気にしてか取り乱した老人に、少女は語る。

彼女の名前は安倍晴歌。陰陽師を統べる組織、陰陽寮。その陰陽寮の頂点に立つ者、陰陽頭であった。

陰陽寮とは、かつては明治初頭まで存在した正式な政府機関、中務省の一つである。だが、土御門晴栄を最後の陰陽頭とし、表向き

は廃止され、歴史からは消えていた。

しかし、現代に於いても確かに存在しているのである。

その組織は魔術的な問題から、人ならざるモノの脅威から、超自然現象から、この国を守護することを役目として。

「星祭りの準備を進めていたのでありましようか？ でしたら即刻、取り止めを。徒勞に終わってしまいます」

自然災害による異変を避ける、ないし、被害を軽減するには『星祭り』という儀式を執り行う。天体、即ちは神を崇め奉り、荒ぶる御心を鎮めるのである。

だが、その祭事に労力と時間を費やしたところで、原因が違えば、全く効果が出るはずがない。

今、急務として行うべきは『星祭り』という儀式ではなく、今回の原因の排除という直接的な行動なのである。

「それから、WICKウィックを通してローマ教皇に警告を」

続けて下したのは、魔術界に於ける国際調停組織への伝達だった。

「WICKウィック、十字教ですと!？」

WICKウィックは、いわば魔術界の国連とも同義である。事の重大さを改めて理解したか、その命令に、年甲斐もなく素っ頓狂な声を老人は上げる。

陰陽寮は国家組織でありながら、現状、独立した決定権を有していた。魔術的な問題を孕む外交問題、内政対策の最終決定権は内閣等を通さずに陰陽頭かのじよの意志、命令一つで決定されるのだ。

つまりは安倍晴歌という個人は、日本という国家の一角の頂点でもあった。

だからこそ、若干十代後半の年齢でありながら、祖父、ともすると曾祖父と同世代の人間たちをも従えさせているのである。

「私が本気で対立意志を持って動いても宜しいのか？ そうともお伝えください」

それは彼女の能力に因るものに他ならない。彼女は器たる才能を持ち得た者。真なる陰陽寮、つまりは、この匣はこという遺産と同調し

得た、生存する唯一の適合者なのだから。

そして、その適合者とは、この国の輩出した最高の魔術師と、制限下であるとはいえず、同能力を有する術者であるということに他ならない。それは適合者を彼の領域に高めるための匣、未来の陰陽道を危惧した晩年の彼自身が残した^{システム}霊装なのだから。

「は、御意に！」

老陰陽師はつぶさに応える。

言葉を発しながらも、晴歌の占術は、やはり継続されていた。

そして、扇でゆっくりと口元を隠し、庭先に視線を送る。

どうやら式占は終了したようであった。

庭園には深々と雪が舞い降りる。

「 幸いは…… 幸いは瑞穂さんと、そして……そして、あの御方が近くにいるということ…… 後はまた、貴方を信じさせて下さい……」

そこには先ほどまでの組織の頂点にある者の顔はない。

ただ一人の少女として、晴歌は心許なく呟く。

少女は式盤に現れた厄災回避の可能性に想いを寄せる。

事態は最悪の方向へと向かっているのだ。このままでは世界的な魔術戦争さえを引き起こし兼ねない。

既に賽は投げられていたのだ。式占による未来は、もはや彼らの行動次第だったのである。

晴歌は懐から人形ひとかたを一枚取り出すと、はらりと扇で扇いでみせる。雪と同化したように、それは白い地面に舞い落ちようとする。

「 天后」

不意に少女は名を呼んだ。

庭先に人形は跡形もなく消え。少女の深憂の眼差しが向けられた白い庭には、一つの人影が現れていた。

pursue - 2 ” 傾き往くセカイ ”

「Fab - 28 . Tue / 14 : 10」

頭に巻かれたのは青いバンダナ。それは酷く年季の入ったものであることが一瞥しただけで判断できるほど、くすんだ青を見せていた。

それは大人用のダウンジャケットに身を包み、肩に乗せているような、体型とは不釣り合いな大きなヘッドフォンを首に下げる。

だぼだぼの、かなりサイズの大きいハーフパンツのポケットに突っ込まれた両手。

足にあるのは一時期もてはやされて、ビンテージ物としてかなりの高額で取引されていたバツシユである。

一見は、今風のどこにでもいるようなラッパーファッションの少年。

いや、違う。その容姿は比べるものなく秀麗である。

そして、外見の年齢とはかけ離れた達観した眼光、妖しく冷たい光を放つその双眸は、足元の下界へと向けられていた。

「何気に面白い茶番だったけど、ずいぶんと呆気ない幕切れだったねえ……」

雑居ビルの屋上から。それが捉えるのは一組の男女。

一人は異国の剣士。名をアントニオ・ゲルリッツォーニという。

やや乱れた金色のソフトモヒカンは、先の戦闘によるものなのか、それとも、現状に因るものなのか。

一人は異国の魔術師。名はアンデル・ランダデル。

褐色の肌を持つ女性。銀色のウルフヘッドは力なく男の背中で垂れていた。それは彼女を肩に担いだ、そのアントニオという男に因る状態であった。

「いい匂い ……だったなあ」

少年は、つい先刻のことを思い出す。

鼻腔に感じた、その褐色の肌を持つ美女の匂いを、残り香を思い出す。

恍惚の色が、その少年の瞳には浮かぶ。

一般人の前で繰り広げられた戦闘行為。真剣と死技による死闘。

その発端は剣士と拳士であったようだが、その戦闘は、程なく魔術師をも巻き込むこととなった。

三つ巴の争い。

そして、突如、訪れた終幕。

剣士に刺し貫かれた魔術師。

少年が思い出して悦に浸っているのは。その芳しき褐色の美女の残り香は。その時、彼女の左脇腹に生じた深手から香った血の匂いだった。

「あはは。あの童、本当に彼女を殺めていたのだとしたら……」
笑声が響く。そして、続けられた言葉は、ぞっとするほどの温度差を持つ。

淫乱さを感じさせるような表情で。それは同時に死を直感させる気配を放っていた。

「八つ裂きにしても足りないかな？」

少年は、雨月は気に入っているのだ。間違いなく執着心を抱いている自分を認識している。

西洋剣にその身を貫かれた、そのアンデルという名の女性を、である。

当初は利用すべき駒、道具として彼女を求めていたに過ぎない。

彼女こそが極彩色の異名を持つ召喚師なのだ。

その召喚魔法こそが、雨月にとっての彼女の存在意義の総てであったはずであった。

しかし、今は違う。

少なくとも、その利用価値のみで雨月はアンデルを求めてはいない。

それは彼女にとつて幸いだったのか、不幸だったのか。
「しかし、忌々しいな」

呟き、雨月は空を見遣る。

憎悪を以て睨むのは太陽。

今はまだ、空に陽の在る時間。

刺すような夏の日差しでなく、暖かさを届けるような穏やかなそれであつても。

吸血鬼という種族にとつては、それは大きな制約を与える枷ではないのだ。

それは純和製の特種な吸血鬼である雨月にとつても変わらない現実だった。現時刻での彼は、普通の人間とそう大差はないのである。総ての能力を完全に開放することは、現状、叶わず。

故にもどかしい部分もある。

例えば追尾する男女との距離を、この高度から跳躍することですに縮めることもできないのだ。

しかし、利点が全くないわけでもない。

吸血鬼を追う者にとつては、その存在を感じさせることが極めて困難になる。現に雨月を討伐する任を負った騎士は、標的に尾行されていながらも、そのことに気づいてはいないではないか。

あの滝口とて同じだ。今頃、どこぞを搜索しているかは解らないが、存外、この界限にいて、彼を感知できずにいるのかも知れない。そして、自身の放つ強大な気配がないからこそ、気づく事態もある。通常ならば、それに因り掻き消されてしまう微弱な外界の変化をだ。

例えば、極微弱な大気に蕩つた魔力の消滅。その連続した消滅の作る一筋の線。それは異国の騎士の持つ霊装の残す道標。

「まあ……お陰で見失うこともない、か」

嘲笑を浮かべ、撤回して行く眼下の聖堂騎士に背を向ける。

それでも滝口に存在を知られながら悠々と活動しているのは、口――マ十字教という世界宗教の誇る最強を追跡するのは、絶対的な自

信を持つことの表れだった。

雨月は太陽下げんじょうであつても、家畜にんげんの相手をするには、自身の能力は十分過ぎると判断しているのだ。

「待っててね、極彩色ランダムカラー。目眩めくるめめく甘美な永遠へ、僕が誘つてあげるから」

徳の高い聖職者をも容易に狂わせる魅了の魔眼。その自信をもちます力の一つは、陽の光の中でも凄艶な輝きを湛えていた。

「F a b - 2 8 . T u e / 1 4 : 4 0」

「あのバカ！　なんで、じつとしてないのよ！」

罵られた少年は搜索活動を行っているのである。その少年は滝口であり、決して安楽椅子探偵ではないのだ。そういうことをしている以上、一箇所に留まり続けることの方がまず有り得ないはずである。

しかし、そんなことは瑞穂には関係なかった。怒りの対象は、怒りの対象でしかないのである。

校門を飛び出して市街地へと向かう。信号待ちなどで、上空を舞う式神とアクセスしては、詩緒を発見し、進路を修正する。

それを繰り返して、瑞穂は詩緒との合流に漕ぎ着ける予定であった。しかし、如何せん追いつけるわけがないのだ。

相手はバイク、こちらは徒歩。行動範囲も移動速度も違いすぎるのである。

傍から見ればバイクで適当に辺りを流しているように、一定の範囲を行き来している詩緒。それは隈なくその区画の探索を完了すべ

く行っている行動なのだが、瑞穂からして見れば、まるで自分に捕まらないようにわざとそれが行われているようで、フラストレーション欲求不満を募らせる一方だった。

加え、現状、瑞穂はすでに式神を滝口追跡に使ってはいない状態なのだ。

学生服の上の羽織った白いハーフコートのポケットから携帯を取り出す。

念のため。

女性としてだけではなく、男性を含んだ、世界レベルのトップアスリート並みの脚力をもつて疾走しながら、携帯を片手に親指で弾いて開く。

ディスプレイを一瞥することなく、素早くダイヤルキーを叩く。

その双眸は、標的を常に見失ってはいない。

耳元に当てたスピーカー。無機質なコール音は予想に反して、いや、予想通りに聞こえはしない。

「「 になった番号は、現在、電波の届かないところにあるか、電源が」

イダンス亜麻色の髪を靡かせ、駆ける少女に聞こえたのは、お決まりの案内伝言だった。

「役立たず！ 電源くらい入れとけ！ あほんだらあー！」

沸点を軽く凌駕する、やり場のない怒り。取り合えず、吼えてみる。

学校を抜け出した時に。市街地に向かう時に。合流しようとして、それが叶わず、堪忍袋の緒が切れること、数回。

つまりは、詩緒の携帯の電源が切られていることを、瑞穂は知っていた。しかし、一縷いっさるの望みぐらひは託させて欲しかったのである。

ソーサラーテキスト陰陽律法が追うのは壮年の男。

それは単なるそれだけの存在では、やはりない。

追っていた雨月という真祖の、おそらくは配下の者なのだ。

「敵性吸血鬼は一匹見たら三十匹はいると疑え、こいばって格言を忘れて

たわ
」

そんな格言、ありはしない。それは黒色、もしくは茶色の某衛生害虫のことである。

しかし、そういう事態　爵級や従者といった配下を作り、戦力として配備しておくこと　は、当然、予測しておくべきことであつたのだ。

加え、雨月という真祖は、慢心に囚われた愚か者ではない。いかに自分以外の存在を虚仮にしているとはいえ、対象の能力は冷静に捉えることができている。さらには、自身、単体で可能なことが限られているということも、明らかに判断できているのだ。

だからこそ、ルチアのような彼に見初められたという不幸を背負つた被害者が、現実として瑞穂の前に障害として出現し、極彩色のランダムカラーような召喚師を欲したのではないか。

「迂闊だつたわね」

十字教云々に気を取られていたとは言え、そういう存在の可能性を考慮しなかつた自分を叱責する。

そして、兎にも角にも、眼前の男を叩いておく必要性を確認する。吸血鬼などという強力な『魔』、それも真祖と爵級という凶悪な人外を複数体同時に相手にするなど、自殺行為に等しい。

「昼間叩く！　逃がさないわよ！」

息巻く、陰陽師。だからこそ、人目をばからずに五行秘術を行使しているのではないか。木行大気に働き掛け、空気抵抗をなくし、女子高生としては異常速度で駆けているのではないか。

追われる異常と、追う異常。

詰まる二つの距離。

前方を走る吸血鬼は、こちらを一瞥し路地裏へと身を翻す。

「　隼よ！」

標的が前方から注意を逸らした瞬間。目撃者、人目を極力減らすことのできる機会。

追走劇を展開しながら待っていた、その好機を瑞穂は逃しはしな

かった。

この時のために、式神を詩緒追跡たんざくにんむから外し、戦闘配備していたのだ。ここで失策するなど、目も当てられない。

「ぐうつツ！」

角の向こう。男の呻きが集中する少女の耳に聞こえた。

だからといって、瑞穂は緊張を解きはしない。陽の下。その能力の大半を抑制された状況であるとはいえ、彼らはいくまでも吸血鬼恐るべき生命力、永遠を約束された存在なのである。

男の痛みを訴えた声が途切れようとする前には、陰陽律法ソーサラーテキストは音源である場所に達する。

そして、そこに、壮年の男の姿は、ない。

直後、瑞穂の細い体が宙を飛んでいた。

上空から急降下し、夜魔は強襲したのだ。

振るわれた男の右拳。左の手には引き千切られた紙片。それは隼の成れの果て、否、原型というべきか。

空間に在る少女。その白いハーフコートが風そのもののように流動する。その姿は舞うように優美。風が意思を持ち、少女に付き従うように。

否。事実として、風は意思に因り、彼女の周りに在ったのだ。

追跡に使用した五行大気を、未だ彼女は周りに絡ませていたのである。

壮年男せきねんと、反転した少女おんなみまゆじの視線が交差する。

瑞穂はしたり顔で敵を見ていた。男は驚愕していた。

「 なッ!?! 」

「 下手な演技フェイクだったわね 」

固まった男に、美姫はくすりと微笑む。同時に、一連の動きの中で結んでいた印を完成させていた。

それは晴明桔梗。相生相剋そせいそうこくの理を示す、五芒星。

「 火行、火気。猛よ! 」

男が着地するよりも早く。彼女の花唇かしんは力ある言葉を紡ぎ終える。

直後、閃光と共に、大気には激しい気流が生じていた。それは季節に似つかわしくはない、高熱を帯びた烈風。

その原因。それは陰陽律法書ソーサリーテキストの異名通り、彼女が理を律した万象。瞬間的に巻き起こったのは、轟火の螺旋だった。

そして、その後、それは何も残さず。

刹那に。その炎は男という『魔』を伴い消えていた。

「……はい、お仕舞い」

呟きながら、風に乱れた髪に指を通して整える。

辺りに騒ぎはない。取り敢えず、厄介事は避けられたようである。

一般人に、魔術の存在など、当然、知られるべきではないのだ。

吸血鬼などという『魔』の存在と同じく、それは余計な混乱を招くだけのものなのだから。

「さて」

五行秘術の行使に続け、瑞穂は精神を統一する、周囲に気を巡らせる。

大きな変化であれば、彼女のそういう感覚は広範囲で、意識せずとも働く。

しかし、今の彼女が行っているのは、もっと精密な探査である。

落下する針の音を聞き分けるように。辺りの気配にほんの僅かでも変異がないか、それを、探る。

先の格言ではないが、探索する価値は十分にあるのだ。

白昼に活動していた吸血鬼。そして、この時期タイムシグ。

他にそういう存在がいたのだとしたら。

兩月の足取りを、上手くいけば、アジトのような場所を見つけることができるかも知れないのだから。

「見つけ」

得意げに陰陽師は零す。

彼女は確かに、微かなその気配を察知していた。近く。僅か数区画先に。

陰陽師の見つけた存在は、紛いようもなく、強大な『真祖』の残

滓を漂わせていた。

s i n g u l a r i t y - 1 ” 交 錯 ”

それは運命であると雨月は思う。

何から、何故に逃亡しているのか。

そんなことは定かではないし、彼にとってはどうでも良いことである。しかし少なくとも、その聖堂騎士は、さしあたっての敵対者を撤くことに成功していたようだった。

その事実は当の本人ではなく、雨月が一番に理解している。

現状、実際に彼を尾行している者は、自身唯一人なのだから。

だが、一見すると少年でしかない彼からだけは、イスカリオテという極めて選りすぐりの部隊に属するその男であれ、絶対に逃おおげ果せることはできないのである。

彼の所持する霊装が、彼の傍らに在り続ける限り、それが彼の位置を克明に雨月に教えるのだから。

そして、好機も確実に近づいているのだ。

じまもの第三者だけを遠ざけ、標的を運ぶ騎士は、自ら人気のない場所を探し移動している。加え、彼は満身創痍の状態なのである。

雨月にとつての聖堂騎士の逃走劇は、墓穴を掘るといふ形容を地でいく行為でしかないのだ。

アシトニオ彼の背中を、雨月は目視圏内に捉えたわけではない。

だが、負傷した褐色の美女を担いで運ぶ、疲労困憊の逃亡者と魔性の少年の移動速度は明らかに違う。その距離は着実に詰まっていた。

真祖の吸血鬼が求めた召喚術ちからは、その存在に言わせれば、手に入れたも同然なのであった。

だから、運命であると雨月は思うのだ。

極彩色という魔術師の身は、この日の為に故郷から遠く離れた、異国の地に在るのだ。

魔性の従者を喚ぶ術を伝えるために、何れは世界を統べる者の、僕と成るべくして成るためにここに在るのだ。

そう。世界を統べる者。

それは雨月の中で確信に変わっていた。だから、こつも総ての事象は自身に味方するのだと思う。

雨月は、ほくそ笑む。

美しい幼い顔を醜く醜く歪めて、ほくそ笑む。

そして。

止めようにも、止められず笑い続けていた少年の足は、不意に止まっていた。

都心部から延ばされた私鉄の開設により、ここ十数年で急激な発展を見せている、この街。

ここは、その抜け殻。旧繁華街である。

十数年前は、この街で一番に人のいた場所だった。しかし、駅前に一等地という冠を奪われ、徐々に徐々にかつての賑わいを失い、再開発による土地買い上げで現状、ほぼ無人となっている区画なのである。

その片隅。雨月の目の前にある巨大な廃ビル。それはこの区画の象徴。有為無常を、哀れさを示す建造物。

建設途中にその煽りを受け、放棄された無様な不要物件なのである。

雨月は何となしに配下にした、この街に住む壮年の男からそれを聞いていた。

「……ふふ。分相応のみすばらしい場所を選ぶもんだね」

その内部へと足を踏み入れると、外装が剥がれ無機質な灰色を見せる壁面を一瞥し、雨月は嘲笑を浮かべる。

「負け犬は、負け犬らしく……そういうことなのかな？」

階上を感じる、僅かながらも絶えることのない大気中の魔力の消失。それを起こす物体の主を虚仮にしながら、少年の形をした『魔』は、薄暗いコンクリート製の棺を思わせる建物の奥へとその姿を消した。

薄暗いフロア。

「貴、様あ……！！！」

そこにアンデルの搾り出すような声が響いた。彼女を蝕む苦痛の根源は拒否、拒絶という事象である。

「ケケツ、吼えるなよ負け犬。いやあ、よく考えりや俺も負け犬だったな。って事は、その俺にまけいぬ一瞬で負けたお前は何の役にも立たねえ単細胞かあ？ ケケハツ、みつともねえなあ！」

アントニオは女のその様を満足げに嗤っていた。霊装に刺し貫かされた腹部、つまりは現状を作り出した原因を蹴り上げられ、憤激と敵意に満ちた眼を自身に向ける女。その瞳に口を裂かんばかりに掠くれさせた顔を映して。

「しかしまあ、その単細胞より役に立たないんじゃないや、君は負け犬以下アトリビュートのクズって事かな？」

その様を、せせら笑いながら。雨月は知らず、そう口を開いていた。

何かに敗北し、惨めな自分を誤魔化す無様な男の様。それがあまりに滑稽すぎて、誘う失笑に堪え兼ねることができなかつたのかも

知らない。

だから、もったいぶって、暫しその喜劇の観客になることを忘れ、雨月はその光景を目の当たりにするや、声を出して舞台上がっていったのだ。

その雨月の発言ごんげんにアントニオは凍りつく。それが雨月を愉快にさせる。

今少し、彼女の香りアンデルを愉しもうとも思っていたが、早々に舞台上がってしまったこと。それはそれで悦楽に浸れるものだ。雨月は思考を改めていた。

「ん？ ああ、僕に構わずに話を続けていいよ。僕の用事は……そうだね、彼女が生きてさえいればいいからさ」

例えどのような凄惨な状態に身体が在ろうと、生きてさえいれば再生つがひは利く。それが雨月等、永遠を生きることを約束された夜魔もの。そういう脅威を暗に含み、しかし、屈託のない子供の声で雨月は続ける。

その魔性の声を受け続けたのは背面だった。酷くは無防備な部位を敵対者に見せたまま、アントニオは動かない。

否、動けない。

その緊迫感を持った聖堂騎士の背中が、雨月をさらに喜ばせる。人の見せる恐怖や驚愕という感情は、彼にとって実に心地が良いものなのだ。

しかし、一転。その背中が、ぴくりと動いたのを雨月は見逃さなかった。

「吸血鬼、」

直後、アントニオは振り返る。

魔剣を抜き放ち、身構え、雨月と対峙するべく。

「雨月！」

イスカリオテの騎士は、現れたモノが何であるのかを看破していたのだ。

それは、イタリア語で雨という意味の言葉。そして、WIK等の

海外の魔術組織が、雨月につけた異名である。

アントニオの口から何気に出たのであるう、その洋名。しかし。

雨月は、その言葉に、瞬間、気を損ねていた。恐怖に震え、立ち尽くすのなら好し。慌てふためき、逃走を試みるのもまた好し。

だが、男は雨月と知って置きながら、自身を呼び捨てにし、満足な状態コンディションにないにも関わらず、敵意を剥き出しにすると、戦闘意欲を見せたのだ。

だから、雨月は家畜にんげんに身の程を知らしめるために、その手に在った得物を振るっていた。

得物、それはルチアの遺品。聖マルタンの虚構革鞭フーラフラウである。

そして、それが雨月の持っていた自信の一つでもあった。別に鞭という武器の扱いに長けているわけではない。しかし、その鞭の持つ特性が重要なのである。

それはルチアが滅びた夜に語っていたことと、同じ理由である。

だが、雨月はより完全にその鞭がもたらすであろう個対個の戦況に、絶対の自負を持っているのだ。

その魔術武器マジック・ウェポンに触れた瞬間、完全な戦闘態勢を取る前のアントニオは弾けていた。

矢鱈と派手な衝撃音を辺りに響かせ、その体は次の瞬間には柱へと叩き付けられている。

「初対面で呼び捨て？ 不躰だなあ、ここは『慎む国』だよ？ まず君は礼節を知るべきだね、僕が教育してあげようか？ 童わっほ」

笑う雨月。気は少し、晴れていた。下等生物にはやはり、そういう立場ポジションがお似合いである。

「聖マルタンの虚構革鞭フーラフラウ……なるほど、それをテメエが持ってるって事は、ルチアは死んだかあ？」

イスカリオテ なるほど。

雨月は男に、少しの感心していた。

硬い柱に叩きつけられておきながら、アントニオはさしてダメージを受けた様子はないのだ。

「うん、殺された。この国にも独特の騎士と魔術師はいるからね。抑止力は何も、君らだけの特権じゃないんだよ」

そう言いながら、ある滝口の顔を雨月は浮かべる。あの滝口が己の無力さに歯軋りする様は、どれほど滑稽だろう。

その時は、間違いなく間近なのである。

「知ってるよ。ブシとオンミョウウシって奴だろ？ まあ、ルチアに閉しちや感謝してやるうじゃねえか。俺の受けた命令は雨月の排除、障害があればそれら全てを滅殺……行方不明者が従者になっていようが人質になっていようがな」

「それはまた、想像以上に性根が破綻してるんだね、君達は」

アントニオの言葉に、雨月は嗤う。

それは滑稽だと心底、思うからだ。

言葉通りに、性根を侮蔑したのではない。

男は自分を排除すると言ったのだ。

それが雨月には可笑しくて堪らなかつた。

「悪いな真祖。あんまり長く遊んでる時間はねえんだ、手短に済ませるぞ。なあに、心配すんな、俺の封殺法剣アトリビュートならスグ終わる」

改めて、身構えるイスカリオテの聖堂騎士、アントニオ。

「そう言うなよ。まだ空は高いんだ、ゆっくり遊ぼうじゃないか。

童はそのくらい元気な方が、見ていて楽しい。それに……その規格破りの剣は流石の僕も恐ろしい」

変わらず笑みを浮かべたまま、雨月は応える。

しかし、その感情は怒りの変換されたものだ。

遊ぶ。

そこには時間をかけて、自分を軽視した男を壊そうとする意味が込められていた。

かくして、身動きの取れない極彩色の眼前で、『異端殺しの騎士』

と『極東の島国の異質な真祖』の戦闘は開始された。

二人の労した時間は、そう長いものではない。

しかし、それぞれの動きに、廃墟には戦いの痕が無数に刻まれていた。

「ちっ、イ……！」

だが、それでもアントニオは本調子ではない。その舌打ちは己に向けられたもの。

ハウンドプレッシャー 殺戮狩人との戦闘で消耗した身体では、満足に戦闘を行うことが叶わないのである。

「ははっ……全く、不愉快だね！」

対する吸血鬼も、陽の在る時間では、その能力を制限されている。加え、その手に在る唯一の武器は、殺傷能力を持たないのだ。

触れたものを弾き飛ばす特性は確かに雨月にとっては有効であれ、現状の、この聖マルタンの虚構革鞭フーラフラウという武器は、自身の肉体能力も制限されてるが故に対した得物ではないのである。

さらには雨月には、もう一つの制限があった。

それはアントニオの持つ霊装、アトリビュートに因るものである。この霊装の能力が非常に厄介なのだ。

この魔剣に触れた瞬間に、手にした聖マルタンの虚構革鞭フーラフラウの魔力は絶たれてしまう。

そして、雨月自身に触れようものならば、その特性に彼は瞬時に消滅させられてしまうだろう。

不愉快だ。

「……それに、さつきから攻撃の合間に本命を織り交せているんだが、君はちっとも効かないんだね。元から耐魔力の素質があるのかな？」

実に不愉快だと、雨月は思う。

そう。何よりも昼間に於いて最大の切り札ともいえる能力も、この男には効かなかったのである。

「……魅了テンプレーションの魔眼か。ケケツ、残念だったなあ。いくらテメエの十番でも、魔眼そんまもんじゃ、夜だって効きやしねえよ」

アントニオは嗤う。互い決め手に欠けながらも、どちらが有利であるかと判定すれば、自身に分があることを確信したのだ。

この時間に限定してしまえば。雨月の底は見えたのだ。
しかし、雨月もまた嗤う。

自身に現状を打破する手はなくとも、自分以外に、それは在るのだと知っているからだ。

「そうかい。なら君を魅了するのは諦めるけど」

その魔眼が妖しい鈍い光を湛える。それに映されたのはアントニオではない。

「これならどうだい？」

真祖が捉えたのは、深手を負わせられながらも拘束されていた褐色の肌の美女。戦闘を繰り広げていた、二人の共通の目的。極彩色ラウンドムカラーの異名を持つ魔術師。

「……チツ」

それが痛覚という人間の持つ枷に囚われていた彼女を解放させる。ゆらりと極彩色ラウンドムカラーが動いたことを、イスカリオテの騎士は察した。

「さあて……決着でもつけようか、魔術師泣かせの騎士」

雨月は余裕を見せて宣言する。

細められた吸血鬼の憎々しい目にアントニオは吼えていた。

「ドイツも、コイツも……寄ってたかつて俺を怒らせたみたいだなあ！」

上等だ！ピアジャーア 雨月！ 来い！ 何もかも、血みどろに全てを喰い潰してやるよ！」

廃墟に在るべき静寂が訪れるのは、もう暫く先のことであった。

Hound Pressure - 1 ”エンカウント”

「Fab - 28 . Tue / 15 : 05」

詩緒は単車から下り、一人歩いていた。

しかし、それは相方である陰陽師と合流を果たすための行動ではない。

滝口は、一つの目的を達成しようとしていたのである。

即ち詩緒は、おそらく今回の異変に絡んでいるであろう存在を発見していたのだった。

しかし。あくまで、おそらくは、の話である。

その人物と今回の異変の関連性は、まだ推測の域を出てはいないのだから。

詩緒が尾行をしている人物は、雨月自身ではなく、そして、彼が知る少ない情報から判断しても、その真祖の吸血鬼が狙っている魔術師『極彩色』とは別人であることが明白なのである。

だが、滝口の少年は、その人物に確かに感じていたのだ。

『魔』の、それも紛うことなき吸血鬼の気配を、である。

そして、それが極めて強力な吸血鬼の気配であることは想像に難くはないのだ。吸血鬼ではない人間。そうであるはずのその追跡対象に残された気配が、ここまで色濃いものだから。

それは真祖級の吸血鬼の気配ということに他ならない。

雨月という、その存在そのものに直に遭遇したことで、『魔』を排除することに命を賭した者が覚えた感覚である。それは確実な事実として、詩緒には認識されていた。

つまり、その人物は、どのような経緯であれ、間違いなく『真祖の吸血鬼』と接していたということだ。

加え、それそういう可能性の問題だけではないのである。

その人物単体で判断したとしても、彼は明らかに異質だったのだ。

漂わせる波長は、その真祖の残滓に因るものだけでなく、本人自身も何か特質なものを放ち、滝口の第六感を刺激している。

さらには、決して只者ではないことが、その佇まいで詩緒には解っていた。

ポケットに両手をつっ込んだまま、ただ肩で風を切りながら飄々と歩いているようで。しかし、その少年には一分の隙もないのである。

仮に、今。ここで対象に滝口が斬りかかったところで、それは失敗に終わるだろう。

無防備のようでありながら、彼は決して小柄ではない詩緒よりも更に一回り、二回りは大柄の体躯の隅々に、何時如何なる瞬間にでも戦闘態勢に移行できるように気を巡らせているのである。

その不確定要素の多い、しかし、決して油断の許されない年下であるう少年に、詩緒は細心の注意を払いながら追行する。

長身。無駄なく絞られた肉質の良い筋肉に覆われているであろう、がっちりとした身体。落ち着き払った冷静な態度。凄みを持った、大人びた顔立ち。

そう。一見、詩緒よりも年上に見えるその人物は、しかし、彼よりも年下の少年なのであった。

少年の着ている制服が、高校生に、それを教えていたのだ。

この界限では見かけないその制服は、バイクで彼の横を過ぎるという極短い時間であっても、詩緒に鮮明にそれを認識をさせたのである。

その紺のブレザーの胸ポケットに描かれた校章。それは幾駅か離れた街にある、国内有数の有名私立進学中学校のものだったのだ。

数年前。滝口の役割のために。

数ヶ月間という短期間ではあるが、詩緒自身、その学園に在籍していた経験があるのである。それは誤認しようもなかった。

しかし。詩緒が思うのは、そんな年不相応な姿形に関することではない。

「……派手なものだな」

無表情にはあるが、滝口は少年をそう評する。

彼は外見的な要因に於いても、完全に異質だったのである。

少なくとも詩緒は、自身が在籍していた期間に、自由奔放が服を着て歩いているような少年と似たような格好をした学生を見た覚えはない。

顔つき、ナチュラル自然な色合カラーから、金髪であることは血筋であると判別できる。しかし、短く整えられた全体に反して、不自然に伸ばされた襟足は、いかにも反骨風である。さらには、左右の耳に所狭しと並べただけでは飽き足らず、下唇にも飾けられたピアス。それもまた、彼の不羈ふきさを演出していた。

他校区に在つても、屯たむろする近隣としうえの高校の不良たちを意にも介さず、独り、悠悠々々との街を闊歩かつぽする後ろ姿も、彼を是見よがしに表現している。

と。一区画先の角をふらりと曲がると、件の金髪少年は詩緒の視界から、その姿を消した。

「……なるほど、な」

だが、それを追う黒髪の少年に慌てた様子はない。詩緒は唯そう呟くと、歩速を上げることなく少年の後を追っていた。

雑居ビルと雑居ビルの間。

少年の消えた角にあつたのは、通行路では決してなかつた。唯、そういう場所だったのである。

せいぜい、その左右に存在する雑居ビルに入っているテナントに勤務する従業員、そこに商品を卸す納品業者辺りが利用するのが関の山の裏道だった。

そして、無人の、その薄汚れた路地裏の先。

多少の粗大ごみが転がるものの、そこはお謎え向きにばかりと開けた空地くうかんだった。

この周囲。そのそれぞれの土地主が、各々の都合で、勝手気ままに建設した物件ビルのために生じた『利用価値のなくなった土地』（デッドスペース）なのだろう。

その中央で。

金髪の少年は背中を向けたまま、静かに詩緒を待ち受けていた。

「オイ。人様の後ろをチヨロチヨロと尾行ツけ回る、テムエは何者だナニモン？」

ぼつりと零した言葉と共に、凍てつくような殺気が少年からは放たれる。

少年は詩緒の尾行を看破していたのである。

「……たいした自信だな」

そして敢えて、この袋小路へと足を運んだのだ。

しかし、その殺気を浴びながら、詩緒は動じない。

少年は只者ではない。それは解っていたことなのだ。

つまり、眼前の少年が自分の尾行に感付いていたことも、それを踏まえた上でここへと移動したことも、それを知った上で詩緒も誘いに乗っていたのである。

だから、動じない。いつもと変わりはない。表情を変えず、冷静に、滝口は佇む。

「あアツ!？」

だが、その無感情な態度は、金髪少年の癩に障ったらしい。

振り返った少年のこめかみに浮かぶ血管。眉の薄い眉間に深い縦皺を刻み、ただでさえ鋭い目には強い怒りの色を灯していた。

熱い感情を宿した眼と、冷たい無感情を作る眼とが交わる。

詩緒は知る由もないが、彼とて様々な事情を抱えていた。そして、一種の焦りが確かに在った。小一時間前に行った戦闘の疲労の影響も然り、である。

いつもの彼ならば、違った対応も在ったのかも知れない。

しかし、大切な人間を極めて危険な世界に巻き込まぬようにするには、この不慣れた土地にあつて、精神的な余裕はなかったのも確

かである。

宿した怒りが産んだのは、恐怖を伴った殺気。先に少年が纏っていた殺気とは明らかに質が異なる。

威嚇ではなく。確実な殺意を帯びていたのだ。

辺りを支配するように、張り詰めた重い空気が拡がる。

「一応、一つ聞く。お前はコレに関係していないか？」

それでも涼しげに詩緒は自分の都合を相手に押し付けていた。そう言い、懐から取り出したのは大珠と小珠、そして十字架を鎖で繋いだ輪。

ロザリオだった。

詩緒はローマ十字教の信者には明るくない。吸血鬼などという『魔』と異なり、気配で判別できない彼らとの接触には、それなりの判別方法が必要だったのである。

その方法が、そのロザリオを見せるという行為だった。

それはルチア・ダレッツオという修道女シスターが生前に使っていたものである。灰と化して消滅した彼女が、衣服と共に現世に残した遺品だった。

それにより、彼女を知る者からならば、何かしらのリアクションを得るはずであると詩緒は踏んでいたのだ。

だがそれは、この相手に限って言えば、返って誤解を招く結果となっていた。

いや。その態度や物言いは、滝口にとっては自然体であるとはいえ、受け手によれば、十分に敵対意思とも取れるものだ。

誤解されるべくして、誤解されたというべきか。

彼にとって、現状、そのロザリオを信仰する者は、最も警戒すべき、最も忌むべき敵なのだ。

「なるほどなア…… テメエは奴の手下か……」

少年の言う奴とは、アントニオ・ゲルリンツォーニという騎士だった。それは古い知人でありながら、命を遣り取りする相手でもある。

この国に在住する十字教の親強硬派信者派。イスカリオテアントニオの回復の時間を稼ぐための派遣された急場しのぎの尖兵。

相對する黒髪アキラの純国産風無表情男をそう認識したか、少年は

秋良・ヒルベルドは唸る。

「十字教らの方から来てくれるとは手間が省けたぜ！ 雑兵風情がテメエハウンドブレッシャー

殺戮狩人にケンカを売ったことをあの世で後悔するんだなア！」

続けて吼えると、瞬間、一足にして秋良は詩緒との距離を詰めていた。

ハウンドブレッシャー
殺戮狩人。

その二つ名は魔術界で言えば、世界的に通った名前である。

もしも。

この場所に陰陽律法の異名を持つ少女がいたのだとしたら、そこで一応は事態の收拾を見ていたはずだった。

その魔術界に明るく陰陽師の少女は、彼がローマ十字教の信者ではないことを知っているのだから。

しかし、彼女はここには居らず、それどころか、その少女とて、どこぞで要らぬ騒動を起こしているのだから世話はない。

「っ！？」

突如と間合いを侵した相手に、詩緒は息を呑む。

ハウンドブレッシャー
殺戮狩人、秋良・ヒルベルト。その動きは俊敏にして鋭利。且つ、

柔にして剛。

柔軟性に富んだ身体を。それを驚愕するほど見事に作動させ、思おもよらぬ角度、人間という生物の持つ絶対的な死角から攻撃を繰り出す。そこから急襲するのは捨て技でも、置き技でもない。練られた内氣の乗せられた、とてつもなく重い一撃。

晦まし、惑わし、本命を繰り出す。唯、相手を殴り倒すだけの単純な行動。それを成すだけの為に、世界中には数多くの武術があり、その多くの武術にも多くの型、技がある。

一撃必倒。

それが如何に至難の技であるのか。先の事実をそれが物語ってい

るのである。

しかし、秋良のそれは、その至難である理想を実現したもののようであった。

それこそ。つまりは、武道の極意が凝縮されたような攻撃だったのである。

渡辺詩緒という滝口でなければ、そこで総ては終わっていたのかも知れない。

極めの域。そこに到達していると言っても過言ではない。『後の先』を取るという彼の戦法が、同水準の領域にある攻撃から彼を救っていたのだ。

初見であれ、練られていた内氣の動きが、その一撃を辛うじて詩緒に予測させたのである。

それは人間が物質を殴ったような音ではなかった。

響いたのは、あたかも爆音である。

鼓膜を震わす振動が止まぬ最中。

「無手、か」

詩緒は呟く。剣士は、その手に在った愛刀を収めた鞘で秋良の打撃を受け止めていた。

正確には。さらにそれを収めた竹刀袋で受け止めていたのだが、彼の一撃に、その袋は原型を留めずに裂かれていたのである。

急激に膨張させた物体が内部破裂を起こしたように、襤褸と化していた竹刀袋。練られた内氣による異常な破壊力を、それは言葉なく語っていた。

「日本刀、だと？」

確実に極まった。それはそう思わせるに十分な手ごたえだった。会心の一撃、だったのである。

しかし、防がれていた。

そこ在る、己が掌打を防いだ物体を、秋良は忌々しげに一瞥する。

十字教のせいぜい中堅戦闘要員級。イスカリオテどころか、特務部隊隊長にも名を連ねてはいない者。雑魚。

「クツ！」

剣士をそう過小評価していたことに、齒軋りすると同時に、秋良の身体は後方へと跳んでいた。

銀光が閃く。

それは鞘に置かれた秋良の掌底を払う動作と一連の動作により放たれた、刃の軌跡に生じた残光だった。

高速の抜刀術を、その剣士は見せたのだ。

だが、腕の筋肉の動き、剣士の刹那に放った剣氣を読んで秋良は回避していたのである。

何も相手の殺氣、氣、筋肉の動き、魔力の流れ等を読んで戦う態勢は、その剣士の専売特許ではないのだ。

それは、無手という、本来ならば極めて不利な状況で戦う秋良こそがより優れて然るべき技能スキルなのだから。

「チツ！ 胸クソ悪い！」

着地と同時に感情を吐き捨て、殺戮狩人は剣士を、否、侍を睨み付ける。

それは似た戦闘特性を持つ相手に対する、近親憎悪だったのかも知れない。

しかし。感情とは別問題として、認識を改める必要があると秋良は思う。

目の前の優男が、かなりの使い手であるという事実は認めねばならない。

ともすれば、彼の耳に入ったことの在る日本刀を使う近代の高名な剣士ソートマスター 劍聖の異名を持つ二人の侍とは、こういう使い手なのかも知れないとも思う。

しかし、どうやら、その詳細を思い出す暇ヒマはないようである。

「 悪いが急がせてもらう」

零すように呟くと、詩緒は動いていた。

「クソツタレが！」

聞くとか言っておきながら、聞く様子を皆目見せない剣士てきの状態

に悪態をつきながらも、秋良も動く。要らぬ思考を捨て、戦闘に専念して動かねば、やられることは目に見えているのだ。

『魔』の排除。

それを目的として詩緒が動いていたとすれば。誰かのように、人間である人物を『魔』だと、吸血鬼であると、誤認しての戦闘を行ったのだったとしたら。

秋良は、ここでその侍が十字教^{てき}ではないことを悟っていたのだらう。

間違いなく。それに際して、名乗ったであろう剣士に、瞬間、先の剣聖^{ソードマスター}の一人、渡辺^{わたなべ}^{まさき}証希の名を、滝口というこの国に存在する退魔武士を思い出したであろうからだ。

だが、現状、戦う理由なき二人の戦闘は終わる気配はなく。

寧ろ、僅かな掛け違いにより始まった、その干戈^{かんか}は熾烈さを増していた。

Hound Pressure - 2” クロスファイト”

「Fab - 28 . Tue / 15 : 45」

その空間を囲うビル。そこは恰も、二人の死闘のために設けられた闘技場のようであった。

二人の闘士には、これまで互いに有効打はない。

ただ、虚空を激しく裂く刃音と拳音が途絶えることなく、辺りに聞こえていた。

一見、攻撃失敗の多い退屈な試合とも映りかねないそれは、しかし、超高水準な攻防であり、さらには一撃を以て勝負が決する予断の許さない死闘だった。

滝口と殺戮狩人。

この二人に、本来ならば戦う理由などはない。

しかし、何れ、互いにとってこの戦闘は何物のも変えられない経験となるだろうことは間違いないだろう。

「ちっ！」

詩緒にとって秋良は、これまで戦ったことのないタイプの相手だった。

無手。常識的に考慮すれば圧倒的に不利であるはずの男が、しかし、恐れなく、自身に肉迫するのである。

ルチアと戦闘した時に自身のよう。秋良は刀という武器の持つ間合いの内側へと、太刀行きを読みつつ躊躇することなく入り込んで、大柄な体躯を器用に動かし、恐るべき破壊力を秘めた一撃を急所に向けて的確に放つのだ。

加え、その拳技の流派は一つに縛られることなく、拳を振るう本人を表すかのように奔放なだった。詩緒が一つの形の動作を読み切り、対応し反撃に転じようとする時には、また新たな形へと移行する。そして、そのどれもが驚くべき完成度を誇りながら、手の内

を全く読ませずに、ハウンドブレッシャー 殺戮狩人は常に攻撃主導権を奪っていくのである。

剣士にとって、その戦いは防戦一方とあって良かった。詩緒は見事に押し込まれていたのである。刹那に、辛うじて見出した隙に、刀を振るうのが一杯だったのだ。

故に詩緒が吐き捨てたのは劣勢だったのである。

「ンなるッ！」

相対する秋良にとっての詩緒もまた、初見のタイプの相手と言って差し支えはなかった。

確かに秋良は剣士という人種と幾度となく戦い、勝利してきていた。それこそ世界中の様々な剣士と、様々な剣の流派と交戦した経験がある。かつてはチュートン騎士であり、イスカリオテに抜擢された聖堂騎士アントニオ・ゲルリンツォーニも、その一人なのだ。つまり、秋良は剣士という分類の敵との戦闘には、極めて慣れているはずだったのである。

しかし、この剣士の刃は、その誰よりも数段は速かった。その上その刃に氣を乗せている。それはこれまで対戦してきたものと、別次元の剣技と言って差し支えはなかったのである。大概の剣士に対しては、攻撃を察知してからでも十分に反応できる自信が秋良にはあった。生半可な相手ならば、その段階からでもカウンターブローで瞬殺に切つて落とすことさえ、楽に実行できる実力を有していると自負している。だが、この剣士には、その余裕はないのだ。カウンターどころか、通常の回避運動でさえも嫌な汗を全身に感じながら行っているのである。それでも一瞬でも気を抜けば、そこに驚愕する瞬間も与えられずに必殺の刃が閃くのだ。

攻勢を続けているのは、秋良が圧倒的に有利だったからではない。武器の重さの無い素手での攻撃は、最も手数を生み出せる攻撃でもある。その特性を最大限に活かしていただけである。攻めは最大の防御。それを拳士は実践しているに過ぎなかったのだ。

しかし、それとて、ゆとりのある現状ではない。

相手の適応能力が異常だったからだ。
手を読ませずに攻撃を続けるために、様々な流派の拳技を振るえど、剣士はすぐに対応して見せる。
故に知り得る技を、体に記憶させていた業を、動くがままに秋良は振るっていたのだ。

それには自分自身でも、これほどの業を覚えていたのかと、驚いたほどである。

故に秋良が吐き捨てたものも劣勢だった。

互いが抱いていた劣勢と劣勢。互角にあつた二人の戦い。

しかし、やがて、その均衡に狂いが生じ始める。

滝口の剣撃は、じわりじわりと刺激していたからだ。

秋良の中に眠る獣を、である。

極限の業の応酬は、感覚それを揺さぶり続けていたのだ。

極限の緊張は、快楽へと変換されていくのである。

彼の思考を急激に塗り変えていく心ナニカ。

一日に。いや、僅か数時間の間に二度も同じ状態に陥るなど、過去に在っただろうか。

在ったなアツ……！
レインズ・ヴァルウエア 同属不浄んトキ以来かア！？

秋良は異常ハイ戦意高揚に陥り始めていた。だからこそ、驚愕などという瞬間も与えられず、などと過去の状態、意識で反応できていなかった攻撃ものを回避できているのではないか。だからこそ、今、過去を顧みて嗤える暇が在るのではないか。

戦闘意欲。闘争本能。破壊衝動。殺戮願望。

秋良を駆り立てる心理は最早、快感、快楽イコールと同義となっていた。

それは少年を強く速く、凶暴に凶悪に変えていく。

吼えもしない。唸りもしない。唯、嗤う金髪蒼眼の獣へと少年を変貌させていく。

それは唯飽くなき闘争に興じ、命を弄ぶことこそが存在意義であ

る殺戮を好む狩人だった。

「ぐっ!？」

詩緒の口から痛みが吐かれる。

腹部に穴を穿かれたような強烈な激痛が、その身体を走る。続け、それは体内で連鎖しながら暴発を繰り返し、剣士を一撃にして破壊こわそうとする。

人ならざる秋良の動きは、剣士の反応速度を終には凌駕し、破壊の内氣を乗せ、その体を捉えていたのだ。

その衝撃に耐えきれず、詩緒の身体は面白いほど大きく弾かれていた。

ゆらり。

殺氣の塊は動く。不敵に身構える。

しかし、弾いた獲物に追い討ちをかけるべく、躍動することは選
択しない。

秋良は嗤ったまま、ただ獲物の次の動作を待つ。

解っているのだ。

これしきで壊れる相手ではない、と。

そして、本能は教えていたのだ。

相手もまた、まだその潜在能力を隠し持っている、と。

欲望は、それを蹂躪することこそを求めているに過ぎない。

だから、唯、待つ。

その狂気を宿した瞳の見守る中、壁際、叩き付けられる間際に、
剣士は空中で姿勢を整えると、見事に着地して見せた。

続け損傷ダメージなど感じさせずに、静かに、相手を見据えながら刀を構え直す。

「いいだろう」

口に在った血を吐き捨てると詩緒は呟いた。

そして、射抜くように、秋良をその眼に捉える。

「……死んでも後悔するな」

その言葉と共に、剣士の放ったものは剣氣。

手にした愛刀に乗せたのは、相手の命を絶つという意思。
ただ、それだけで終わりではない。
急がせてもらう。

剣士はそう言ったのだ。彼にもそう時間ゆとりはないのである。
だから、躊躇リスキすることなく、詩緒は禁断の扉を開く。

どれほどの危険性リスクが在ろうとも、その拳士の實力を前に、そうすることが最善ベストであると判断した以上、彼には一抹の迷いもない。

奇跡。

どんな魔術師でさえも、決して発生させることのできない事象。

それさえも可能にする内なる領域に、詩緒は足を踏み入れようとする。

神氣。

彼が彼で在り続けるという、単純のようでありながら極めて至難である存在の力を解放して。

「渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

そして。滝口は自らを名乗る。

自分に自分を教えるが如く。

或いは。己が刃に死に逝く者への手向けとして。

たちふさがるもの
秋良は。

「へッ。どうして、刀を　鬼切を止めたんだけ？　渡辺？」
自分の喉元のある日本刀　鬼切。その見事で古雅な刃紋を視線
でなぞる。

それが思った通りに模造刀レプリカなどではないことが、一目で秋良には
解っていた。

刀身に込められている『鬼を切る』『人ならざる存在を切る』と
いう言霊の持つ魔力が、初めて実物を前にしたにも関わらず、その
刀が退魔の聖刀であることを殺戮狩人ハウンドブレッシャーに教えているのだ。

鬼切。それはかつて一条炭橋にて、茨木童子いばきどうじという強大な鬼の片
腕をも一刀の元に斬り落とした名刀。そして、近世、劍聖ソードマスターの異名を
持った剣士の振るった遺刀でもある。同じ境遇に在りながら天下五
剣にも数えられた童子切安綱どうじきりやすつなとは違い、常に歴史の闇に在り、そこ
で退魔のために振るわれ続けた、一般には伝説の中にだけ名を残す
逸刀。

秋良は、その滝口に伝わる宝具を知っていたのである。

「……お前から戦闘意思せんたいいしが消えた。ただ、それだけだ」

芸術品として見ても秀逸な鬼切おむきせものに見入る秋良に、無表情に滝口は
端的に返した。

「ふん。寿命が縮まったぜ？　どうしてくれんだ？　滝口？」

つい先刻まで。本気で命を奪い合おうとしていた相手に視線を遣
り、秋良は口端を緩める。

「悪く思うな。一発は一発だ　そうとでも言っつて、首を刎ねて欲
しかったのか？」

しかし、あくまで真顔で詩緒は返すと、秋良に穿たれた腹部を一
度擦り、鬼切を納刀した。

「おつそろしい奴だなあ、お前」

ぼやいた言葉。それは皮肉などではなく、秋良の本心である。

あの一瞬。秋良は間違いない、奇跡を見ていたのだ。

その時。『斬る』意思の力だけで、その剣士は有形無形、森羅万

象の全てを、否、事象ですらを、間合いという存在するはずの物理的な制限すら超越して、断つことを許可されていたのだ。だから、秋良は動けなかった。行動範囲の総てに、視界内の空間総てに、次元ごと斬り裂くような剣閃を幾筋も幾筋も直感的に感じていたのである。

そして、その存在は秋良の知る、最も凶悪で強大なモノと同質の存在だった。それは純粹なる狂気とも、混沌とも、破壊とも、絶対死とも感じられるモノである。人間の見えるそれでは決してないのだ。しかし、間違いなく、彼は一人のちっぽけな人間として、この世界のその中心に存在していたのだ。

それらを奇跡と言わずして、何と表現しようか。

「テメエ、アレを」

先の能力が、この剣士の本気なのだとしたら。その状態で常に戦闘が可能だというのならば。

鬼切という刀の特効も考慮すれば、この男に勝てる存在など何も在りはしないだろう。

常識という範疇に囚われ続けている限りは、同じく奇跡を自在に使いこなせない限りは、この男には太刀打ちしようもないのだ。

その事実を訊ねようとして、秋良は言葉を呑んでいた。

「まあ……そんな都合よくはねえわな」

派手に咳き込む詩緒は、喀血とも吐血とも知れぬ朱を、何度も何度も地面に向けて溢していたからだ。

それが秋良の一撃しびんに因るものでないことは、本人が最も良く理解している。

それが奇跡の代償なのだ、秋良は解したのだ。

「……完全に行使しなくても、そんだけの反動って……もし完全に行使して俺を始末したトコで、テメエも死んでんだろ？」

秋良は呆れて笑う。無謀で後先考えないところは、彼の知る誰ぞに似ている気がして、気がつけば妙に親近感を持っている自分を認識していた。

「お前には関係ない」

しかし、吐く血を吐き終えた詩緒は、お決まりの言葉を送る。

「ああ、そうかい……」

やれやれと首を振る秋良。

血を吐きながらも、ここまで冷淡な感じのする人（キヤ）格は、家（ゆづ）主とい

うよりも、同級生である黒髪優等生少女似だな、と脱力していた。

Hound Pressure - 3 "コーヒータイム"

「Fab - 28 . Tue / 16 : 25」

「缶コーヒーねえ……アンタもそうだろうが、育ち盛りの人間にソレは少しどころか、かなり物足りねえんじゃないの？」

どこぞでたかり癖を身に付けたのか、それとも、そういう凶太さはありがちな年相応のものなのか。兎に角、秋良は悪びれた様子もなく自販機の前に立った高校生に、そうばやいた。その様に殺戮狩ハウンドプレッシャー人などという、世界的に名の通った畏怖の対象ともなるような、闇の住人としての姿はまるでありはしない。

駅ビルに設けられたバスターミナルの一角。

長距離路線利用者向けに設置された、その待合室兼休憩室に、現在、二人の姿はあった。

実際に同じ中学がっこうの先輩後輩の間柄の二人ではあるが、そのような素振りは皆目見当たりはしない。ならば、年の差を超えた仲の良い友人同士のように見えるのかと言えば、やはりそのような親しげな関係にはちつとも見えはしない。

第三者がそこに加わったのだとしたら、気まずい雰囲気息を詰まらせること請け合いの状況である。

つまり二人は、拳を交えたことで友情を芽生えさせた、などという美談じみた展開で行動を共にしているわけではないのだった。

確信があつたわけではない。しかし、おそらくは互いが互いの事情に参与しているであろうことを何となしに悟っていたのである。だから、二人はどちらともなく情報交換をすることを考え、この場所に移動していたのだった。

もつとも、秋良はこの街の地理に明るいわけではないので、詩緒の後ろを着いて来たただけなのだが。

「……それに言いたかねえが、高級料亭とまではいかねえまでも、

殺戮^{オレ}狩人クラスのVIPと会合するんなら、それ相応の場所と礼節
つてモンも必要だと思つワケよ。回んねえ寿司屋とか、天麩羅屋と
か、すき焼き屋とか、焼肉屋とかよオ、解るだろ？」

続けられる少年の不満。こういう厚かましい態度が出てしまうの
は、ともすると、秋良を取り巻く、今の環境が作り出した弊害なの
かも知れない。

少なくとも、彼の知る家主は、無利子で学費を融資してくれる上
食費は全額負担してくれるのだ。さらにはもう一人、ニートの居候
を無償で養っていたりもするのである。だから、たかだか一食程度、
まして、お役目絡みである目の前の滝口^{たきぐち}が、それを負担しないのは
どうかと思うわけなのだ。

しかし、これは接待などではないのである。実際、そんな義理も
道理も詩緒にはありはしない。

「煩い。黙れ」

故に、その一言は詩緒にとっては必然だった。ましてや彼は人と
円滑に交友を深める術を、瑞穂と接触している件の家主とは違い、
知らぬのである。だから、続いた抗議に釘を刺すと、向けられたク
レームなど意に介すことなく、スポンサーは無糖の珈琲^{ブラック}のボタンを
押していた。

「お！ 今なら特別大出血サービスで、そこの居酒屋で妥協してや
つても構わないぜ？」

辺りは既に陽が傾き始めている。だから、時間的には若干早めで
はあるが、営業を開始している飲み屋もあるにはあった。目敏い秋
良は、そんな希少な店舗^{レア}が反対車線、それも立地の悪い目立たない
雑居ビル、その上層階にあるのを見つけ、往生際悪く、自販機の商
品を吐き出す音を掻き消すかのように発言した。

「……」

しかし、もはや何も語らず。詩緒は購入した缶コーヒーを秋良に
押し付けるかの勢いで差し出す。

「ああ？ なんだ？ もしかしてアンタ、オレが未成年だとか気に

してんのか？ バカバカしい。オレは酔拳も使えるんだぜ？ 年齢
なんざ全く問題ねえよ。つてか、アンタも見てみたいだろ？

ファン・フエイホン
黄飛鴻も真つ青なオレの酔拳。といつても、オレが使うのも黄飛
鴻が使つたとされているのも正確には酔八仙拳っていうんだがな。

黄飛鴻は一般には虎形拳が一番得意だとされ『虎痴』なんて仇名ま
で持つちやいるが、本当はこの酔八仙拳こそを秘奥義・切り札とし
ていてだな、弟子にさえ、その技をほぼ見せることなく

拳士の言う黄飛鴻とは、中国史近代上最高の英雄とされている功
夫の達人である。

小説、漫画等、数多くのジャンルにおいて創作の題材モチーフになっており、
特に映画については、同一題材で制作された最多作品としてギネス
にさえ記載されていた。ハリウッド進出を見事に成功させ、香港一
だと自他共に認められたあのアクションスター。中国本土で数多く
の武术大会を征したという某実戦実力派アクション俳優。映画好き
ならば知らぬ者のない彼らアジアを代表する俳優も、この黄飛鴻を
演じたことがあり、この国であつても、その中国の英傑の名を知る
者は少なくはない。

ブルタブを勢い良く開く音が辺りに聞こえた。

それは詩緒の手に在つた、彼の分の機能飲料水スポーツドリンクのものである。

熱く黄飛鴻、酔拳の蘊蓄うんちくを語る秋良は詩緒の差し出したコーヒー
が目に入らなかつたのか、それとも、敢えて無視したのか。しかし、
詩緒にはそんな話に付き合うつつもりは毛頭ないのである。

だから、受け取つてもらえぬことを悟ると、適当な地面おしほに缶珈琲
をさつさと置き、自分の分を開封したのだつた。

秋良の話他所に、詩緒は飲料を喉に流し込む。

そして、いかに自分の酔八仙拳を見れることが貴重であるかを豪
語する金髪少年の声に、返す彼の言葉はなかつた。

戦闘の後である。乾いた身体を潤すように滝口は一気に缶の中身
を空けると、得意げに触りとばかり、一部の型を見せていた秋良に
背を向けた。

「邪魔をしたな、殺戮狩人」
ハウンドブレッシャー

そして、吐き捨てるように別れの言葉を告げる。

仰飲杯手^{ぎょういんはいしゆ}。某格闘ゲームでも存在する杯をあおるような型を見せた、秋良の目は点になる。

「待て！ 帰るな！ 解った！ 缶コーヒーでいい！ 十中八九、滝口^{アンタ}が動いてる事情にオレも一枚噛んでる！ アンタもオレと情報交換した方が状況的にいいことくらい解るだろ！？」

こちらに一切構わず、見る見る遠退いて行く背中に秋良は叫んでいた。

「全く…… テメエは冗談ってモンを多少は理解しようとしやがれってんだ…… 大体、何をケチってやがる？ 確かに滝口^{アンタ}らは、退魔活動に対する報酬なんざ貰ってねえんだろが、必要経費^{テメ}ったら四天王^エなら卜部財閥^{スポンサー}の御曹司^{じやくし}に直接、ポンと払って貰えるだろーによオ…… 大体、腹が減っては何とやらってのは、武士^{しうじん}らの諺だろ？」

何が解ったのか、何が缶コーヒーでいいのか。そして、何を持って冗談だというのか。そんな未練がましい愚痴の部分はさておき、秋良の言うように滝口には、その活動に対する給料、報酬などは存在しなかった。彼らはただ、それぞれの意志で、それぞれが何かを護るために、自らの危険を顧みずに戦っているのである。

しかし、それでは当然、生活どころか、退魔活動さえままならない。現代社会、先立つ金^{モン}は必要である。だからこそ、それを支援するのが陰陽寮^{せいふせうしき}であり、そして、卜部財閥^{うらふべ}であった。

「確か、卜部貴臣^{うらふべ たかおみ}とかいったか？ アンタと同じ四天王だろ？」

その名前が現役四天王の一角『鶴貫』を担う滝口であり、件の卜

部財閥の跡取り息子である。

ト部家もまた滝口を世に送り出すの武門の一門であった。故に、同じ役目を担う者たちを本社のみならず、関連企業の社員として雇い、その上で役目に対する行動には自由を与え、支援しているのである。

「……やけに滝口の事情に詳しいようだな……だが、一つ断っておく。オレは四天王じゃない」

「ああっ!？」

詩緒の言葉に秋良は声を詰まらせる。

四天王ではない人間が滝口の宝具を所持し扱う。

それは下手をすれば、彼こそが、滝口という組織に『魔』だと標的にされかねないことなのだ。宝具が失われるような事態はあってはならぬことなのだから。

そういえば、と秋良は思い出す。それは、現在、滝口の組織内部に不穏な空気に包まれているという情報だった。

発端は先代棟梁の離反に始まるものだと聞いてはいたが、どうやら、目の前の滝口が無許可で鬼切という宝刀を帯刀する辺り、事態の收拾をまだ見てはいないことが窺い知れる。

「……そうかい……まあ、オレには、んなこたあ関係ねえよ。アンタが使える滝口だってわかりや、それで十分だ」

秋良は、ぼそりと呟く。それで駄々をこねていた少年の姿は鳴りを潜めていた。

そこにあるのは殺戮狩人としての顔である。

秋良自身の本音としては、色々と内情、実情を聞いてみたい気もしていた。だが、それで彼らの戦いに巻き込まれでもしたら大事である。何より、今優先すべきは友人が首を突っ込もうとしている極彩色の一件、そして、ローマ十字教の動向 『ロンギヌスの槍』
なのだから。

「……だったら、聞かせてもらおう。まずは殺戮狩人、お前は何者で、何を目的として動いている？」

詩緒は問う。そもそも、その滝口の少年は殺戮狩人とは、どのよ
うな人物なのかさえ知らぬのだ。

「ああ。いいだろう」

秋良は珈琲を一口啜ると、胸ポケットから煙草を取り出し火を付
けた。

「オレはこの街にアントニオ・ゲルリントンローマ十字教
イスカリオテの騎士と、ランダムカラー極彩色つー魔術師を追って来たんだよ」
一つ紫煙を吐いた後に続いた言葉に、詩緒の瞳には鋭い光が灯っ
ていた。

「Fab - 28 . Tue / 16 : 45」

「なるほどな ランダムカラー 雨月が極彩色をね……」

興味深げに秋良は呟く。

雨月。ハウントブレッシャー殺戮狩人として、それを呼称すれば雨月。ヒアジャーその名は確かに
聞き覚えのあるものだった。しかし、その真祖は本職者アキラが知る限り、
活動を休止していたはずの吸血鬼である。彼が動いていたと知って
いたのなら、この国に来日した際に、目的であった真祖かのじよと接触する
前に、デモンストレーション準備運動とばかりに消滅させていただろう。

「目覚めてやがったか……しかし、厄介なタイミングで絡んで来や
がったな……」

厄介。そういうよりは寧ろ、心底気怠げに少年は煙を吐き出して
いた。

そう。単独で標的を抹殺するだけだというのならば、秋良には絶
対の自信がある。

しかし、今回、そこは救助対象が存在し、足枷ゆっかんまでも有しているのである。

「ロンギヌスの槍、か……」

対する詩緒は、秋良からもたらされた新たな脅威を口ずさんでいた。

「ああ。かなり厄介なシロモンだろ。滝口アタタらにとっては特によオ……つて、オイ！ 待て！ 冷静に考えてみりゃオメエ、オレが得する情報を何にも持ってねえじゃねえーかよ！？」

シリアスに迫っていた秋良が崩れる。

そうなのだ。詩緒の持っていた情報は、雨月ランダムカラーが極彩色を狙っているということだけであり、それはアンデルを拉致したアントニオを追っているという秋良の現在の状況において、何の役にも立ちはない情報なのである。

「……いいえ。そのような事はございません。遺憾ながら、雨月はすでに極彩色の身柄を確保したようです……」

しかし、それを否定した声が不意に起こる。それは落ち着いた女性の声だった。

「……へえ」

声のした方に目を遣り、その女性を一瞥すると秋良は感嘆を零す。だがそれは、その女性の美しさに対してのものではなかった。そこに存在する女性そのもの、その高度な『仮初の生』に感心したのである。

それは強い魔力を帯びた艶やかな純日本人女性。否。魔力を帯びているわけでは決していない。彼女は魔力自体で構成されているのだ。「……アンタ、式神か？」

そう。秋良の告げた通りに、彼女は式神である。陰陽師によって作られた存在なのだ。

「御意」

古風な言葉で、そう肯定して見せる姿はしかし、決してそのような存在には見えない。

美しい女性。人間そのものである。

「 全く……今日はやたらと特殊なモンばかりにお目にかかれる日だ……テスタメント十式霊装に、奇跡に、終いには平安時代から存在する超高度な式神 安倍晴明の十二神将かい」

やや食傷気味に紫煙を垂れ流した秋良に、しかし、女は眉一つ動かさない。

「晴明様にはごさいません。我々の今の主は ハウンドフレックスヤー たが、間髪入れずに先の殺戮狩人の言葉の誤りを正しにかかっていた。」

「ああー……解ってるよ。今の主は安倍晴歌ってん言うんだろ？
天后？」

「御意に」

言葉尻を待たずに自ら正答に改めると、秋良は彼女の名を呼んでいた。そして、その名前もまた正解であった。

Hound Pressure - 4” デイバージェンス”

大陰陽師、安倍晴明。彼が使役した式神を十二神将じふにしんしょうという。

これは薬師如来の護法童子である十二神将、即ちは宮毘羅・伐折クヒラ羅・迷企羅・安底羅・額爾羅・珊底羅・因達羅・波夷羅・摩虎羅・真達羅・招杜羅・毘羯羅と、しばし混同されがちであるが、その実は全くの別物である。晴明の式神、十二神将は式占に見られる十二天将、或いは十二月将のこと。つまりはトウ蛇だ、朱雀すまぐ、六合りくごう、勾陣こうちん青龍せいりゅう、貴人きじん、天后てんこう、大陰たいいん、玄武げんぶ、大裳たいもう、白虎びゃくこ、天空てんくうを指すのである。その十二天将の司る事象については、件の大陰陽師唯一の現存する著書であり、同時に最古の陰陽道の専門書『占事略決』せんじりゃくけつ、その十二将所主法第四の項に記されている。

秋良は、その知識を持つていたからこそ、彼女の名前を天后だと言いつけることができたわけなのだ。

天后は水の吉将、水神。航海の安全を司る女神。

十二神将中、唯一の若い女性の姿を持つものなのである。

「Fab - 28 . Tue / 16 : 50」

このバスターミナルから各地方都市に向けて発車されている長距離ライナー。停車場付近だけに限定せずとも、そこを行き来する多くの大型バスにより、どす黒い撒排ガスはターミナル一帯に撒き散らされていた。それを乗客が被らぬように全面をガラスによって区切られた空間。

ここには人が居て然るべき場所、なのであった。

現に今も、この区画以外の同じ場所には人影が伺えている。

しかし、彼らのいる区画から運行されているのは、本州以外の地方都市へと向けて発車されているものであった。その主たる発車時刻は中夜に集中していたのである。

故に、そこには変わらず部外者の姿はない。

二人の少年と、若い女性の姿をしたモノが存在するのみである。

「で？ 天后、お前のさつき言つてたコトのソースはどこから来たんだ？ お前の主からか？」

禁煙のプレートを知つてか知らずか。秋良はタバコに火を着けながら、それを落とすことなく、器用に口を開いた。

「御意に」

その問いに表情を全く持つて変えず、天后は即答してみせる。

だがそれは、間違いなく危機的な状況なのだった。

所詮は表向きの世界十指の魔術師。アントニオはアンデルをそう蔑んだが、彼女の持つ魔力、魔術は間違いなく世界的に見てもトップクラスにあることは臆目なしに事実なのである。

その彼女が真祖から呪詛を受け、爵級へと変貌する。

それがどれほどの脅威を生み出すことか、想像に難くはない。

「チツ」

返される返事が予想された通りでありながら、秋良は舌打ちする。

天后は自分の主がもたらした情報だと言った。

陰陽寮という匣。その式神の主は間違いなく、この街から遠く離れた、その籠の中に閉じ籠っているわけであり、当然その情報は、彼女が直接見聞きして仕入れたものではないことを秋良は知っている。

通常、そういう情報は信憑性の非常に薄い、所謂、噂の類としか取りようがないはずなのだ。

だが、秋良は彼女が何者であるかを知るからこそ、改めて苛立ちを示したのだった。

安倍晴歌という少女は、陰陽寮の陰陽頭。そして、真なる『占事略決』という霊装の適合者。つまりは現在という時代に於いて、平安時代から変わることのない陰陽師の頂点であり無二の術者、安倍晴明の力そのものを行使する者であるということなのだ。

秋良はアンデルという女に、ローマ十字教と言いついけ好かない宗教の使徒である極彩色ランダムカラーという魔術師に、決して好感を抱いてはいない。

雨月という吸血鬼の下僕にされたというのなら、どれほど凶悪な力を持つとも、それこそ喜んでその真祖もろとも灰に還してやるうと思う。

しかし、友人は ときつ かなた 時津彼方は違う。

彼方は、その極彩色ランダムカラーを救うために危ない橋を今、正に渡ろうとしているのだ。

「オイ、渡辺。あくまで確認の為だが、お前の考えを聞かせろ」

言葉と共に、吐き出された紫煙。その空間と煙の境界を凝視したまま、声をかけた滝口に視線を遣ることなく殺戮狩人は独り言のように呟く。

「雨月は極彩色ランダムカラーをすでに眷属に変えているか、否か？」

そして、返答者の返事を待つことはせず、質問を続ける。

「いや。まだだろうな」

「ああ、だろうな」

答えた詩緒の言葉。その根拠を聞きはせず、ただ同意する秋良。

滝口が何を持ってそう判断したのか。殺戮狩人は理解しているのだ。

一つに現状で極彩色ランダムカラーを眷属に変えることは、能力を制限させてしまつようなデメットしかない。しかし、これは後数刻の猶予もないことである。

直に、夜は来る。

彼らに絶対の支配を約束された時間帯が訪れるわけである。

だが、二つ。雨月が極彩色ランダムカラーに欲したのは召喚魔術なのだ。

それを今、彼女は使うことはできない。いや。これは秋良の推論から導かれた予測でしかないのであるが。

だが、秋良はあの霊装と対峙して、直感的に『そういう事態に陥るであろう事』を感じたのである。

そして、その情報は推論と断つた上で、滝口にも伝えていた。

しかし、どうやら、その滝口は少なくともこの状況下で殺戮狩人ハウンドブレッシャーを信用に値する者と認識したらしい。だからこそ、その推論を踏まえた上で自らの意見を秋良と同じくしたのではないか。

身体の変化がこのまま彼女の魔術マジックを永続して奪う危険性があるのなら、それこそを求める雨月は暫し思い止まるだろう。少なくとも、それを解除する鍵。アトリビュートとアントニオが近くに存在する限りは。

それが二人の出した極彩色ランダムカラーの現状だった。

「天后、聞かせてくれ。ロンギヌスの着弾予定時刻は割り出せているのか？」

詩緒は天后へと向き直る。それはさも当然の如く、この国を爆撃しようとしている強力な魔術の存在を、晴歌も知っているであろう口ぶりだった。

しかし、果たして。

「主の予測であれば、それは今宵、戌の刻辺りとのこと」

詩緒の予想した通りだった。そうでなければ安倍晴歌という少女が天后という式神を遣わすはずがないのである。

式神を行使する呪術は、集中力と精神力を多大に消耗するのだ。

式神は本来、呪まじで自然界の精霊などの霊体を強制的に呪符等に束縛し、無理やりに使役するものだからである。

呪詛返しまじ。被術者の元で破られた式神は術者を襲う。

その現象が発生するのも、いわば当然といえば当然のことなのだ。加え、天后は十二神将に名を連ねる存在。そこらの低級霊を使役するのは、比べるまでもなく桁違いの消耗があるはずである。

そうであるのも関わらず、彼女をここに派遣しているということ。

それが晴歌が事態の全貌を理解し、その重要性を知っていると表れに相違ない。

「二十時前後、か 残り三時間程度……爆心地は」

「オレらの街、だろうな」

現代時刻に即座に換算した詩緒の言葉に、秋良は続ける。

「ロンギヌスを防ぐ手はあるのか？ 陰陽寮に？」

「手は存在しない訳では御座いませぬ。しかし、残念ながらその策は……」

「晴歌がもたない……そういう事だな？」

秋良の疑問続け発言する無表情二人。

秋良は事態を忘れ、薄っすらと笑う。どちらが式神しきじもののだから判りはしない、と。

「御意に。確かに晴歌様であれば、対象飛来魔術を禁呪等きんじゆにて防ぐことは敵いましょう。しかし、その際、主にかかる負担は計りしれませぬ」

淡々と告げていた天后に、一瞬感情が浮かんだように見えた。

占事略決を行使することにデメリットは存在する。

安倍晴明という突出した陰陽師の力を現代に黄泉返よみがえらせるための支払う代価は、霊装適合者の命、なのである。

安倍晴歌は占事略決を使うたびに、余命を失っているのだ。

「だから、俺を頼った そういうことだな？」
「御意」

今は寧ろ、この男の方が作り物に見える。

秋良はそういう感覚を持ちながら口を開いた。

「……オレの予想がハズれてねえなら、お前らはかなりイカれた策を実行しようとしてるな」

「別にイカれてなどいない。俺にはそれができる。ただ、それだけだ」

詩緒の表情は変わらない。

「言っねえ……だが、できる可能性があるってだけだろうが。しか

し、確かに『渡辺詩緒』にしかできないだろうよ　超高速で飛来する魔術を着弾寸前で『斬る』なんて芸当はよオ」

「ぼやきつつ殺戮狩人は煙草を棧で押し消すと、何時の間に空けたのか定かではない珈琲の空き缶に、その吸殻を捨てた。」

「オイ。可能性を挙げる手があるぜ」

言葉を続けた秋良の手を離れたその空き缶は、ゆるい放物線を描いて、自販機に横に備え付けられた赤い分別ゴミ箱の容器よりも僅かにだけ大きい丸い穴へ、見事に飲み込まれるように消える。

「……アトリビュート、か……」

「ご名答。そう満足げに金髪の少年は笑う。」

「ああ。アレを使えば、少なくとも『魔術という無形のモノを斬る』という精神統一を捨てて、『飛来する高速物体を斬る』って行為に専念できるだろ？」

「そう告げながら、殺戮狩人は自らの荷物を背負う。」

「さて。ここで相談があるんだが？」

「偶然だな。俺にもお前に頼みたいことがある」

「つい先刻、命の遣り取りをした二人の少年は視線を合わせる。」

「適材適所、ってコトだな？」

「ああ」

「それで話は着いていた。」

「だったら、まだ勝算はある。極彩色クソおんなを拾って、雨月を完全に抹殺する。時間制限トミシを考慮すりゃ、滝口オマエには不可能なコトでも、殺戮狩人オなら楽勝だ」

「殺戮狩人は口元を不敵に歪める。」

「そうかもな」

「薄く笑みさえ浮かべ、その言葉を詩緒は否定をしない。」

「へっ。何処まで本心なんだかな　まあ、アンタにそう言われるのは悪い気はしないがね。じゃあな、コーヒーごっそさん」

「邂逅の終わりを悟ると共に、早速行動を開始したのは殺戮狩人だ。おもむろに立ち上がると、背を向けヒラヒラと手を振り、そ」

の長身の身体で自動ドアを開く。

「どうして、本気を出さなかった？」

薄汚れた冷たい外気と混ざる、滝口の問い。

「何のコトだ？」

不意に問われた言葉に秋良は飄々と応える。

「……その得物を使えば、俺を瞬殺できたんじゃないのか？」

詩緒が指した得物とは、今しがた秋良が背負ったバックの中に確かに入っていた。

「別に。お前を見くびってただけだよ」

へへっ、と歳相応の悪戯地味な笑みを浮かべると秋良は振り返る。

「……お前とは、二度と対峙したくはないな」

そこに在ったのは、僅かに感情を帯びた滝口の顔。

「同感だな。冗談がまるで通じない奴との死闘は、こっちも願ひ下げだ」

ガラス扉は無機質な音を立て、再び隔離された空間を作り上げる。その向こうを歩き始めた金髪の少年は、再びこちらを振り返ることとはなかった。

在るべき場所へ。在るべき役目を果たすべく。秋良は真っ直ぐと己の道に行く。

それは残された少年とて同じ。

この上ない協力者との巡り会いという奇跡に浸ることなく、滝口^{おのれ}を全うするべく始動する。

「天后。お前が存在していることで晴歌にどれくらいの負担がかかっている？」

「戦闘を行わなければ、私を維持するだけでしたら殆どは。私は晴歌様を主と認めております故」

「だったら、頼みがある」

「御意に。それよりも渡辺様。そろそろ『携帯電話』とやらの電源を入れた方がよろしいかと」

詩緒が何を言わんとしたかを理解しているように了承すると、柱

に備え付けられた古めかしい時計を一瞥し、天后は主から受けていたもう一つの言伝を口にした。

それはこの時刻に間違いなく伝えるよう、晴歌から言付けられた言葉だった。

言われるがままに詩緒はレザージャケットから携帯を取り出す。

二つ折りのディスプレイ部分を指で跳ね上げると、続けて電源を入れた。

壱を切ったように、メーカーが出荷時に設定しているデフォルトのままのコール音が鳴り出す。

ディスプレイに表示されたのは案の定、賀茂瑞穂という少女の名前だった。

おもむろに通話ボタンを押すも、詩緒はレシーバーを耳に近づけようとはしない。

そして、詩緒の予想通りの展開が、そこには繰り広げられていた。レシーバーから聞こえてくるのは怒声。一体何が彼女をそこまで叫ばせるのか。

小さな携帯が音源であるとは到底思えない、少女の鬱憤を晴らすべく続けられる喚きは小さな空間に木霊していた。

「Fab - 28 . Tue / 17 : 10」

そうして。

少女の怒りが一応収まった　携帯から聞こえていた怒声が止んだのは、通話開始から実に十分程が経過してからのことだった。

「Fab - 28 . Tue / 17 : 10」

「詩緒！ アンタ、なんでいつまでも、携帯の電源切ってたのよ！？」

電話口で悪態をつけるだけついたであろうはずの瑞穂が、しかし、再び文句を撒き散らしながらバスターミナルの待合室に飛び込んで来たのは、その声が詩緒の携帯からは聞かれなくなった直後のことだった。

「……って、やっぱり天后だったのね、この魔力の源は。助かったわ。お陰で詩緒^{このバカ}を補足できた」

そして、友人の式神である女性を、そのガラスで囲まれた室内に認識すると陰陽師の少女は彼女にそう声をかける。

「で！？ 加えて、なんで電話に出ても通話^{へんわ}をしないの！？ 電話という機械は、受話器を耳に当ててこそ初めて会話が可能になるっていう一般常識から叩き込む必要があるわけ！？ アンタには！？」

だが、その天后からの返事を待つことはない。瑞穂は声をかけたかと思うと、少年に怒りの矛先を向け直していた。

詩緒は確かに彼女の言う通り、手にした携帯を耳元へとは運んではいなかったのである。現在も通話状態のままのそれを持っているのみだった。

もつとも当然、それは瑞穂の言うように携帯電話という機械の使用方法を詩緒が本当に知らないからではない。怒声を喚き散らかすだけで、彼女とは会話を行うことができないことを予想し、彼なりに無駄を避けただけのことだ。

「それよりも、そいつは誰だ？」

そついうスタンスは、今、この時も同じである。

無表情に目の前の少女怒りを全くもって完璧に無視して見せると、

詩緒は瑞穂の後に続いて入室していた少年について訊ねていた。

その発言に、瑞穂の表情が凍り付く。

暫しの沈黙。

一方的にこちらの都合を押し付けて怒る瑞穂と、そんなことを全く気にも留めずに自分の疑問を一方的に口にした詩緒。

いつもこのような感じで二人のやり取りがなされるのだとしたら、側にいるであろう第三者は、どれだけ疲労困憊じぶんになるのだろうか？ 入り口に佇んでいた詩緒の話題に出た少年は、そんなことを考えるだけで見事に疲弊し、自ら名乗ることを忘れ、ただただ二人のやり取りに呆気を取られているだけだった。

しかし、いざ自分が二人の間に話題として登場し、その片割である黒衣の少年と目が合うと状況は一変する。

その邂逅に感じた感覚は、酷くもやもやと鬱積する何か。

瑞穂と共に現れたその少年が、その時に抱いた感情は果たして嫌悪のようなものだけだったのだろうか？

「はあ……」

瑞穂の大きな溜息が静寂を破る。

「……そうね。そうだね。そうだったわね。アンタとまともに話しようなんてコトを考えた私が愚かだったわ……」

わなわなと震える肩が後姿であっても、それが決して本心ではないと少年に教えていた。

「……人に名前を訊ねるってんなら、先ず自分から名乗るのが礼儀なんじゃないの？ 詩緒、とか言っただけ？」

目の前の少女が不憫でいたたまれなく思ったのか、少年はそこで物怖じすることなく二人の間に口を挟んだ。

決して友好的ではない二人の少年の視線がぶつかる。少年の身長は、瑞穂よりも僅かに低いくらいだろうか。

詩緒との体格差は歴然だった。しかし、少年に怯む様子は皆目見当たりはしない。

「……なるほど」

その落ち着きように詩緒はぼつりと零していた。

少なくとも全くの部外者ではないようだ。そして、単純に被害者とかいう手合いの者でもないらしい。そして、間違いなく『死』と直結した修羅場を潜り抜けてきた人間だ。

その少年をそうとでも認識したようである。

「何だよ？」

そんな詩緒の態度に少年は気分を害したのか、怒鳴りはせずも、声に感情を込めていた。

「タンマ。これ以上、私の悩みの種を増やさないで」

不穏な空気を漂わせようとした、二人の間に割って入る声。それは怒りに震えていたはずの陰陽師の少女もの。与えられた精神的ダメージに頭を抑えつつも、事が拗れることを嫌った瑞穂は仲裁を買って出たのである。

「詩緒。今のはアンタが悪い。彼方の言う通りよ」^{カナタ}

そして、滝口に有無を言わさぬように非を叩きつける。

「彼方、ごめんなさい。コイツはこういう性格なのよ。悪いけど、今は勘弁してあげて。現状、何が一番大事な問題なのかを考えて頂戴。貴方ならできるでしょ？ 私たちが対立することは、何の得も生み出さないわ」

続け、詩緒に代わって詫びを入れると、少年 彼方にこれ以上の黒づくめの少年に対する批判を封じていた。

無言を貫くも、少年に対する言動を止める詩緒。

「……そう言われると、何にも言えなくなるな……オーライ。解つたよ」

どこか釈然とはしないものの、了承を口にする彼方。しかし、女性に謝罪されて、その上で事を乱すような彼方ではない。

「ありがとう」

笑顔を見せて彼方に感謝を告げると、瑞穂は改めて口を開いた。

「コイツは渡辺詩緒。一応、私の相方よ。あ、変な誤解はしないで頂戴。あくまで陰陽師としてのパートナーよ」

紹介された詩緒は、やはり変わらぬ無表情のまま彼方を値踏みしているかのように見ている。いや、ともすると興味なく、ただその双眸に彼方を映しているだけなのかも知れない。

予想していたことなのだが、挨拶は当然ながら、表情を全く崩さず佇んでいるだけだから、何を考えているのか彼方には皆目検討がつかないのである。

生き生きと表情を変える少女とは正に対照的だった。しかし、その不思議と友好的になれない、大抵の人物と友好的に接することができる彼方からすると特異な少年が、何か強い意志を秘めていることは理解できていた。

その双眸は、無機質なようすで、決して死んではない。

「で、詩緒。彼は時津ときつ彼方君……そうね、今回の一件で最も頼りになるであろう助っ人の仲介人よ」

紹介された異質な人物に対し、あれこれと思案している間に、彼方しんは詩緒に紹介されていた。

「は？　フイ、いだッ!？」

が、その紹介には詐称が為されており、彼方は我に帰るなり驚き、疑問を浮かべ、直後には痛みを呻く。

瑞穂が何の躊躇もなく、その踵に全身全霊を込めて、彼方の足の小指を踏み潰しにかかっていたのだ。

「しっ！　余計な混乱を招かないように話を合わせなさい！　コイツは融通が利かない偏屈者なのよ！」

ソレ、詩緒とやらに聞こえてんじゃねえの……？

と、瑞穂の声の大きさに苦情を告げようとするも、脅迫、そしてその殺気に彼方は口を噤んでしまう。

「……で？　詩、……渡辺も、やっぱり魔術師なのか？」

変わりに思った疑問を涙目のまま口にしてみる。この無表情男との取っ掛かりになれば幸いとばかりに、であった。

共同戦線を張ろうというのだ。

彼方としては、この男が信用にたる人物かどうかを見定めなくて

はならない義務がある。この男に自分の、いや、何よりも重要なことは、秋良の命ゆづしんをも預けねばならないのだ。

そして、戦力的な兼ね合いもあった。戦力を把握する必要があるのだ。

魔術師がいくら徒党を組んだところで、イスカリオテの騎士には敵いようもないのである。

「いいえ。詩緒は滝口 『滝口ものふの武士』よ」

しかし、答えたのは詩緒本人ではなく瑞穂だった。

「は？ もののふ？ もののふって、武士ぶしだよな？ サムライってコトで理解して、いいんだよな？」

答える相手が別人であること。それは十分に彼方も予想していた。だが、予想もしなかった返答に素っ頓狂な声を上げると、自身の持つ常識から懐疑的に問いかける。

「そうよ」

そんな彼方に怪訝そうな表情を向け、断言して見せる瑞穂。

「え、 ええっ!?!」

「アンタ、馬鹿？ 日本人のクセに侍を知らないの？ 侍がなんたるか、説明が必要？」

「イヤイヤイヤ！ 知ってるからこそ、だろ!?! そうよ、ってお前、幕府なんて機関もとつくなければ、廃刀令だつて施行されて……って、いつの剣客浪漫譚の話だよ？ コレ、舞台は現代ですよ
ね？」

時代錯誤甚だしい職業ジヨブの登場に彼方は驚くも、しかし、またも瑞穂は断言して見せる。

「時雨沢巧しぐれさわたくみ、『灰色銀狼シルバーアッシュ』 忍者もいるんなら、侍がいたって何の不思議もないでしょ？」

「え？ あ、ああ。そ、そう言われれば、確かに……」

しかし、彼方はそれで納得せざるを得なくなる。

「助っ人ってというのはなんだ？」

しかし、どうして巧という人物を知っているのかを聞こうとした

彼方の言葉を遮るように、沈黙していた武士は発言した。

然もその台詞の頭には、くだらない話をいつまでしているつもりだ、という批難が隠されていそうである。

「……アンタは反対かも知れないけど、天后が来てるってコトは、現状を把握してるでしょ？ 雨月とロンギヌスの槍。そのどちらもを排除するには、アンタと私だけじゃ残念ながら確実性に欠けるわ」

言葉を選ぶように。至って真剣に瑞穂は話を切り出す。

ともすれば共同戦線を実行するという一連の行動の中で、この偏屈独立突進侍を如何に納得させるのか、ということが最難関であると踏んでいたのである。

「それなら問題ない」

「ああ、ああ！ 煩い！ 俺一人で十分だ、なんて、何の根拠もないセリフは受け付けないわよ！」

間髪入れずに返答する滝口の言葉を掻き消すように瑞穂は叫ぶ。それは反対の意を詩緒が予想通り告げるであろうという反応だった。違う。雨月の件は、ある男に任せた」

しかし、その予想を反する言葉が再び黒衣の少年からもたらされる。その無表情は、暗に先の自身の言葉を聞かずに闇雲に非難したことを責めているかのように冷たい。

「は？ ある男？ アンタ、雨月は曲がりなりにも真祖よ！？ 何処の誰においそれ任せたなんて、なんて無責任なコトを！ アンタ、頭でもぶつけた？ いつもなら何が何でも自分でやらないと気が済まないくせに、今回に限って何を勝手な！ こっちはね！ 必死の思いで『殺戮狩人』の仲裁人を見付けて来たのよ！」

味方が多くなるんならいいことなんじゃないの、などという感想を思いつつも彼方は口を挟みはしなかった。少女の怒りの矛先が、こちらに向くことが怖いからである。

「ああ。その殺戮狩人に一任した」

しかし、次の詩緒の言葉には、その彼方も驚く。しばし無言を通

す予定が、口をつく。

「は？」

重なる瑞穂と彼方の声。

「……………アンタ何言ってるの？ ハウンド・ブレッシャー 殺戮狩人って ユドヘッド・ヘルシング 十二真祖を」

「ユドヘッド・ヘルシング 十二真祖云々（うんぬん）は知らないが、ハウンド・ブレッシャー 殺戮狩人なら知っている。アイツのことだろう？」

驚いた表情のまま訊ねる瑞穂に対し、変わらず無表情で答える詩緒。

その視線は二人の後方、この待合所の入り口後方に向けられていた。

そして、その直後、詩緒の視線の教えていたアイツという人物が、勢い良くこの密室へと乱入して来る。

その勢いは、あたか 恰も数分前のその陰陽師の少女の様である。

「テメエ！ 渡辺！ 何が一発は一発で首刎ねでもして欲しかったか？ だア！？ しつかり一撃くれてるじゃねえか！ お陰でおにゅーの携帯がお釈迦だ！ ダチ 友人に連絡つけられねえだろ！ とつとと弁償しやがれ！」

それはつい先刻、詩緒と別れた金髪長身強面の中学生だった。

「回避できなかったお前の責任だ。俺には関係ない」

詩緒はしかし、これまたその怒声をさらりと受け流す一言を口にするのみ。

一瞬、ひくりと口元を歪めると、秋良はこめかみに血管を浮かばせてパキリと指を鳴らす。

「……………オーケイ、今度の俺はハンパなくバイオレンスですよ？」

って、彼方？ 何だってお前、こんなトコにいるんだ？」

が、自身のすぐ横に連絡をつけようとしていた友人を見つけると、瞬間的に地獄を連想させるほどに当たりに発した殺気を霧散させた。「何でって……………お前、そりゃこっちのセリフだ。僕はコイツを相手の元まで連れてきただけだ」

そう言っ問われた彼方は眼前の少女を示す。

「え？ って事は……何？ このヤクザ面が殺戮狩人^{ハウンドブレッシャー}って事？」
ほんの数分前に詩緒に礼儀を説きながら、瑞穂は秋良を指差し驚いて見せていた。

その気持ちは別の意味で彼方には解る。この少年が世界的に名前の通った十二真祖殺しの殺戮狩人^{ユドベード・ヘルシング}などと、誰が思えようか。

「彼方。何だこの失礼極まりない女は？」

「瑞穂。陰陽師。協力者。頭いい。甘味好き。ってかかなり容赦ねえ。出会い頭に殺されかけた」

軽い怒りにひくつきながら問う秋良に、彼方は答える。

それは極短時間に時津彼方という少年が、賀茂瑞穂という少女に抱いたイメージを単語として羅列しただけに過ぎないものだった。

「ワケ分らんが、渡辺の知り合いか？」

しかし、そんな要領の得ない答えにも、秋良は何気に納得して見せる。相方が相方なら、それだけ強烈な性格が必要だってことか

一種呆れにも似た、そんな秋良の刹那の表情を感じたのは彼方だけだった。

「まあ、一応。賀茂瑞穂よ、殺戮狩人^{ハウンドブレッシャー}。さっきの怒鳴り声を聞いた

限りじゃ、あの馬鹿が何かしでかしたみたいね。携帯がどうとか」

向かい合う陰陽律法と殺戮狩人^{ソーサラーテキスト}。

「応。殺し合ったぞ」

にやりと口元を歪ませ、秋良は嗤う。

「……あら、そう。貴方、意外と詩緒とウマが合うんじゃないの？」
そう答えた瑞穂も微笑むが、それは冷たい笑みである。

「冗談キツイ。あれは無理。男の無口キャラはうぜえだけだ」

「は？」

「いや。忘れてくれ。忘却の空まで」

表向きは友好的に接しながらも、二人が警戒し合っていることを彼方は感じていた。

そう会話しながら、その身体が陰陽師と自分の間に割って入っている。

即座に戦闘に移行しても、彼方を守れるように構えているのだ。

「で、ところでアンタ、どこまで理解してる？」

「さあ？ 貴方が理解しているコトは理解しているんじゃないかしらっ？」

探り合うように繰られる言葉。

しかし、意外な声に事態は一変した。

「くだらないな。互いが信用できないなら、自分の意思で勝手に動けばいい」

それは滝口の声だった。

「少なくとも、俺はそうさせてもらっ」

いつもと変わらず、彼は淡々と自身の思考を告げる。

「それでは渡辺様」

「ああ」

天后の言葉に詩緒は頷くと、彼女は一同に深く頭を下げ、背を向ける。

「……俺は殺戮狩人にハウンドブレッシヤー雨月討伐を任せた。だから、ロンギヌス阻止に全力を注ぐだけだ」

詩緒の言葉を背に受けながらこの部屋を後にしようとする天后。その女性は彼方の横を過ぎる瞬間、少年に微笑んだような気がした。

その微笑みはどこか達観していて、まるで彼女ではない誰かが彼女の身体を借りて、彼方に自分の意見に自信を持つように諭したように感じられた。

「そうだな」

ぼつりと独りごち、彼方は笑う。

「僕も 僕もそう思う。アンデルを救いつつ、ロンギヌスを阻止する。それには俺たちが協力するのが一番だと思うし、少なくとも瑞穂は信用に値すると思う。秋良、お前はどうかんだ？ 渡辺は信用できないか？」

少年は自分が何を信じ、何を行うべきなのかをはっきりと判断し

ていた。

互いを半信半疑な魔術師二人。己を信じるのみの侍。彼方の言葉は、その三者とは異なる強い信念と、強い意志を感じさせていた。

「言い方を変えるぞ、秋良。お前は、この街や、国のみんなを、救いたくはないのか？ お前がやらないってんなら、僕は一人でも雨^{ラス}月^{ボス}を倒して、無限術式って悪夢を殺してみせる」

神殺^{ロングキヌス}槍。神すらを殺す力。

猟奇的とも言えるような英雄願望の向こう。魔術世界とは遠い場所に住んでいる、秋良からすれば単なる一介の少年過ぎないはずの彼に感じている強さ。

滝口の見せた奇跡と同等の奇跡。不変なる意志。

こうなった彼方には何を言っても聞かないことを、秋良こそがこの場の誰よりも知っている。

「……ハッ、ハハ、ハ！ 分あったよ、やりやいいんだろ、やりや！ おい、陰陽師！ 渡辺！」

呆れたように、嬉しそうに、秋良は語る。

「……ハイハイ、ったく、熱っ苦しいわねえ」

同じく呆れた口調で応えた瑞穂も、どこか微笑っているように彼方には見えた。

「ドイツもコイツも、必要なモンはさっさと掬って、大切なモンをとつとと救って、いらねえモンをばっばと潰すぞ！」

「ふふ、了解」

そして。続いた彼方の宣言に応えた瑞穂は、間違いなく笑っていた。

それが時津彼方の魅力^{ちから}、なのだろう。

何となく。

^{ハウンドブレッシャー}

殺戮狩人なる世界的な魔術師が、彼の傍に居るのが瑞穂には解ったような気がしていた。

何となく。

ローマ十字教なる世界的組織が、単なるちつぽけな個人でしかない彼を危険視するのが解ったような気がした。

それはどんな魔術の才能よりも、極めて稀有な才能を彼が有していたということだ。

ローマ十字教が本当にそれを知って動いているのかどうかなど、陰陽寮という一国を活動の場とする魔術師には解らない。

ただ彼らは何れ間違はなく、それを知り、その才能に畏怖するであろうことを少女は確信する。

「下らない」

「くっくだらねえ」

瑞穂の耳に二人の少年の声が聞こえた。

それは決意。

二人の極めて稀有な存在　個を突き詰めて行った才能と、そして、輪を突き詰めて行った才能の、悪夢を終わらせる決意。

「　渡辺詩緒。その悪夢を殺す人間の名だ」

「そんなくっくだらねえ神様の悪夢は　この僕が、ブチ殺す！」

A World Border Line - 1 ”世界の誤謬”

「Fab - 28 . Tue / 18 : 55」

駅前にあつた大きな公園。

豊かに緑を湛えたその公園の出入り口の一つである鉄製のアーチ状の門を潜ると、そこを境に景色はがらりと姿を変え、目の前には無機質な灰色の高層ビルが建ち並ぶ。

原生林さえも残した公園と隣接する高層のオフィス街。いや。この街ではオフィス街のみならず、その公園を中心に繁華街や住宅地は広がっているのだ。

自然と都市の融合。

都心に在りながら、その中央に配された広大なその公園は、この街の都市開発のスローガンを正に具現化した場所であると、この計画を推進してきた政治家たちは声高らかに謳う。

さも自分たちの手柄のように彼らは誇らしげにそれを語るが、それは何も彼らの権威のみがそうさせたのでは決してない。ヒートアイランド、地球温暖化、増加する二酸化炭素。エコ。自然環境に対する民衆の関心の高まり。むしろ彼らは世論に対し従順に活動し、有権者に媚を売るべく方策を決定したのであり、直接的な利権のみを求めたのだったとすれば、この街の風景は全く違うものになっていたのでらう。

尤もそんな政治的な話や、それにまつわるこの街の発展の背景など、今そのゲートを通過した異国の男には何の関係もなければ、興味もない話である。

男にとって重要だったのは、この公園がその身を隠し、疲労を回復するのに非常に適していたということだけなのだ。

そして、その異国の騎士アントニオ・ゲルリントニは、今日訪れたばかりの慣れないこの街を、しかし、迷うことなく目的地へ

と向かい歩き出す。

試みていた戦略的撤退行動は、既に中止されていた。いや、その行為はその意味を消失させられていた、そう表現するべきか。

追跡者は彼を追う理由を失い、彼もまた帰還すべき場所を失ってしまったのだ。そういう行為の成り立つ条件は、もはや、どこにも存在しなくなってしまうのである。

しかし、通常は異常事態といえるその現状に在って、アントニオは全く異常を感じてなどいなかった。

元々、アントニオはイスカリオテ　　と言うよりは、その統括役であるユダから、隙を見ては切り捨てられようとしていたのである。そしてついに、それが実行に移されたというだけのことなのだ。

『ロンギヌスの槍』の発動決定。それはつまりはそういうこと。

ユダが以前から自身を快くは思っていないことを、アントニオ本人も認識していた。

それは恐らくは彼の振るう『封殺法剣』^{アトリビュート}のためであることは、想像に難くない。その強力過ぎる霊装は味方といえども、魔術師という人種にとっては脅威でしかないのである。

ましてやユダという人物は、猜疑心が異常なまでに強い。自分以外の何者をも、聖職に就く身でありながら、決して信じるようなことはないのだ。そのような脅威だとして認識できない兵器の存在を、そういう非常に危険な魔剣の担い手を、彼が黙殺するはずなどないのである。

担い手が存在することなく、我が元で封印・保管されるべき霊装^モ。

それが封殺法剣^{アトリビュート}の真に在るべき姿であると、ユダは考えているはずなのである。

だからこそ、辺境にいた真祖という存在を笠に、彼は己の持つ権限を利用して適合者^{アントニオ}こそを抹殺しようとしたのだろう。

順調に進んでいた今回のミッションの進行を完全に無視し、アン

トニオからの経過報告さえ待たずに、ロンギヌス 広範囲無差別爆撃儀式魔術を行使するという暴挙に出たということ。その現状を考察するに当たり、そう考えれば何の矛盾もなく合点がいくのである。

加えアントニオは、その殺戮魔術実行の大義名分をも与えてしまったのだ。彼自身さえも対象目標と認識させる口実を、彼自身が許してしまったのだ。

唯一完了していた任務を白紙に戻されたのである。しかも、それは雨月の手に因ってであった。

この事実を少し誇大化して吹聴してしまえば、雨月はイスカリオテをもつてしても対応できなかった魔物として、それこそユドヘート・ヘルシング 十二真祖級の扱いを行うことができる。そして、その雨月は世界征服などと愚かな夢を見ただけでなく、事実として活動を開始しているのだ。

こうして世界規模で早急に廃除すべき脅威は捏造されるわけである。

東方の島国に若干の被害と政的犠牲が発生したのだとしても、コトフラル・ダメージ ロンギヌスは発射すべくして発射されたと喧伝もできよう。科学兵器とは違い証拠も残らず、一般には分析もできないのだ。寧ろ、それを歓迎、支持する勢力すら現れそうなものである。

しかし、当然、責任問題は発生する。生じた犠牲に対する謝罪を行わねば、納得できない勢力があるのも事実であるのだから。

その人身御供。一件の全責任をユダは間違いなくアントニオに荷す算段なのだ。

爆撃により発生する被害の責を、案件実行の最高責任者の命で償ってみせるつもりなのである。

だからアントニオは『帰還すべき場所を失ってしまった』のだ。

本国に帰還したところで彼は罪人にしたてあげられ、処罰されるだけなのである。

「ケケツ　何が隣人を愛せよ、だ……」

アントニオはユダを思い、顔を歪ませる。

「いや。だから、か？」

自身よりも明らかに全てに於いて強者であろう男を見下して、それでも嗤う。

イエス・キリスト。世界で最も有名なその聖人の発した究極愛を体現する件の言葉は、しかし、二律背反アンビバレントな所思を内包する。この言葉の先に来る言葉は「汝を愛するように」なのだ。

つまりは、彼の言葉は自分を愛し、自分を守ること当然、真なのであり、アントニオの蔑んだようにユダはこの言葉を正に遵守しているとも解釈できてしまうのだ。

「まあ……今更、ヤツの事など知ったことじゃねえがな」

その疲弊した身体は、満足に戦闘を行うまでには回復していた。

故に、騎士は憂いなく赴く。決意を胸に逝くのである。

心から尊敬し親愛なる友を、己の運命の付添人とするために。

唯、それだけのために。

アントニオが向かう場所は雨月の城。

その吸血鬼が人間界に作り上げた王国。

しかし、騎士の立ち会うべき者は雨月ではない。だが、そこにこそ彼の追い求める人物は居るはずなのである。

空に月は在った。

冷たく鋭い光を放つ冬の月が。

凍てつく大気、黒を纏いながらも光源であるモノ。

あれは親愛なる友、その象徴であったはずだ。

闇に気高く君臨する唯一無二の存在。

夜の主とされる超越者、吸血鬼でさえも見下げ、己を悠然と誇示する者。

「くだらねえなア……今のお前は本当にくだらねえぜ？ 本来のお

前が翳^{かす}んじまつてる……」

流れる雲は月を陰らせる。アントニオにとって、現在の彼は正にそれなのだ。

「ケケケ そうだな、振り払ってやんよ、雲をさア！^{じまなモン} アキラ、お前をお前に戻してやんよ！」

だから。

だからアントニオは秋良を現状、唯一の標的として歩いてきた。

残された時間を、信奉し、敬愛した彼を孤高の冷たく強い『殺戮^{ハウンドラ}狩人^{レッシュヤー}』に戻す為に。自分の向かうべき標として、超えられなかった壁として存在した、その『殺戮^{アキラ・ヒルベルト}狩人^{レッシュヤー}』を凌駕する為に。

「……そしたらアンタは、安心して逝けるとでもいうのかしら？

覚悟した死地にも道連れが必要だなんて、なんとも情けない男ね」

はた迷惑な悟り。抱いた想いに笑みを浮かべながら歩く男に、冷やかな声かけられる。

それは少女の声。

「……何者だ？」

アントニオの進路を阻むべく、立ち塞がったのは二つの人影。

その一方。声の主である腰に手をやった少女を騎士は睨み付ける。

「……とりあえずアンタは、まだ一応はローマ十字教『イスカリオテ』の人間ってことになるんだろ？ から、身柄を拘束させてもらうっていう線で動かせてもらうわよ」

その問い掛けには答えず、少女はアントニオの鋭い視線に臆することなく告げた。

「……ああ。なるほど。オンミヨウリヨウの魔術師^{オンミヨウシ}ってワケか……ケケケツ 魔術師風情がオレを拘束するたあ、つまらなすぎてジヨークにもならねえな」

拘束する、その言葉からアントニオが最初に予測したのは魔術世界に於ける調停者の存在である。敵性勢力の者であるなら、害有る存在だとこちらを認識した時点で廃除^{こころせ}ば良いだけなのだ。何もわざわざ

わざと殺すよりも難度の高くなる身柄を拘束するという行為を、回りとくどく実行する必要はないのである。

だから、彼女らが少なくともローマ十字教の完全なる敵対勢力の者ではないと予測できる。

ならば国際的な魔術に因る紛争、問題の仲裁組織たる『W I K』こそが最も可能性の高い組織となるのだが、しかし。

その少女は、明らかに事情を知り過ぎていた口調だった。

そして、何よりも、この場所でアントニオを待ち受けていたということ。即ち、全てから逃走する行動を選択するわけではなく、ハウンド・ブレッシャー彼が殺戮狩人に執着した行動を採るであろうことを予測していたということ。

それがその二人が個人的に秋良と関連があることを裏付けているのだ。

アントニオの行動を決定付けているのは、酷く個人的な感情である。そのドロドロとした感情モヤが導く行為は、その自身に向けられている劣情を知る秋良でなければ、決して予測できようはずもないのだ。

果たして世界規模で活動するW I Kが、辺境の島国にどれだけの人員を割けようか？

そして、その極一握りであるはずの人員が秋良と知り合い、秋良からこの場所を任せるだけの信頼を得る可能性がどれだけあるだろう？

確率の問題である。

だとすれば、目の前にいるのは、それよりもこの国の魔術世界の住人である公算の方が絶対的に高い。

そして、この国にW I K、魔術的側面のローマ十字教と同質の組織といえは一つしかないのだ。

「あら？　じゃあ、おもいつき張り倒して意識ぶっ飛ばしてから、

スマキにして強制連行してあげる、って本音を言ったら笑つてくれたのかしら？」

だが、少女は変わらず怯みはしない。それどころか、口元だけに笑みを浮かべて挑発に挑発で返礼する。

「デメエ！」

「青筋立てて凄んだトコロで、ビビりはしないわよ　ローマ十字教に見限られたからって、あっさりと死を覚悟しちゃってるヘタレ如きには」

かちやり。そう乾いた殺気が音を立てる。鞘から解き放たれる霊装。

騎士は臨戦態勢に移行していた。その手に封殺法剣アトリビュートの柄を握り締め直す。

魔剣を構え、殺意を孕んだ怒りを露わにした騎士を前に、しかし、少女は嘲笑した。

例えば。

彼女の隣に立つ人影が、先ほど知り合ったばかりの狙撃手の少年だったのだとしたら。

おそらく、何故にそこまで強気に挑発を行うのかをツッコんだのだろうか。

だとしたら、少女はさも当然な感じで、さらにはその少年さえも馬鹿にしたように、こう答えるはずである。

「決まってるでしょ？　戦闘が開始して私の秘術が役に立たなくなつたら、鬱憤フリストレスが溜まる一方じゃない！　だから、先に憂さを晴らしておくのよ！」

そこにあつた張り詰めた空気は、冷たい大気に因るものだけではない。

西洋騎士と和製魔術師は対峙していた。

何時、何を合図として、命の遣り取りが開始されてもおかしくは

ないのだ。

それは少女の紅い唇が微かに緩んだ瞬間だった。見下して微笑んだままの瑞穂にアントニオは刹那、距離を詰める。西洋剣の攻撃は斬撃というよりも寧ろ、打撃に近い。肉を斬り裂くのではなく、叩きつけ、潰し断つ。

その重圧を感じさせる剣閃が夜闇を駆ける。

少女は、微動だにしない。

動けないのではない。信じているだけだ。

耳を打つ激しい音。金属同士の衝突に震える大気。

重量に勝る西洋剣を弾いたのは日本刀。その鞘の鑄つぎ。瑞穂と共にいた少年が封殺法剣アトリビュートの刀身の側面に、それを的確に打ち付けたのである。

軌道を変えられた斬撃は目標である少女の真横を流れる。

「寝てなさい！」

自身を掠めるように過ぎった凶刃に強張ることなく瑞穂は動いていた。その隙を逃しておくような術者ではない。

西洋剣を振り下ろした騎士との距離を僅か詰める。伸ばした細い両腕。すぐそこにはアントニオの胸部が在った。

その差し出した手の先、標的との間に存在する空間に少女は命じる。

五行秘術を行使させる。詠唱は省略されていた。元々、詠唱は意識を集中させ、より効果範囲や威力等を制御コントロールさせるべく行っているものなのである。

ある程度の事象ことならば、陰陽五行を用いて直接世界に働きかけ、瞬間に変異を起こさせることなど瑞穂にとっては容易いことなのだ。だからこそ『陰陽律法ソーサリーテクニク』などという異名を持ち得るのである。

陰陽師の少女は意識だけで木行に働きかけ、そこに高電圧を生じさせる。

直後に発生する閃光と放電音。

瑞穂はスタンガンという護身具を、五行秘術でそこに再現したのである。

「ちっ！」

しかし、舌打ち一つ。

それがその魔術を行使した、その結果を物語っていた。

アントニオの身体は、既にそこにはない。

「……忘れてたな……：そーい、二人いたんだっけか？ オマエら

……」

アトリビュート
封殺法剣を防がれたアントニオは、冷静さを取り戻していたよう

だった。振るつたのは霊装だけではなかったようである。

「詩緒。アンタ最近、影が薄くなったんじゃない？ 従者だの、無視されるだの」

「黙れ」

距離を取り、臨戦体制で構えたイスカリオテの騎士。そして、おとぼける陰陽寮の陰陽師と、あくまで表情を崩さない滝口。

「……しかし、女。オメエはオレを殺す気か？ アレは十分に感電死できるだけの威力があつたようだったぜ？」

眼前の二人のやり取りに、さも自分にこそ余裕はあるのだと伝えんばかりにアントニオは口を開いた。

「あら？ アンタ、あの程度でくたばるタマだったかしら？ だつたら、認識を改めなくちゃならないわね　イスカリオテは、その程度のレベルだつて、ね」

「　これだから辺境の無知な魔術師は困る……：オレのコトをいまひとつ認識できちゃいねえみてえだな……：ケケケ。魔術師が戦い方云々なんてモンで、オレに敵うとでも勘違いしてやがる」

それは強がりなどではない。紛うことないアントニオの本心である。

イスカリオテの構成員は間違いなく、世界レベルで見ても最高クラスの魔術師、戦士だけである。

そして、その中でもアントニオは対魔術師に特化した騎士。

その任務の中で、幾度も幾度も、様々な系統の魔術の行使者と彼は戦闘を繰り広げてきた。

しかし、少なくとも封殺法剣アトリビュートを手にした日から、唯の一度も魔術師と名のつく者に敗戦したことはない。

「後悔させてやるぜ！ 陰陽師！」

だから、絶対的な自信にアントニオは勝ち誇るように吼える。

対する瑞穂は、その無敗という事実を知りはしない。

「はん！ 返り討ちにしてやるわよ！ 行きなさい！ 詩緒！」

だが、冷静に、まるで馬鹿にすることだけで自分の役割は終了したと断言せんばかりに、滝口の少年に後を託した。

A World BorderLine - 2 ”世界の表裏”

「Fab - 28 . Tue / 17 : 40」

「いい？ アンタは唯一の撃も受けることなく、目標の無力化、もしくは対象の奪取を成功させるのよ？」

瑞穂は至って真剣な面持ちで、詩緒にそう告げた。作戦と言うには余りにもほど遠い計画が、硝子で囲まれた空間で立案される。

ラストフェイズ最終任務の失敗は、一般の人間を大量に巻き込む大惨事を発生させるのだ。

そのためには任務成功の可能性を少しでも上げる必要があるのである。

確保対象は広域爆撃魔術『ロングヌスの槍』マジックアイテムを無力化するにあたり、絶対的な優位性をもたらす魔術道具であり、即ち封殺法剣アトリビュートの入手は可能な限り実現すべきことなのだ。

しかし、現実問題としては、先に陰陽師の少女の告げた言葉は先刻交戦し、かつ彼を過去から知る秋良から横流リク取得されたアントニオ・ゲルリントオーニの戦闘能力を考えれば、正直、その滝口の少年をしても、雲を掴むような話なのである。

彼の持つ十式霊装テストメントの一つ、かつて聖人の弟子であったパウロが十字教徒を迫害した剣であり、同時に彼が十字教徒として処刑された際に使用されたという断首処刑剣エクスキューション・ソードリヒュート『封殺法剣』。

だが、対象そのものである霊装の、その真なる能力についての同人物の考察を聞くに、無謀とも無茶とも思われてしまおうが、瑞穂の提案を実行させるよりも他に方法がないということも事実だったのである。

「了解した」

しかし、その意図を理解しながらも、黒衣の滝口はいつもと何一つ変わらぬ素振り素振りで難題をあっさりと受理した。

「……よほどの自信家なんだな、渡辺って」

不意に蚊帳の外から聞こえた声。呆れたような口調で言葉を挟んだその少年に、瑞穂の視線は向けられる。

そのドぎつい少女の眼差しに、少年　　彼方はたじろいでしまった。

不可視でありながら、そこには極短時間で確立された上下関係があるようにも見える。

彼方はやはり瑞穂のように気が強い女性は苦手なのだ。そして、そういう女性は、男性のそういう隙を逃がしはしない。

例に漏れず、間髪入れずに瑞穂は恐らくは非難だの罵声だのという類の言葉を捲くし立てようとする。

自らの口が招いてしまうのであるう、この後の『永続的瑞穂口攻すいつとみすほの撃順タイン』を予想し、後悔に引き攣る彼方。

瞬く間に決した、一方的な今後の展開。

しかし、その虐待行為を阻止したのは、意外にも詩緒だった。

「できる、できないの問題じゃない。俺は唯、自分のやるべきことを認識していて、それを実行に移すだけだ　それにお前の方が『

こういうコト』は余程得意だと思うが、違うのか？」

口調はともかく、詩緒が他人に、ましてや初対面の人物にここまで普通に自ら会話を切り出すこと。

それは、この滝口に限定すれば超のつく非常事態なのだ。

その出来事の異常さを認識している瑞穂は、作戦会議に水を差された怒りを忘れ、只々ありありと驚きを全身で表現していた。

「なんだよ、そりゃ？　オマエ、僕を馬鹿にしてるのか？」

そんな瑞穂を他所に、返された言葉に少し気分を害したのか、彼方は険のある声を同じ年の少年に向ける。

それはいつもの彼らしく裏表なく表情に現れ、他人にも容易く見てとれる感情だった。

それは違うのよね、と瑞穂は思う。

実際、それは彼方の思い違いなのだった。

この滝口の少年は、それこそ馬鹿にするくらいの相手ならば、口を利くこともなく、無視を決め込むだけなのである。

だからこそ、その対応は、寧ろ、詩緒が彼方に特別な何かを感じているという確たる証拠だった。

振り返るにはまだ短いながらも、これまでの人生の中でそれぞれが築き上げた人間関係。

特殊な環境に置かれ成り立っている、それぞれの立ち位置。

訓練や実戦で身につけてきた、それぞれの持つ戦闘技術、戦闘能力。

表面的なものは全く異なる二人だが、その根底にあるものは、しかし、同質である。

詩緒と彼方というのは、ある意味、表裏の存在なのかも知れない。自らを犠牲にしても、何を省みることなく他者を救おうとする想い。

この二人の行動理念は酷く酷似しているのだ。

それを感情として表に出すのか、内に秘めるのか。

そして、絶対的に違うのは、その差が生み出したであろう二人の現在の環境である。

その想いが他人へと伝わり、新たな絆を作り、常に人の輪の中心にいながら、その全てを守ろうとする少年。

その想いをひたすらに内に秘め、日常でさえも孤独を貫くことで他人を守ろうとする少年。

「ああ。なるほどね」

ぼつりと瑞穂は独りごち、納得する。

時津彼方という少年にとって渡辺詩緒という存在は、単なる同じ年の人間でしかないのだ。

滝口だからだとか、裏の世界の住人だとか、そんなことは一切関係ないのである。

彼はある意味、渡辺詩緒なのだ。自分を貫く生き方しかできない人間なのだ。

そして、他人を遠ざけることで自分の住む世界からその他人を遠ざけようとする、いつもの詩緒の態度は、スタンス彼方にとっては無駄ではないのである。

彼方はそういう態度を取ろうが、自分から寄って来てしまう。

彼は、そう。例えるならば、陽の渡辺詩緒、だ。

自らに関わる、関わらずに関係なく、すべてを守ろうとする者。

「……得意、か」

詩緒の言葉を反芻したのは蠱惑的な唇。

そして、一方では病的とも取れてしまう彼方の意志の力は、厄災そのものといわれる心の闇さえも抑圧する自身の意志のよりも強固であると詩緒は認めたのだ。

詩緒には、ようやく向き合えたくらいにしか達成できていない難題を、彼方はとうに踏破しているのだから。

彼は鈴に宿る遺志を表現する者。

時津彼方は渡辺柁希の言葉を、弟を想う兄が理想とした渡辺詩緒を体言する者に他ならない。

だったら、詩緒に彼方を拒絶する意味はない。心の強さがもたらす奇跡を誰よりも知るのだから。

詩緒にとって彼方は、誰よりも強者なのかも知れないのだ。

「……ついさつき、あれだけ本気で彼方を今回の件から除外しようとしていた人物の対応とは思えないわね」

溜息一つ吐いて零した言葉に、しかし、瑞穂は笑顔を湛える。

つい先刻に彼方を今回の件から外そうと、詩緒は彼方に対し実力

行使にまで出たのだが、ついには彼の意志を折ることができなかったのである。

いや。だからこそ、彼方の強さを知ったのか。

「何だ？ 瑞穂、お前なんで笑ってんの？」

僅かな間に二転三転した少女に、件の少年が声をかける。

「べ、別に」

「……瑞穂、お前、実は渡辺とは幼馴染だったりするの？」

ばつが悪そうに返答を濁した瑞穂に、突如と話題を変え彼方は訊ねる。

「は？ 何よ、突然。そりゃ、アイツとは幼い頃から実戦訓練とかで付き合ってきたけど、そんなんじゃないわよ」

「おお！ だったら良し！ オマエ、見事なツンデレ幼馴染！」

とある単語を告げようとした刹那、つい先日、それに関して熱弁を揮った議論の持論を地でいく存在の拳は深々と彼方の鳩尾みぞおちにめり込んでいた。

「……誰がツンデレ？ 誰が誰にツンしてて？ 誰が誰にデレするって？ 彼方。アンタ、いい加減なコト言ってるよと本気で殺すわよ？」

低く冷やかな殺気の籠った声が、彼方の耳元で聞こえる。

言葉通りに瑞穂は限りなく本気だった。事実、その一撃は、瞬間的に彼女の拳周囲の大气にある金気を圧縮して放ったものだったのである。

「……ミズ、お@エ げん Kろ4、」

強烈なボディブローを突き刺されたまま『く』の字になり、悶絶している彼方の口から出たのは、言語として聞き取るには不可能な言葉だった。

金属の塊で腹部を殴られたのと同様のダメージを受けたのである。それは当然と言えば、当然の状態である。

「まったく くだらないコト言ってるので、自分たちの作戦でも立ててなさい」

「……ちよ、おま、どこの日本フェザー級チャンピオンだよ……カゼルパンチ デンプシーロールのコンボを喰らうかと思ったよ……」

魔術的な要素のみならず、コンパクトかつスピーディな理想的スイングから、この上なくエグイ角度で下腹部撃ち込まれた拳^{リバーブロー}。それから開放された彼方に、ようやく言葉が戻る。

「……こ、こっちは行きがけの車ん中でやるんだよ。それでお前らの作戦も理解しとこうと思って、疑問点があったから聞こうとしたんじゃないか」

「だったら、普通に聞きなさい！」

腕を組み、腹部を押さえる彼方を見下ろす少女には圧倒的な迫力が在った。

「……よくこんなのと長年付き合ってこれたな、渡辺のヤツ」

彼方は反論を捨て、ぼそり、と呟く。

「全くだな」

「なんです す っ て ！？」

聞かせるつもりのない言葉に、しかし、二人は反応していた。

「……で、何なのよ？ 疑問って」

暫しの喚きの後。

このままでは埒が明かないと感じたのか、彼方へと疑問を促し、瑞穂は場の状況を変える。

「……あ、ああ」

ようやく説教地獄から解放され、焦燥感ありありと彼方はそれに応えた。見上げた目線。ふと見てみると、瑞穂の顔にも怒り疲れが窺える。

もしやと思い、視線を横に立つ侍に向ける。しかし案の定、詩緒だけが無表情で変わらずにいた。

もしかして瑞穂のヤツ、渡辺が無視スルーし続けた状況に疲れただけなんじゃね？

彼方は瑞穂が説教を止めた理由をそんな風に考えながら、件の少年に抱いていた疑問を口にする。

「あのさ、渡辺って魔術師じゃなくて侍なんだろ？ だったら、例え秋良の推測が事実だったとしても、封殺アトリビュート法剣に多少斬らるくらい大丈夫なんじゃないのか？ って思ってたさ」

その疑問を聞くだけのために、大変な労力を少年は払ったのである。だがその疑問は、当然のものだった。

そこに意味がないのだとしたら、それは作戦の難度を上げるだけの行為に過ぎないのである。

「……渡辺の切札のつじやくに関係してるんだろ？」

少年の疑点に答えるのは当人が、相方が。しかし、その答えは思ってもよらぬ場所、彼方の後方から聞こえた。

「殺戮狩人……アンタ、知ってたの？」

瑞穂の視線が回答者へと向けられる。

「まあ、な。殺し合ったって言ったろ？ 切札ツレと対峙させてもらっただぜ」

笑いを浮かべそう告げる秋良は、瑞穂のイメージした殺戮狩人そのものだった。

あの詩緒と対峙して笑えるものは、死を自ら望む者が、戦闘狂くらしいものだろう。

「十二真祖を一年という短期間で9体も狩った化け物は、後者、か。興味あるな、俺も。何なんだ、アレは？」

しかし、次に見せる秋良の表情はそれとは違う。確かに強面だが、そこに狂気は感じられない。

「いいわ。教えたトコで誰にマネできるものでもないだろうし、カラクリが解らないと、アンタたちもこちらを信頼できないだろうし」

どちらが、本当の秋良・ヒルベルトなのか。

だが、そんな疑問をさつさと頭の隅に追いやると瑞穂はそう切り出した。

重要なことは、ハウンドブレッシング殺戮狩人という、現在、間違いなく対吸血鬼の世エキスパート界一の達人が味方についているという事実だけだと判断したからだ。「正確に言くと、アレは間違いなく魔術の類ではないわ。無理矢理に分類するとしたら『奇跡』の類だわね。ただし、その奇跡の根底にあるものが限りなく『魔』に近いものなのよ」

「なるほど。元を断たれちゃ発現できなくなる可能性もあるから、封殺法剣には触れられないってことか」アトリビュート

「ご名答。それを試してみる時間的な余裕もないしね」

陰陽師の説明で全てを解した秋良は、一つは満足のいく回答を得たようだった。

「どういうことだ？」

しかし、彼方にはそれで解るはずもない。

「……鬼って知っているかしら？」

故に、改めて少女の講義は始まる。

「桃太郎とか、一寸法師とかのアレか？」

流石にそれくらいは誰でも知っているだろう。日本人にとって、

鬼ほど知名度の高い魔物は存在しないのだから。

「そう。それで、鬼、というか魔物には二種、種類があるのよ」

だから、最初に瑞穂はそれを例に挙げたのである。

「一つが純正、真正正銘の生まれたときからの魔物ってヤツだ。鬼だけに限定すると純血種って言うんだがな」

フォローするのは殺戮狩人。

いつもながらに彼方が思うのは、どうも魔術師というのはこつこつと蘊蓄話が好きなのだな、ということである。

現に当の侍は押し黙っている。

「もう一つは人工の鬼、ってトコか？」

魔術師が次の知識を出す前に、彼方は自分の経験からそう発言し

た。

そこまで興味のない話を長々と聞くのは正直好きではないし、秋良と初めて共闘した夜を思い出したのだ。

人間は魔術世界に於いて禁忌とされる命の創造を疾うに実現させているのである。

ウィルカスコス

吸血蜘蛛。その夜に死闘を演じた相手は、確かそういう名前だった。

「惜しいわね。でも、違うわ。確かに合成魔獣キメラとかも存在するけど、それは例外よ。今、話しているのは、あくまで『自然発生する』魔物について」

「なんだ？ 他に魔物が発生する方法なん

」

だが、直後、別の考えが思い当たる。

そうだ。彼女は、自殺して

「……まさか、人間が変わる、つて言うのか？」

恐る恐ると開かれる口。微かに震える、その唇。

「そのまさか、よ。良く解ったわね。もう一つは人間が変じた鬼、よ。鬼女伝説にはよく見られる話でしょ？ 正直、性善説を信じて疑われないような彼方の口から、その正解が飛び出すとは思ってもよらなかったけど……でもね、昔話や伝記、伝承を紐解いたら、日本に限らず、世界中のあちこちで、その痕跡や証拠は転がってるわよ」
自分の口から出た解答でありながら、だが、彼方の顔は、その事実を受け入れてはいないように窺えた。

彼女は確かに言った。吸血鬼はそうして生まれることもあると。
しかし、目の前の魔術師の言葉が真実ならば、それこそ全ての人間に魔物となる可能性があるということではないか。

突き付けられた言葉に彼方は思い知る。これまで数度遭遇した世界の裏のできごと。だがどこか、それは一般の常識だけに生きる人間には、遠い世界のことだと認識していた。

しかし、違うのだ。

その世界の多くの住人は、口を揃えて、こちらの世界には干渉す

るなど言う。

だが、それこそ違う。

その世界は、いつ誰が遭遇しても、少しもおかしくはない世界だったのだ。

「……そして、その事実はここにもあるの。彼方、アンタの目の前にも、ね」

呼ばれた声に、彼方は我に帰る。

そこには怯えも迷いも、もう、ない。

だったら、いつもの自分であればいいだけのことだと肯定されたようなものだった。

自分の手に届く全ては、少なくとも守ってみせるだけだ。

もう裏も表も関係ない。

しかし、瑞穂の言う例とは。

まさか、そこにはこの時間であれば自宅に居るはずの彼女がいるなどということはない。

「……渡辺？」

「そ。こいつはそれこそ陰陽寮が対処に困るような鬼を抱えているのよ」

だが、少女の目が教えていたのは、黒衣の少年だった。

「鬼、ねえ……そんな可愛いモンじゃねえぞ、アレは」

ハウンドブレッシャー

「ええ。殺戮狩人、アンタの言う通りよ。陰陽寮では既に、それを鬼なんていう単体の『魔』ではなくて、人類規模で被害を及ぼしかねない『厄災』として認識されているわ。彼方に解りやすく言い換えると、世界を滅ぼしかねない力を持った魔王が詩緒の中にいる、ってトコかしらね。で、コイツは無茶をする時に、その力を解放させるなんて荒業を使うのよ」

心底、呆れたように少女は呟く。

「そして、今回は残念ながら、それに頼る必要があるかも知れない、ってこと……」

同じ表情で溜息一つ。だが、続けたその言葉に、瑞穂の瞳に悲し

い色が宿ったことを彼方は感じた。

「理屈は解ったよ。だから、その力の発動を不可能にされる可能性があるから、封殺法剣アトリビュートには触れられないんだな。でもさ、新たな疑問が出てくるんだけど。人間が魔物の変わるって話が本当ならさ、その力を使っている渡辺は、どうして人間のままなんだ？」

鋭い指摘に後方で控えていた秋良の顔が崩れる。その様は教え子の成長を見て笑う、教師のそれだ。

魔術師としての秋良が最も疑問に感じていた点も、正にその論理カラクリだったのだ。

「そう。だから奇跡、なのよ。こいつは我を通すコトで、それを可能にしちゃうんだから」

「は？」

その答えは魔術を知る者、知らざる者、どちらにしても意外というレベルを通り越して理解不能だった。

だから、異口同音に彼方と秋良は同じ反応を見せた。

「F a b - 2 8 . T u e / 1 9 : 0 0 」

アントニオにとって、詩緒と瑞穂は殺してしまっても何の問題のない相手である。

対する詩緒と瑞穂はそうではない。

イスカリオテによる凶行はあくまで予測でしかなく、魔術世界的な世界情勢を考慮すればローマ十字教と対立するわけにはいかないのである。

だから、事情を聞くために身柄を拘束する、程度の行動しか起こ

せない。

そして何よりも。魔術師である瑞穂のみならず、彼女が先刻発案したように、詩緒も唯の一撃もアントニオから受ける訳にはいかないのである。

圧倒的に不利な状況の中、アントニオの本格的な攻勢は始まっていた。

A World BorderLine - 3 ”世界の選択”

「Fab - 28 . Tue / 19 : 15」

「^{エボシ}！ ケケツ！ なんだあ！？ そのナマクラも、一応は魔法^{マジック}剣^{エボシ}だったってのか？」

至近距離。一瞬の油断が勝負を決する距離。その緊迫した最中、抜き身になった詩緒の持つ刀を見てアントニオは嗤う。

古雅で見事な芸術品とも、資料価値の極めて高い文化財とも見る者によつては捉えられるその名刀も、しかし、聖堂騎士には自分を狙う純粹なる一兵器としてしか映りはしない。

そして、下された査定は、そういう尺だけで判断されたものだった。

その審判は攻防を繰り広げる剣士二人から、離れた場所にある魔術士の耳にも聞こえる。

その音を阻む騒音^{しやうがい}は何もないからだった。

剣士二人は激しく、鋭く互いの愛剣を振るうも、互いにその刃を標的に触れさせることができずにいたのである。

今、この場で聞かれるのは、剣士たちの体捌きと刃の起こす風音だけだった。

「 なっ！？ アンタ、殺すわよ！」

アントニオは単に、己が所有する西洋剣と、相対する剣士の日本刀を比べただけでしかない。

鼻肩目なしに、ありのままを、である。

そして、その判定は如何に鬼切といえども、彼の持つ法殺封剣と^{アトリレユート}比較した場合に限れば正当な評価とも言えよう。

鬼切。滝口、詩緒の振るうその刀は、確かに対魔に有効であるという特性を帯びていた。その刀の持つ号が、その鬼を幾度となく斬り伏せてきたという歴史と相俟って、『鬼』則ちは『この世ならざ

るモノ』を『切』るといふ祝詞のしととなり刀身に宿っているのである。

表の歴史に露出することがあったとしたのならば。加え、純粹な刀として判断しても。鬼切という刀は、天下五剣と謳われる名刀の中でも突出した存在、この国で最も優れているとされる名刀の一振に選ばれていたとしても、全く不思議ではない大業物なのだ。

しかしそれでも、アントニオの持つ法殺封剣アトリビュートと比べてしまえば、遙かに霞んでしまうのである。

それは世界的に見ても著名な聖人を処刑したという、その武器の持つ来歴だけから判断されたものではない。何よりも、その能力の優劣が圧倒的に 否、絶対的に他の魔術武器マジックウェポンと一線画するのである。

単に『有効特性があるというだけの刀』と『完全に消滅させる力を持つ剣』とでは、誰の目からしても比較するまでもなく優劣は判断できるのだから。

鬼切で鬼を斬ったとして、それは他の武器よりもダメージが多く与えられるだけでしかないが、封殺法剣アトリビュートでは完全に対象を消滅させてしまえるのである。

それも深々と斬り付ける必要のある鬼切と違い、封殺法剣は僅か触れるだけで十分なのだ。その霊装は、それだけで事足りる、唯一無二の対魔術絶対消滅魔剣なのである。

しかし、それでも。その事実を暴言として聞き入れ、素直に挑発と受け取ると、瑞穂は怒りを顕にしていた。

その刀には、この国を守護してきた歴史が事実としてあるのだ。

あめのむらぐも
天叢雲、ふつのみたま
布都御魂、あめののははきじ
天羽々斬。

鬼切は、それら神代を始めとする、極めて限定的な期間、局地戦のみに見られる退魔の神剣とは違い、歴代の四天王の愛刀として人々を常に守り続けてきた護国の聖刀なのである。

それは彼ら四天王を筆頭に、滝口たちが命を賭して人々のために戦ってきたという歴史でもあるのだ。

鬼切を始めとし、四天王の担う宝具は、彼ら滝口の生の象徴でも

あるのだ。

彼らの先祖が侮辱されたに等しい、先の発言。それは瑞穂にとって他人事ではない。

つい先代の鬼切の担い手。少女にとっては、初恋の、今も慕う相手を侮辱されたのと同義なのである。

彼は余命幾許もない状態で、しかし、その刀の担い手として、自らの身を省みず、大きな優しい心でその命を削りながら人々を護っていたのではないか。

鬼切を侮辱したということは、それを所持する者として強く生き、その重圧により逝くこととなった、渡辺柁希という滝口の命を汚したことと同義なのである。

彼女が怒りに震えたことは、一人の少女として当たり前のことだったのかも知れない。

「ケケツ！ 魔術師風情がオレ様を殺るって？ おもしれえ！ 殺せるモンなら、殺ってみせるよ！」

しかし、アントニオは悠然と嗤う。殺気がありありと発する、五指に入ると評される陰陽師を前に嘲る。言葉と共に激情を乗せて放つたれた瑞穂の風の刃を易々と、その霊装の刃で無効化して嘲笑する。

「っ！」

相手に届きはしない攻撃魔術。

その歯痒い思いを舌打ちで吐き殺すようにすると、瑞穂は辛うじて冷静さを保った。

火行、木行、水行、金行、土行の五行秘術。式神を含む符術。元は仏教秘術である真言。己が持ち得る総ての陰陽魔術を総動員し接近、封殺法剣の殺傷圏の内側、霊装に魔術を無効化されない地点

超至近距離での接触発動による標的の撃破を行おうとする思考を諫める。

「魔術師なんざ、オレの敵じゃねえんだよ！」

少女を無下にするアントニオ。

それでも瑞穂が感情に任せず、踏み止まるのは、聖堂騎士の見せる自信の意味を知らるからこそ、である。

数量や威力の問題ではないのだ。

先にも述べた通りに、アトリビュート法殺封剣とは、そういう霊装なのである。対魔術に際して絶対的な力を発揮する魔剣なのだ。触れた魔術総て霧散させる武具なのだ。

その霊装の前では、先の戦法を実行に移したところで、最初の段階で作戦は破綻することが容易に知れてしまう。

更には、アントニオ・ゲルリントン二自体の能力、彼の剣士としての実力も決して侮れはしないのだ。

弾幕が目晦ましとして機能することがなくとも、アトリビュート法殺封剣を振るわせることはそれで十分に可能である。

しかし、剣士のその後動作に少なくとも瑞穂は隙を見出せないのだ。

これでは飛び込むことが叶うとしても、そこに待ち受けるのはせいぜい相打ちが関の山なのである。

「ツレねえなア」

バックアップ

「！」

故に後方支援に徹する陰陽師。しかし、その陰陽師に向けて、吼えたアントニオは地面を蹴っていた。

その刹那、黒は強襲する。

黒の空を裂く、鋭い斬撃に月影が反される。それはただ、空を裂いたに止まったただけだ。

「 解つてたよ」

煩わしい魔術師を消すべく見せた攻勢動作は牽制動作。フェイント突撃した詩緒をせせら笑い、騎士は閃いた侍の刃を見事に回避していた。

そして、見下した言葉をかけると共に、その手の封殺法剣を鋭くアトリビュート薙ぎ払う。

轟。只、斬るのではなく、断ち割る。裂くのではなく、斬り壊す。

巻き込む物を破碎するような凶悪な威力を宿した半円の軌道が、空間に描き出されていた。

だが、詩緒とてそれを理解している。それが牽制動作であつた、と。

しかし、それを無視してしまえばアントニオは躊躇することなく瑞穂との距離を詰め、彼女を斬り伏せていただろう。

この騎士には、その技術すべがあることを秋良から聞いているのだ。縮地法。瞬間移動のように感知される高速移動術の存在。

滝口は強制的な二択を詩緒は迫られていたのである。

そして、だからこそ。半円を避けることができたのは、それが畏で、こういう反撃があることを斬り込む以前に予測していたからだった。

故に攻勢にさえ動ける。封殺法剣アントリビュートの駆けた空間にその身を侵入させると、詩緒はアントニオの鳩尾に肘を打ち込む。

「ケケツ」

無表情で迫る剣士と、口端を歪めながら迎える剣士。

瞬間で二転三転した攻守は、アントニオが後方に跳躍したことで一段落していた。

「何だア？ 二人がかりでそのザマかア？」

法殺封剣アントリビュートを肩に置き、聖堂騎士は侮蔑する。

「所詮は辺境の島国。ザコしかいねえか」

含み笑いを見せ、闇空を見上げる。

「さて」

そこに騎士が見たものは何だったのだろうか？

呟き、この国の退魔士二人と再び対峙した顔に相手を卑下した表情はない。

「身の程を知ったか？ そろそろテメエらを片付けないな……」

空気が変わっていた。少女の頬に汗が伝う。

今は。例え挑発されたとしても、飛び込む気すら起こりはないだろう。

アントニオは冷徹に二人を捉えていた。

恐らくは。本来、アントニオ・ゲルリントニーは知的に物事を考え、冷静に行動を起こす男なのだ。

世界中の魔術師、それも異端として彼が裁いてきた者の大半は、瑞穂が彼方に忠告した通りの狡猾で、残忍で、えげつない輩も多かったことは、疑いようもない。

それらを相手してきて尚、彼が勝利し続けてきたということ。生き続けているということ。それこそが彼が法殺封剣アトリビュートの能力のみに頼った戦い方をしてきたではないということの証明である。

過去に何があったのか？ 何を目的にしているのか？ 何を想うのか？

そんなことは理解できないが、力に奢り高ぶった相手を見下す言動は上辺だけのものなのだろう。欺くためのものなのだろう。

そう瑞穂は冷静に考える。

だからこそ、彼を、この辺境に於いて強硬手段ロンギヌスを用いて抹消けすより他にないと考えたのではないか？

「アントニオ・ゲルリントニー 提案するわ。私たちに協力しなさい」

陰陽寮の陰陽師は告げる。

アントニオは戦闘狂でもなければ、現状からの絶望に囚われ混乱し秋良に執着していたわけでもない。

ならば、交渉の余地はあるはずなのだ。

「ケケ 協力したら、どうなるって言うんだ？ 保護でもしてくれるのか？」

いきなりの拒否はない。それは瑞穂の思考を肯定させた。

「『ロンギヌスの槍』。それによりWIKも陰陽寮わたしたちもアンタを保護する言い訳は十分過ぎるほど立つわ。今回の件の首謀者を査問させることを教皇に求めることもできる。アンタを狙う敵も排除できるわよ？ 殺戮狩人ハウントブレッシャーとの因縁にケリを着けるのは、それからでも遅く

はないでしょう？」

しかし、彼女には理解できていないことがあったのだ。

「遅いね。認識が甘エよ」

即答での否定。それは彼の知る真実がもたらすものである。

「陰陽寮？ 辺境のマイナーな魔術組織が何をほざく？ WIK？

組織に囚われる限り『ヤツ』には敵いも 届きもしねエさ！」

そのために彼は知的に現状を考察し、冷静に『残された時間を殺戮狩人との因縁に使う』ことを選択したのだ。

「オレにも敵いもしねエテメエらが！ 消えろよ！」

諦めでも絶望でもない。時間が僅かにしか残されていないこと。

それは彼にとつて、大局的に客観的に導かれた唯一の解である。

叫びを聞くやいなや、瑞穂はちらりと詩緒を見遣る。

瞬間、二人の視線は交わった。

「土行、土気！ 障壁よ！」

直後、少女は力ある言葉を紡ぐ。それは縮地法の発動を妨げるべくの五行秘術行使。

封殺法剣アトリビュートをしても、発動により派生した事象には効果はない。術

者正面に地面を割り出現する岩壁。継続し、瑞穂は大地に働きかけ

続ける。辺りに次々と地面から隆起す岩壁、土壁。

直線的な運動により最短で接近されることだけを防ぐだけでも、

それは十分な対策になる。

「ちっ
！」

出鼻を挫かれた騎士の舌打ちが直視できない場所から届く。しかし、それは刹那にアント二オが近距離にまで迫っていたことを教えていた。

単なる剣士と魔術師。

如何に対魔術師に特化した騎士とて、何を仕出かすか解らない相手を先に消す方が圧倒的に後の展開が優位になるのは明らかなのだから。

決着を急いだ敵が自身を最初に狙うであろうことを陰陽師は当然の如く看破していた。

そして、その魔術行使がもたらした効果はそれだけではない。
舞い上がった土煙により著しく視界は制限される。

「しょうがないわね……！」

どこか納得いかないまでも、意を決すと瑞穂は動く。集中する。
現状、辺りは五行の土行の力で満ちている。瑞穂はこの氣の動き
を読む。

視覚という感覚に頼らず、その六感で辺りを把握する。

感知する二つの物体。

一つは祝詞を持つ武器を手に動く者。

一つは立ち込める土行を消滅させ続ける武器を手に静止する者。

主感覚を視覚とした者に対し、それ以外の感覚で十分に活動でき
る者にとって、この状況は圧倒的に優位に立てる又とない好機だっ
た。

ならば、先の少女の眩きは。

そして。

「木行、大気！ 疾風よ！」

その詠唱は。

薄く色付いたベールに覆われた空間を裂き、真空の刃は疾駆する。
それが、そこに在ると教えながら。

「バカがッ！」

少女の眩きに、詠唱に、魔術に。

アントニオは感知、反応していた。

A World BorderLine - 4 ”世界の交叉”

「Fab - 28 . Tue / 19 : 30」

「バカがッ！」

少女の呟きに、詠唱に、魔術に。

アントニオは感知、反応していた。

五行秘術により作られた岩壁の間隙かんげきを縫って直進した不可視であるはずの刃を、聖堂騎士は封殺法剣アトリビュートで弾く様に薙ぐ。

術者の立ち位置。薄茶色の空間を無色に塗り替えた風の軌道。魔術の飛来する方向さえ解れば、この程度の芸当などアントニオには造作もない。

耳を劈くような金属同士の衝突音、同時に起こる破砕音に似た響き。それは風の刃の断末魔だったのか？

対魔術消滅剣マジックキャンセラーソートに霧散させられた魔術風は、儚く魔力だった粒子と変換させられ散る。

西洋剣を振るった騎士のいた地点で、土埃が舞っていた。

その直前。風の通った道の先。瑞穂は確かに敵対する剣士の鋭い眼光を見ていた。

わかってるわよ！

刹那という時間に。痛みに耐えるべく、瑞穂は意識を集約する。咄嗟に右足を蹴り込むように突き出す。

いかに縮地法で高速で移動されようとも、その動きを完全な直線的なものとし、襲撃する経路を限定させるために場を作り替えたのだ。

これはある程度の代償を必要とする罠なのである。

限られた幅しかない空間を突進して来る敵は、その武器を突き出

して急襲する可能性が高い。

ならば、そうすることで少なくとも最悪の事態　片足は捨てることになろうとも、頭や首、胸や腹部といった危険な部位への直撃を回避し、一撃死を受ける危険性は、大きく減少するはずなのだ。

「この代償は高いわよっ！」

決意した少女の小さな叫び。

直後、赤い飛沫が飛ぶ。

「くっつ！？」

抑えながらも漏れた呻き。

足を盾にするつもりが、しかし、そこには誤算があった。

聖堂騎士の縮地は、予想よりも数コンマの誤差であれ、速かったのである。

だが、犠牲にすべく足を前方に出していたことは幸いしていた。

その行為により軸のずれた少女の身体は、その命を絶つべく、刺し貫くように腹部中心を狙った断首処刑剣エクスキュリションズ・ソードからの直撃を避ける結果をもたらしていたのである。

しかし、それでも。

それは深手には変わらない。

封殺法剣アトリビュートは標的の左脇腹を深く裂き、その刃を少女の鮮血で染めていた。

目睫で、襲撃者と反撃者は睨み合っ

た。脂汗を浮かべ激痛に耐える少女と、勝ち誇る男。

だが、絶体絶命の状況下に在って、瑞穂は戦意喪失などしなかった。

この距離は、つい先刻も自身が求め望んだ距離に他ならないのだ。封殺法剣アトリビュートの刃の鏢元は瑞穂の腹部側面にある。魔術師を絶命させるべく騎士がその剣を横薙にするよりも早く、一撃を以ってアント二才を倒す魔術を完成させ発動させる自信が瑞穂にはあるのだから。

今こそが、封殺法剣アトリビュートの特性に邪魔されることなく攻勢いかり秘術を叩き付ける時。

「あうっ!?!」

痛みを教えた声と共に、しかし、陰陽師は異変に気付く。

それは殺戮狩人が予測した通りの事態だった。ハウンドブレッシャー

思考でそれを試みようとしても、魔術の構成、構築が全く行えないのだ。

痛みに麻痺した感覚がもたらした失敗。それでは決してない。

「魔力回路マジック・サーキットの断線 解っただろ? だから、魔術師テメエロはオレには絶対に勝てない」

冷徹に現実を告げたのは、アントニオ・ゲルリントンニ。

魔術の基礎法則は、空气中に漠然と漂う『方向性のない魔力』を体内で精製して方向性を持たせること。

魔術回路マジック・サーキットとは、その精製を行う医学的には存在しない器官のことである。

もっとも、それも俗称でしかない。世界中に存在する様々な魔術体系それぞれに、その器官の名称が存在するためだ。

しかし、公用語的にそう称される。そして、その器官に公用単語が付けられているその理由こそ、いかなる魔術体系であれど、魔術師はこの体内活動を行い、魔術を行使しているという事実を証明しているのである。

封殺法剣アトリビュート。その真なる効果。それがこの魔術回路の遮断だった。

この魔剣は、触れた全ての魔術構築要素を破壊せずにはいられないのである。

だからこそ、聖、魔を問わず、この霊装は触れるだけで、その存在を消滅させることが叶うのだ。この世ならざるモノは、この回路により存在を維持しているのだから。

「ケケツ 先に逝ってる」

うつすらと笑みを浮かべ、アントニオがその柄を握る手に力を込める。

「あぐうッ　！」

陰陽師の整った顔が激痛に歪んだ。

だが、その顔には命乞いをするような、媚びるような感情は一切ない。命運を敵に委ねられながら、少女は折れない。

「ケッ！」

苛立ちを覚えながらも、しかし、アントニオを少女に止めを刺しきることができずに悪態をついた。騎士は半身を捻ると、急ぎ封殺^{アトリ}法剣^{ビュート}を引き戻す。

その耳には微か、鈴の音が聞こえていた。その眼には、ぼんやりと現れた黒が映っていた。

その黒が土煙を斬り裂き鬼切を閃めかせる。

その斬撃を防ぐには、刀身を打ち合わせるよりなかったのである。甲高い刃音。

少女の身体から抜刀された西洋剣の刃と、斬り込まれた日本刀の刃が弾け合う。

それと共に消失した、鬼切の祝詞。

魔術的知覚力さえ封殺法剣^{アトリビュート}に消された少女には、それを感覚的に捉えることができずも、見たくない光景、その瞬間を避けるように双眸を閉じていた。

「女の命と引き換えにカタナを捨てたかア！？」

罅迫り合いの最中、至近にある滝口に騎士は嘲け吼える。

「捨ててなどいない」

それは何の変化も見せてはいない。ただ、鋭く敵を見据え詩緒は返していた。

「ケケッ　みつともねえ、負け惜しみを！」

その声を残してアントニオの姿は消える。

眼前での縮地。瞬間、詩緒は完全に視覚ではアントニオを消失^{ロスト}していた。

だが、黒衣の滝口はそれに動じることなく陰陽師の身体を支える。「大丈夫か？」

「どこに、目をつけてるの、よ？ ……これが、大丈夫に、見えるわけ？ アンタ、じゃないのよ？ 大丈夫じゃ、ないわよ……」
毒づきながらも弱々しく微笑むと、瑞穂はその身を詩緒へと預けた。

「ごめん……鬼切が……」

「問題ない」

胸に顔を埋めて呟いたその声に、いつもの無表情で何事もないように少年は応える。

「……バカ。問題なく、は、ないでしょ……」

「そうだぜ？ しつかりと戦況を把握しろよ？ ザコ」

その声に応えたのは、少女が言葉を向けた少年ではなかった。

土煙が晴れた周囲。

滝口は声の方向へと注意を払う。

「女の手前だからって、強がるんじゃないよ。今まで二対一でやってきて、オレを仕留められなかったんだぜ？ 魔術師のサポートもなくなり、ちゃちいながらも魔剣も失ったんだ。大問題だろうが？」
ケケケ。とアントニオは嗤う。

「勘違いするな。この刀は祝詞があるから『鬼切』の名を冠するわけじゃない」

地面にその刀を突き立てると、詩緒は瑞穂を横たわらせた。

髭切^{ひげきり}。それが退魔の聖刀として『鬼切』の名を冠する以前に、その刀につけられていた名だった。

斬りつけた際に、身と同時に髭をも見事に切り落としたというその切れ味の鋭さを謡った号である。

陰陽師の魔術により露出させられた岩盤を、意ともたやすく貫くのは、剣士の業とその刀故。

ならば、その殺傷能力こそが、その刀たる所以なのか？
それも否である。

「だったらなんだってんだ？ くだらねえ屁理屈でも述べんのか？」
滝口はゆっくりと立ち上がると、前方を見る。

「この刀は滝口オシタチが振るうから『鬼切』だ」

その詩緒の言葉こそ真理であった。

それは問答のようで、そうではない。

意味を理解できず、アントニオは嘲笑う。

「あまりの不利さに、脳あたたまイカれたか？」

「……違う、わね。コイツの言う通り、よ……」

意味を理解し、瑞穂は微笑う。

だからこそ、少女はむざむざと負傷をしたのではないか。

「……詩緒。本気で、やりなさい」

「強がりはやせよ。相手が本気がどうかくらい解るんだよ」

陰陽師の言葉に、聖堂騎士は反応する。

「……ええ。本気、だったでしょうね、殺さず、って、前提、でわね……」

それは私もよ、そう言わんばかりの表情を瑞穂は見せていた。

「……アンタは、畏はまに嵌った、のよ」

その為に、敢えて受けた傷に苦しみながらも瑞穂は嘲る。

「必要、だったのは、事実だった、のよ。ロンギヌスが、着弾するかも知れない、じゃ、アンタを、どうこうすることは、できないけど、陰陽寮わたし所属陰陽師に『この世ならざる力を以って』危険を加えた、って、いうなら話は別よ。アンタを『魔』として、認定できる。それで、WIKを始め、国際社会への言い訳も立つ」

御託を。

倒れた少女の言葉に、そういう思いをありありとアントニオは見せるも、その表情は突如として凍る。

「……今度のコイツは、アンタを本気で、殺す気よ……」

零し、瞼を閉じた瑞穂の顔は安心して満ちていた。

地から引き抜いた鬼切を血振りのように一振りすると、詩緒は斜

め正眼に構える。その開かれた口が死を告げる。

「覚えておけ 渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

殺気を纏った剣氣が辺りを支配する。

それがアントニオを強張らせたものの正体だった。

「ふざけるオオ！」

否定と同時に発動させられた縮地。

音速を超え、異端殺しの騎士は突撃する。

詩緒はそれを目ではなく、感覚で捉える。消滅して逝く魔力を、刹那に追う。身体の移動運動で確かに劣る侍は、迎撃を、鬼切を、意志を。

一つ、二つ、三つ。それは閃く。

それは果たし本当に三つだったのか？ 或はその全てが本当に実斬だったのか？ 或はそれよりも数多の虚斬が相對した騎士には見ええたのか？

「テメエ、見え、て

確かなことは、一つに封殺法剣アトリヒュートは鬼切に受け流されたということ。

一つにアントニオの首筋には避けそこなつた突きによる刀傷が生じていたということ。そして。

「知っている、の、か!？」

超超高速の戦闘を展開させる、選ばれた人間だけに踏み入ることのできる攻勢時間。それはその時間、瞬く間もない暇だったはずだ。騎士のそれさえ声だったのか、思考だったのか定かにはできないはずなのに、確かに攻防は繰り広げられ。

仕切り直すべく、縮地法を維持したままアントニオは交戦した地点を翔け抜ける。

考えてみれば腑に落ちないことばかりだったのだ。剣士のみならいざ知らず、陰陽師でさえも縮地法というアントニオの切り札の一つに端から対応、対策ができていたのだから。

縮地法を行使できる者との戦闘経験が在る、そう思うのは自然で、そして、それは事実だった。

詩緒も瑞穂も数え切れず、その戦闘技術と対峙した経験が在ったのである。

それは彼らと共に幼い日々を修業すしした、現・滝口四天王『蜘蛛切』

碓井直人が使っている技術でもあったのだ。
うすい なおと

「何故、お前は殺戮狩人に逃げる？」
ハウンドブレッシャー

アントニオの移動先を首だけで追うと、詩緒は唐突に問う。

「アアツ？」

呼吸を整え、再度縮地法を発動させようとした矢先。その突拍子のない問い掛けに、アントニオは眉をしかめた。

「一つだけ言っておく。逃げるだけのお前に、秋良・ヒルベルトは倒せない。限界を作ったお前に、諦めたお前に、ヤツは倒せない」

淡々と言葉を告げると、詩緒は背を向けて離れた場所に落ちていた黒塗りの鞄の方へと足を進める。

「テメエに何が解るってんだ！？ 井の中の蛙が何をほざく！？

ローマ十字教を敵に回すってことは、世界を敵に回すってことなんだよ！ 知らぬテメエは小物だつてことだ。！」

ローマ十字教。世界宗教。その信者はどこにでもいて、地球上のどこにでも逃げ場などはない。

ランダムカラー
極彩色だけではない。それから逃げることはできないのは、その聖堂騎士とて同じなのだ。

「ああ。そうかもな。だが俺は知らずとも、秋良・ヒルベルトなら知っているはずだ」

「！」

「……そして、ヤツならお前と同じ状況に陥ろうとも諦めないだろうな。ヤツはお前の限界の向こうにいる」

言葉を失くした敵を背にしたまま、その鞄を拾うと鬼切を沿える。続け詩緒は静かに愛刀を納刀していた。

詩緒は知っている。少なくとも、今は。殺戮狩人の側には、それを決して許さない、そして、自分とは直接関係なくとも命をかけて協力してくれる心強い味方がいるのだ。

アントニオは知っている。だから彼は崇拜に値するほどの孤高の存在で、その存在は美しくさえもあるのだ。

「だから、安心しろ。俺に勝てたのだとしても、お前は負けていた」

鈴の音が聞こえた。

「な、んだ、と　！？」

ぐらり。不意にアントニオの身が糸の切れた人形のように崩れる。それが、三つ。

右足膝。鬼切の三の太刀ゆきは、聖堂騎士の機動力と直立するための主軸を突き貫いていたのである。

「　いつの間に？」

仰向け、大の字になったアントニオは、独り言のように零した。

「殺す気で突いた二の突きを、咄嗟に回避できたのは見事だったが……お前の動きは単純な直線でしかなかった」

それは場を限定させた陰陽師の手柄ということか。

予測し易い単純な運動。それに加え、絶対的な切り札であるはずの封殺法剣が、事、今回の攻防に於いては不利ネックとなったのである。

その武器は詩緒に、常に正確すぎる位置を教え続けていたのだから。

「そして、慢心しすぎだ。確かに機動性では俺よりも、お前の方が優れていた」

「　だが、それよりも単純に、お前の剣速のが上だった、つうだけか……」

剣聖。そう異名を取る二人の剣士がいた。

本人は知らずも、その二人をして、唯一共に、少年は自身の剣技を超えたと認めさせた剣士なのである。

超高速で強襲する己が命を奪わんとする刃を前に、それを的確に打ち流す。加え、同時と思われる瞬間に勁部と軸足の中心を正確に鋭く強く突き抜く。

アントニオの縮地法と同じく。そしてそれは、彼の剣技もまた神技だったという事実が導いた結果だったのである。

血の流れる足をどうしようともせず、ただ放置しながら、突然にアントニオは高笑いを上げた。

狂ったように、騎士はひとしきり笑う。

「ケケケ　確かに今回はテメエらの勝ちだろうさ……だがな」
そう続けたアントニオの顔は、決して勝ち誇る者のもので、負け惜しみを吠える者のもでもない。

「無理なんだよ。タイムオーバーだ。テメエらにはロンギヌスを阻止することが……ユリアに勝つことができねえんだよ。結局はヤツの一人勝ちなのさ」

それは己の無力さに打ちひしがれて、絶望する者の顔だった。

A World BorderLine - 5 ”世界の降臨”

「Fab - 28 . Tue / 19 : 50」

「……オレの予想じゃ後30分もねえな」

皮肉を込めて嗤うも、それはどこか物悲しいものだった。

「……僅か、それだけの時間で何ができるってんだ？ 正確な着弾時刻どころか、何処に落下おちるかすらも判らねえってのによオ」

リュドミアから魔術通信が入ってから6時間以上が経過していた。その情報が確かならば、殲滅術式・ロンギヌスの槍は既に発動されているだろう。

闇空。その脅威は、そこから何時、降り注ぐとも知れないのである。

アントニオの耳。遠くに聞こえた、ジェットエンジンの音。

どこを飛行フライトしているのか？ 現状の視界にアントニオはそれを見つけることはできないが、さして物珍しいものでもない。だから、彼はその音源をそこに捜すことを放棄した。

せめて。

せめて、その無関係な民間の人間を多く乗せた物体が、ロンギヌスに巻き込まれることがないよう、神に仕える騎士は祈りを捧げる。気が付くと、アントニオは泣いていた。

「ああ……そうか」

呟き、彼は思い知る。

秋良・ヒルベルトと出会った、初めて対峙した、あの村での自分。そして、秋良・ヒルベルトと人目をはばからず再戦した、異国の都市での自分。

縮地法を身につけ、封殺法剣フウキョウホウケンという絶対的な力を手に入れはしても、根本的には何も変わってはいなかったのだ、と。

絶望的な状況に、自分の誇りも、想いも、守るべき人々も、何も

留めておくことができなかった、脆弱で無力な自分に気付くだけで、ローマ十字教。その魔術組織最高の部隊、イスカリオテ。

そのナンバー5となったところで、過去あの上と同じく、自分は殺戮狩人シャーに八つ当たりするだけの道化だったのだ。

愚かしい、とアントニオは思う。

だが、少なくとも今は、同じく己の無力に打ちのめされる同類がいる。

ケケケ、と、自身を蔑んだ感情を隠すように、同じ滑稽な剣士を嗤う。

この国の退魔の剣士。その武士も陰陽師あいかたに重傷を負わせてまで掴んだ勝利の意味を失い、何もできぬ自分に絶望し、さぞ脱力感に苛まれていることだろう。

「 なっ!?! 」

上半身を起こし、映りこんだ歪んだ視界に、しかし。そんな道化師など、ここには一人だけしか存在していなかったことを確認する。黒衣の滝口は、何かを待っていたのだ。その為に、迷い無く動いていたのだ。

僅か。詩緒は心に巢喰う闇の拘束を緩めると、解放された滅びを神氣で己として同化させる。斬る意志を、その強力な自我で更に強固な意志とする。

アントニオが見たのは、恐ろしく危ない駆け引きを行う剣士の姿だった。

狂っている。その行為は彼にとってそうとしか思えない行為なのだ。

人は心にある闇に喰われれば、異端へと墮ちる。人ではなく魔物と変わり果ててしまう。

最悪の自殺行為である。自分という存在を消滅させるのみならず、呪われし死を振りまく存在に生まれ変わろうというのだから。

目の前の剣士は、それを自らの意向で行おうとし、だが、人ではなくなる直前に。

黒衣の滝口は神速で抜刀する。

一閃。その斬撃は一撃にして、隆起していた岩盤を容易く次々と薙ぎ倒す。

そこには一筋の道が作り出されていた。

「……テメエ……」

アントニオは啞然とする。

その剣士はヒトでなくなる直前に、確かにヒトになったのだ。

それも単にヒトでしかないヒトだ。それはヒトとアヤカシの混血である半妖でもなく、ライカンスローブ獣人でもなく、単純なニンゲンという種ではないヒトだったのだ。

魔術世界では肉体的にも魔力的にも劣る、下等種だったのだ。

それがなぜ、どんな種族でも行使できないような魔力も何も使わずに、あのような鋭く強力な斬撃波を走らせることができるのか？

「……人はお前が決め付けたほど底の浅い存在じゃない」

その可能性を垣間見せた滝口は、アントニオを一瞥すると呟いた。

「アレはなんだ？ どういうことだ……？」

発生した事象を理解できず、騎士は問う。

遠くに聞こえていたはずのエンジン音が近付いていた。

それがジェット機等のものではないことを理解したところで、今はどうでもいいことだ。

聖堂騎士は答えを待つ。

「俺は自分で在り続けているだけだ。諦めず、信じ続けているだけだ」

そして、それは啓示、だったのかも知れない。

神が異国の剣士の口を借りて、信者たるアントニオに伝えたかった言葉だったのかも知れない。

「……ああ……」

零し、使徒は頂垂れる。

奇跡、なのだ。

諦めず、信じ続けること。

それは正に奇跡、神が人に力を与える条件、なのだ。
そして、アントニオが只管に逃げてきたことなのだ。

「お前の力、借してもらおう」

そう告げて、騎士の傍らに在った封殺法剣アトリエユートを詩緒が拾い上げたことにアントニオは気付いたのだろうか？

否。今はそれさえも彼には大事ではないのだろうか。

アントニオ・ゲルリンツォーニは唯、己を省みていたのだから。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 10」

「ずいぶん物騒な音じゃないの、それ……」

少し離れた場所に停車しているバイクを辟易として眺めながら、
瑞穂は愚痴る。

それでもその声が掻き消されそうなほど、そのバイクのエンジン
音は甲高く鼓膜を打っていた。

「着弾まで20分、か」

「御意に」

少女の言葉をさらりと流し、詩緒は天后に再度確認する。

そのバイクは天后がこの場所へと運んだものだった。

詩緒があのかのバスターミナルで彼女に依頼していたことの一つが、
この緊急車輛（Y2K）の運搬だったのだ。

そして、残りの託けは『ロンギヌスの槍』の着弾地点と着弾時刻
の正確な情報である。

それは今、彼女の口を介して、彼女の主から伝達されたところだ

った。

陰陽寮陰陽頭・安倍晴歌。彼女は詩緒と瑞穂を合流させるべく、その行動が円滑になされるべく、そして、発生していく事実が変わる未来を直前まで正確に式占わりだし伝えるために天后を遣わせていたのである。

鬼切と封殺法剣。

つい先ほどまで互いの担い手の命を狙いあつた、二振りはずでにバイクへと備え付けられていた。

ブラックメタリック
黒金属色の車体からは爆音が聞こえる。

「着弾地点までの道順は把握されているのでしょうか？」

「ああ。中学時代（に、さんねんまえ）に役目でいた場所だ。問題ない」

詩緒は天后の声に答えると、バイクへと足を向けた。

「では、賀茂様の止血をしつつ、お二人の到着後、帰還致します。御武運を。渡辺様」

「……任せた。しくじったら殺すわよ？」

二つの声を背中に受けるも、相変わらず反応は見せない。

爆心地。一番危険の生じる場所で、一番危険な任務に当たろうとしておきながら、普段と何も変わらないのは寧ろ良い兆候なのだろう。

ライディングギアを一切身に纏わずにシートに座ると、詩緒はアクセルを吹かす。

それには通常のバイクとは異なり、若干のタイムラグが生じる。

250型ターボシャフトエンジン。それは通常の車輛用エンジンではなく、航空機用のガスタービンエンジンを搭載するこの機体故のものである。

緊急用。そう表現されるのも無理はない。

この国の法律では公道で走行させること自体が違法行為なのである。

サイレンサー
消音機が存在しておらず、そのために新幹線よりも大きな騒音を

響かせ、さらには摂氏400度の排ガスをばら撒く。

騒音公害極まりなく、後方に車間距離をとらずに停車しようものならバンパーや外装を意とも容易く溶かす危険極まりない車輛である。

しかし。

詩緒は神氣を纏い極限まで集中すると、躊躇なくアクセルを全開フルスロットした。

その身体には、車体には殺人的な加速がかかる。

最高速時速約400キロ。時速300キロを超えるのに要する時間は僅か10秒ほど。

地上を走るものとしては常識的なレベルで考えれば、それは最高のものである。

事実、二人の視界からそれは一瞬にして消えていた。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 20」

僅か10分。ほぼ全速力で機体を駆り、その短い時間で詩緒は過去に住んでいた街 彼方たちの暮らす街へと入っていた。

しかし、そのバイクだったから、それが可能になったという訳ではない。

直線が少なく、かつ短いこの国の道路に於いて、単純に速いだけでは、その性能を活かしきれはしないのである。

極限にまで集中、外部情報を感知・收拾し、ライディングする。その情報を元に理想的なラインを走る。

そして、その種はそれだけではない。超一流のライダーがその機体を駆つたにしても、その区間を10分足らずで走破することは状

況的に不可能であるからだ。

20時過ぎ。

今はそのピークを過ぎたとはいえ、十分に車道は混雑をしていてしかるべき時間だからである。

しかし、詩緒の駆る単車は、走行車両のほとんどいない道路をひた走る。

それは陰陽寮という政府機関の働きによるものだった。

だが果たして、その道路を交通規制している警官たちのどれほどが、その理由を知っていたいよう。いや、ガス漏れのおそれ、などと適当な表向きの理由は知っていたとしても、少年一人がガスタージンエンジンのバイク一台を走らせるためなどという本当の理由を知る者は、誰もいないだろう。

そして、もう一つ。

詩緒は明らかに^{オーバースピード}超過速度で、目の前の曲がり角に突入していた。いまさらブレーキングを行ったところで衝突は免れようもない。慣性に従い、滑るように歩道との境目にあるガードレールに車体は流れる。

その後輪が、不意に地面をしつかりと蹴っていた。最低限度の減速で、見事に黒金属色の機体はコーナーを脱出する。

それは詩緒が、自身に眠る『鬼』の力を解放し、^{アスファルト}舗装を破壊しながら足を軸にし車体の進行方向を力ずくに変えるという、極めて破天荒な荒業が可能にしたコーナーリングだった。黒衣のライダーは少しでもロスを削るべく、その無謀を繰り返していたのである。

目指す場所までは後少し。

そこは曰く付きの場所だった。

そこは、。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 26」

、特異点といって差し支えない。

いくつもの事件の始まる場所で、いくつもの事件の終わる場所でもある。

時津彼方が秋良・ヒルベルド、ルーナ・カトールレゲナ・ブラチネットと出会った場所。

的場澄澗は癸千鳥をその場所へと案内し、ランスロットと死闘を繰り広げた。

金沢夕朔は松岡光輝とその場所で交戦の末、共闘する。

そして、桜井美里が時雨沢匠等と暴走により召喚されたアジ・ダハーカを送還した場所。この一件によりアンデル・ランダンデルはこの街に暮らすこととなったのである。

加えて告げるなら、渡辺詩緒がこの街で『魔』を討ち滅ぼした場所でもあった。

住宅地に入り、流石にアクセルを絞って滝口はその場所を目指す。記憶にある道。

多少入り組んでいても、。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 28」

、迷いはしない。迷えはしない。

重圧。見えはせずも、それは夜空そのものが落下してくるかのように、この街に押し掛かろうとしているのが感知できるのだ。

それは巨大な魔力の塊。

終焉、終末、結末、終局、終幕、黄昏、悪夢、破壊、破棄、破碎、恐怖、滅び、死。それでありながら同時にそれは、祝福、解放、自由、。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 29」

、救済を与えるもの。

それは神の、祈りの力の作り上げたもの。

雲が円を作ったかと思うと、急速にその輪は広がっていく。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 29 : 55」

その輪の中心から降り注いだのは光の柱だった。

輝く巨大な光の柱だった。

円く広がる雲は、夜にも関わらず美しく照らされ黄金色に染まる。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 29 : 59」

『天使の輪』（エンジェル・ハイロウ）。

御使いの象徴はこの街を照らし救いを、もたらす。

ロンギヌスの槍。

それは終に降臨する。

柱は地表に接したと思われる一瞬に、それを焦がし、命という命を無の帰す閃光を大地に広げ。

公園の入り口で。詩緒は、乱反射するブラックメタリック黒金属色の車体を車止めに衝突させた瞬間に見ていた。

それは、終わ、り、では、ない。

詩緒は、

滅びを解放する。

ぞわり、と嫌悪とも汚染とも腐食とも感じる身を侵食する闇を、
一気に、解き放つ。

消滅しそうになる詩緒いしぎ、
刹那に災厄を目覚めさせ、
それは、己だけを救い、その魔術に拠る滅びの様を嗤おうと、
鈴、が、聞こえ、

衝撃に弾け、砕けた黒金属色の車体が舞う。光に包まれる。魔光の熱に容易く溶け失せ。

銀の鈴を宿した左手が、その閃光の中から何かを掴むと走った。攻勢エネルギーと変換された先端以外。まだ純粹な魔力として存在する広域爆撃魔術を、その左手の霊装が、封殺法剣アトリビュートが無力化する。

そして、その右手には剣士の愛刀が在った。滝口たちの意志が在った。

天から注ぐ光が封殺法剣アトリビュートの力により失せ、無力な粒子に霧散しようとする最中、その中心で黒衣の少年は、強く、自身を、鬼切を、信じた。

、ああ。この刀と俺なら斬れる。

滝口はその刀に、『斬る』という意志を乗せることができる。

故に、彼等は剣士でありながら、霊体などの無形の存在である『魔』をも斬ることで討ち滅ぼすことが叶うのである。

そして、少年は、渡辺詩緒は今、その極致に在った。

彼は災厄を渡辺詩緒であるという神氣で、自身たらしめているのである。

意志だけの力で、消滅して然るべき己を存在させているのである。ならば。彼が斬るものだと想った対象が斬れぬ道理はない。

斬る意志で統べてを斬ることが叶う滝口が、その意志を極限に、奇跡の位置にまで高めているのだから。

右手に在った鬼切が閃いた。乗せられた意志、それが斬るべきものは、周囲に存在する『事象』。間に合わず発動を許したロンギヌスの遺した滅びの力。超高温の爆炎、爆風、爆熱。現象という物質ではないもの。

しかし、それは確かに一閃にて斬られる。在りし事が無として斬り捨てられる。

その斬跡は奇跡だけを残していた。

「Fab - 28 . Tue / 20 : 30 : 01」

公園の中央には、黒く焦土と化した地表が円を描き出していた。黒円の中央に立つのは黒一色に身を包んだ少年。

その右手に握られているのは遺刀。彼の兄を始めとする過去の滝口たちの遺した宝刀『鬼切』。

小さな銀色の鈴と共に、その左手にあるのは奇跡を再現する十式^{テスタ}霊装^{メント}。騎士の誇りと信仰、虚栄の振り払われた神剣『封殺法剣^{アトリビュート}』。崩れ落ちそうな身体をとどめ、詩緒は借りた力を一瞥した。

「……俺たちの勝ち、だな」

それは彼なりの礼だったのか。

しかし、告げた相手はその場になく、応える声はない。

そして、薄れる意識に抗う余力なく、滝口は崩れた。

奇跡の代償。

倒れた少年の身体は微動だにしなかった。

e p i l o g u e ” 朝 ”

朝。

確かに今は、そう呼ばれる時間ではあるにも関わらず。だが、見上げた空は未だ暗く、夜の、闇の時間の名残を残していた。

しかし、多くの人々が暮らしているその街は、確かに息衝き始めている。

後、どれくらいの間が必要なのだろうか？

だが、その後少しの時間が経過してしまえば、いつもと変わらぬその街の日常は始まるはずである。

核兵器による無差別攻撃。それと同等、或いはそれ以上の脅威が、正に自分たちの住む街に、直前にまで迫っていたことなど、誰も知ることなく始まるのである。

見知らぬ街。見知らぬ空。

ぼんやりと、瑞穂は薄く明るみを帯び始めたそれを眺めていた。

白く染まる息を零す口元に、ふと左手を遣ると大きな欠伸を噛み殺す。

それはこの時間に起きているという純粋な眠気からきたものというよりは、疲れの誘った欠伸だった。

断たれていた魔術回路の復元。突き裂かれた腹部の治療。

つい数時間前。深夜に行われた、彼方の知り合いだという魔術師による魔術療法。

しかし、如何に魔術による処置といえども、実際にその回復を行ったのはあくまで対象の細胞、肉体。つまりは賀茂瑞穂という少女自身なのである。

その疲労は当然、身体そこに蓄積していた。治療中、治療後に多少の睡眠が取れたとはいえ、その疲労を回復するには、たかが数時間の睡眠時間では不十分過ぎたのである。

ごく一般的な魔術による治療方法は、現代医術と根本的な部分で

はそう大差はない。メスなどの大小新旧問わぬ医療機器と、各種投与服用薬剤が魔力によって行使、精製されたモノに代わるだけの話だ。違いといえば、確かに魔術による治療は、医術と比べると超速度での回復をもたらしてくれるものではあるが、結局のところ被術対象の持つ治療能力の補佐や補助、付与に過ぎないのである。

ならばそういう疲労感を覚えた現状、安静にすることが大切だという点でも、それは一致していた。

こと、今回、治療を施してくれた陰陽師は短時間に四人もの重傷患者の処置を行わねばならなかったのである。

その治療術式は極力簡素化され、結果、その治療効果は、より純粹な医術に近づく。

それは決して手抜きや、実力不足からくることではない。怪我を無にするような術式ではなく、基本は被術者の身体の持つ治療能力に多くを委ねる術式になってしまふのは、仕方のないことないことなのだ。精神力や集中力を大きく消耗する魔術という技術を行使するのである。そうしなければ、術者自体が先に参ってしまう。彼女は、冷静にどの部分により魔力を消費すべきかを判断し、迅速に最善の処置を行って見せたのである。

では、体力の回復を図る必要があるというのならば、彼女の部屋で、そのまま暫く休息をとっておくことこそ、最善であったはずだ。何故それをしなかったのか。

それを瑞穂が良しとはしなかったのだ。

ダイクライトストーカー
行灯陰陽。彼女たちを助けた魔術師。彼方の友人だというWIK

の陰陽師、癸千鳥。

ソーサラーテキスト

ダイクライトストーカー
陰陽律法と異名を持つ少女は、その行灯陰陽という少女に、少しでも多くの貸しを作っておきたくはなかったのだ。

二人には面識があり、そして……。

痛みの消えた腹部に手を置くと瑞穂は、千鳥の自宅のある方角を伺う。

「……何よ。劣等感の塊みたいな返事をよこしたくせに」

やるじゃないの。と、相手を褒めるような言葉の続きを零しかけ、陰陽寮の陰陽師は口をつぐんだ。

朝日を未だ待つ早朝。

瑞穂と詩緒のいる、そのプラットホームに人の姿は疎らだった。

始発が走り去った直後の時間である。急ぐ者は先発した電車に乗って行ったであろうし、急がぬ者は何も好き好んでこんな中途半端な時間の電車に乗ることもないだろう。

だから、だろうか。次発電車を待っているのは彼女ら以外には数人だけだった。

少女は数歩先にある、暫くは電車の来ない線路へと視線を落とす。始発から終電まで。一日という限られた時間だけであつても、ここを何十本という車輛が運行計画ダイヤに沿って行き交うのだ。

路線が開通して以来、今日まで。ここをどれだけの本数の電車が走ったのだろう。そして、その電車に揺られ、どれだけの数の人間が、自分たちの住んでいる街に来たのだろうか。

なのに、瑞穂は一度もこの街に来たことはなかった。

昨夜、初めてこの街に住む少年の車に担ぎ込まれ、やって来たのである。

この足元の線路が、本当に自分たちの住む街まで伸びているということ。だから、こうして、帰るためにその電車を待つ自分がいるはずなのに。

それはまるで嘘のように思われて、夢現ゆめげんのようで。だが、そんなことを思ってしまった自分が、少し不思議に思えて。そして、そんなことを感じた自分が可笑しくなり瑞穂は微笑わらいっていた。

「 祭の後みたいね」

ぼつりと少女は呟く。

昨日一日の事件。それは、敵、味方問わず、密度の強すぎた出会いを与えた。自分たちのしたことも世界的に波紋を生むことで、いつも以上に大きく、世界の裏に慣れていたはずの感覚からしても非日常過ぎて。

だから、そんな風にも思えてしまうのだろうか。

ありありと感じている疲れや眠気。そして、夜明け前の街の淋しさ。

そんな要因から起こる感覚であるかも知れないと瑞穂は思いつつも、悪い気はしなかった。

横に目を遣ると、黒衣の少年がいつもと何一つ変わらぬ無表情で立っている。

その変わらぬ表情の下で、本心で何を想っているだろうか。付き合いの長い少女にも、それが解らないことの方が多い。

そして、一つ、今回も解らないことがあった。

「……よくもまあ、私が『わざと斬られる』って理解できたわね？」
瑞穂はそれを聞いてみる。

アントニオの封殺法剣アトリビュートに斬られる覚悟を決めた直後、瑞穂は確かに詩緒を見た。

それは紛うことなくアイコンタクトであつたことに間違いはない。しかし、そこまでの意志を込めたものではなかった。せいぜい『後を任せた』程度の認識で行つたものである。

さらりと軽く問うものの、それは大きな分岐点であつたのだ。

もしも、あの視線の交錯によつて、彼女の込めた程度の意思疎通しかなされなかつたのだとしたら、賀茂瑞穂という少女は、脇腹を串刺しにした霊装でとどめを受け、絶命していた算段が極めて高かつたのである。

「 どうしてよ？」

「 ……別に他意はない。お前なら『そうする』と思つただけだ」

答えを急かした少女に、少年はさも気だるそうに返す。

そして、理論も何も、その言葉にはなかった。

渡辺詩緒という人間は、基本的に理詰めで動くくせに、確かに直感だけに頼つて行動することもある男だ。しかし、稀に見せる、その直感が鋭いところが、この黒衣の滝口を陰陽寮が最も頼りにする滝口たらしめているのかも知れない。彼らの生きている世界は、常

識に縛られていては解決できないことが多いのも事実だからだ。

だが、それはそんな直感などでもなかったわけだ。

しかし、返つて来た言葉に、瑞穂は不思議と納得していた。

いや。その感情は納得というものではない。少女は自覚できなくともそれは好感。『嬉しい』という類の感情だ。

「……まったく。そんな根拠もないことで不用意にアントニオに接近して来ていたわけ？ アンタまで封殺法剣アトルキエールにやられてたら、どうするつもりだったのよ？」

文句を零しながら、瑞穂は詩緒から顔を背け、自然と表情を隠していた。

「やられはしなかった」

「……それは結果論でしょ。答えになってないわよ」
顔を互いに背けたまま、沈黙が訪れる。

反対車線に迫る電車の音が聞こえた。

街の生活の音も、徐々に、徐々に明らかになってくる。

「……で？ いつまで無理を通す気？」
不意に。

瑞穂は詩緒へと向き直ると口を開いた。

「何のことだ？」

予想された反応。

もう。と柳眉を逆立てると、変わらぬ無表情の少年の袖を掴む。

そして、間髪入れず、瑞穂は力任せにその袖を引いた。

呆気なく。

黒衣の少年は体制を崩し、少女に身体を預けるカタチになる。

「……」

一瞬。少年の顔に浮かんだのは痛みだけだったのか。

「……まったく。前に同じことをしたときには数日は寝込んだクセに……たったあれだけの時間で、アンタが回復してるはずないじゃないのよ」

少年を抱きかかえながら向けた言葉に、語彙通りの毒はなかった。

瑞穂はコートの内ポケットから人形ひとかたを取り出すと、詩緒の背を擦るようにやさしく撫でる。

「……私を信賴して動いてるんでしょ？ いざってときは私に殺して欲しいんでしょ？ 私に命を預けてるっていうなら、こついうときくらい私に頼りなさい！」

人形に災厄の残した穢れを移し、少しでも少年の痛みを消しながら、少女は少年の耳元に囁いた。

それは愚痴でも怒りでもなく、願い、だった。

「そうかもな」

「そうよ。少なくとも、今、この時に限れば、アンタは私の足手まといでしかないんだから！」

だから。そう瑞穂は続ける。

「だから。だから、私が護ってあげるわよ。そういう時くらいわね」

真横にある少年の顔から逃げないように瑞穂は首を動かした。

何か、行すべきことを探すように、手に在った人形を進入してきた電車の風に流す。

乱れそうな意識を無理矢理に落ち着けさせると、異能の力に、世界の真理に当たり前のように触れる。

火行。世界を構成する五行の力の一つに命じ、その穢れを異界へと送り出す。

少し。ほんの少しだけ、それで少年の身体は楽になっただけだ。

しかし、瑞穂は敢えて、それで詩緒の身体を起こそうとはしなかった。

まだまだ彼の穢れは抜いきれてはいないのだ。

それに。

それに暫くは。せめて自分たちの乗車する電車が到着するくらいまでは、このままでもいいか、と思う。

少し、安らかになったような少年の息遣いと、暖かい体温を感じながら少女が見上げた冷たい朝空。

つい先ほどのことなのに。

感じられていた夜は遠くに遠くに感じられ、そこには間違いなくありありとした朝の気配が漂っていた。

あとがき

陰陽道は日々進歩する学問と同じ。つまりは、新しい事象なにかに出会ったとき、その思想は、それを『陰陽道』的に解析して、『陰陽道』として吸収していくのである。

と、稚作にて書いていることは、陰陽道の歴史を独学ながらに勉強（と、仰々しく言えるものかどうかは置いておいて…）して、自らが辿り着いた持論です。

ということは、現代日本に至るまで、本格的に、特に魔術的な側面の陰陽道が脈々と続いてきたとしたのならば、おそらくは、いやさ間違いなく、他文化をいともたやすく受け入れる国風とあいまって、西洋・東洋を問わず、さらにはブドゥなどの土着宗教や、マインナー宗教なんかにおける呪術的なものまで、陰陽道は貪欲に解析・吸収し、発展してきたであろうと世木は考えるわけです。

さてさて。しかし、自作『現代滝口譚』に置ける陰陽道はどうでしょう？

あっさり結論を述べてしまうと、残念ながら、その持論を明確に表現するほどの陰陽道の表現は成されていません。

『現代滝口譚』という作品の設定では、『新たな魔術的事象の解析と発展を行うだけの優れた陰陽師が、陰陽道の最盛期以後、ほとんど現れなかったため』としています。

言い訳がましく聞こえるかも知れませんが、これは中世期以降、優れた陰陽師が少数しか存在していないという事実が、歴史的にも証明しているわけです。故に世界的に見ても素晴らしく、そして、万能、下手すりゃ最強にさえなれたという魔術体系を有しながらも『陰陽道』という思想は、廃れてしまったわけですね。

…と、建前はさておき、『現代滝口譚』という作品は、すでに前提から『if』を語っている（主役たる滝口からして、その『if』ありきで作られている物語ですからね…）現代猟奇ファンタジーなわけですから、陰陽道が、それこそ歴史の裏で発展し続けてきても良かったワケですよ。今回登場した『占事略決』が、適合者が必要とする難物なシステムではなく、単に代々の陰陽頭が使えるモノだと設定してしまえば、永久に『安倍晴明』と同能力の人材が確保できてしまうワケですよ。これで人材不足もねえだろう！ってな、コトになりますw

では、それに自分で気付いておきながら、何故にそれをしないのか？しなかったのか？

……現状、できないっす（泣）

それを再現しようとするれば、それこそ世界中の魔術体系を熟知し、自分なりに陰陽道に解析、つまりは応用した上で、さらには作品中で解説しながら表現しなくてはならないわけですよ！

それは理想です。

それは、いつか自分が書きたいと思う理想の陰陽道なのです。もつと勉強して、知識と応用力と表現能力と…様々な足りないものを補って、いつかは挑戦したいと思うものなのです。

さて。なんでこんな話をわざわざコラボ連載でのあとがきでするか？

その陰陽道というものの魔術体系が、世木維生という拙い趣味作家

が、月城柚氏のファンになったという理由だったからなんです。

それは、初めて長編（というよりも小説自体）というもの、『現代滝口譚1』を書いてある時のことでした。

ある方から作品の雰囲気（決して文体などではなく、設定的な雰囲気が、だと思えます。僕には月城氏のような緻密でありながら、読みやすい文章は書けませんので…）が、月城柚氏の『世界の狭間』に似ていると言われたんです。

近親憎悪、つてあるじゃないですか…正直ね、初めは、あまり乗り気で読んだわけではなかったんですよ。

ただ似ていると言われた以上、真似になってないことを祈りつつ、今後、真似にならないようにチェックしよう…と。

半ば作業的な…

しかし。

しかし、見事にハマりました（笑）

『世界の狭間』は非常に面白い！（月城氏の他作品もしかり）

僕は現代を物語の舞台にする以上は『リアルさ』は不可欠であると考えています。

「メラ！」と言ったから火の玉が出る。ではなくて、なんで火の玉がそれで生じるのか？という理由が『しっかり』欲しいと思う、納得したいと思う偏屈者なんです。

極論で言ってしまうえば、それがなければ現代を舞台にする意味がない、とさえ思います。

その点、『世界の狭間』に於ける魔術設定・解説ならびに描写は正に見事です。

現代社会という舞台に違和感なく魔術が存在して、物語の中核をなしています。

ああ、勘違いのないように補足すると、魔術は科学社会に於いて異能ではあるので、本来の意味での違和感は、作品中に当然あります。あつて当然です。だって現代社会が舞台なんですから。

しかし、月城氏はこれも見事に描きます。主人公である時津力ナタ、或いはミサト以外のジャベリンメンバーを使つて、それを物語として表現しているんです。それこそタイトルである『世界の狭間』なんですから。

日常と非日常の狭間の物語なわけですね。

そして、僕が、この月城柚という作家さんに一番に驚かされたのは『世界の狭間2』に於いて、だったのです。

そう。癸チドリという陰陽師に非常に驚かされたのですよ！

彼女は僕の理想とした『現代社会に存在すべき発展し続けた陰陽師』だったんです！

彼女は西洋魔術の技術・知識を融合させ、さらには『サンスクリット語』という日本の魔術である陰陽道魔術の基礎言語『かな』を問わずに陰陽道の呪術・秘術・魔術を行使します。

凄い！これ凄いです！これですよ！

感心しました。感動しました。尊敬しました。

この作品、面白い上に凄い！！

それが月城柚氏のファンが、新たに一人、出来上がった瞬間です（笑）

それ以降、メッセージを送らせていただき、交流させてもらえるようになり、そして今日、その交流の集大成であるコラボ作品完結に

至ったわけです。

全体の展開を考慮しつつ、話数を合わせたりするのは大変ではあり
ました。事実、その為に執筆に時間をかけすぎてしまい、特に月城
氏のファンの方々には多大なる迷惑をかけてしまったと申し訳なく
思います。

ですが、非常に楽しかったです。アイディアの出し合いから始まり、
物語の展開の打ち合わせ、執筆中のやり取り。時間が許されるなら
ば、個人的には、またいつかやりたいですね。

あくまで『時間が許されるならば』ですよ？（笑）

さて。というわけで、今回、物語の最後までお付き合い頂いた皆様、
本当にありがとうございます。重ね、今作は執筆に非常に時間を
かけてしまい、申し訳ありませんでした。特に月城氏のファンの皆
様には、しつこいようですが、申し訳なく思います。

いつもでしたら、ここで『でわ』なのですが、『セカイノハザマ』
とのコラボということで、オマケを僕も作ってみました。コラボで
心残りだったことを叶える、自己満足のため…で、ありますがw
僕にとつての『世界の狭間』の象徴ともいうべき彼女を扱った、コ
ラボの後日談…ということで、よろしければ、もう少し、お付き合
い下さい。
では。

現代陰陽師譚 くき

「May - 3 . Fri / 17 : 45」

吹き抜けた空風が毛皮のロングコートの裾を捲り上げる。

「はあ……」

その裾を片手で押さえつつ、風音に負けないような大きな深い溜息を一つ。

サイドテールに茶色の髪を結った少女の零したその落胆は、瞬間に外気に白く染められていた。

少女は街灯に照らされた暗がりを俯きながら、それでも目的のために、とぼとぼとはあるが足を前に進める。

「ほら。今日は雛祭りだから、放課後、クラスだんし 昂太一同のオゴリでカラオケなんてどう」

その脳裏にリフレイン 再生されたのは級友・まなへ ツツミ 真鍋鼓の声。

それは本日4時限目終了直後、即ちは昼休み突入時に、唐突に、しかし、クラス全員に完璧に聞かせるタイミングで発せられた提案だったのである。

その後起こった男子一同のフライング 非難なんてあまりに無力な障壁に過ぎなかった。

後は団結した女子一同の前に、あれよあれよと放課後の時間計画タイムスケジューリング 予定は緻密かつ完璧に次々と立てられていったのである。

それは単にクラスの一レクレーションでしかない。仲の良い彼女の学級にあっては、お題目は異なれど、まま開催される催し事である。

何も特別なことではない。

そもそも、男子も『参加すること』『開催すること』には非常に前向きだったからこそ、会費完全男子負担という難儀な案件も、結果、閣議を通過したのだ。

特別なことではない。

いや。特別なことなのだ。

少なくとも、この癸千鳥みすのこ 千下りという名前の少女に限っては言えば。

3学期も残すところ僅かなのだ。こういう機会が果たして後どれだけあるのだろうか？

正解を述べるのならば、このクラスに残された時間を考慮すれば、おそらくはほとんどないはずなのである。

良くてせいぜい後一回。『お別れ会』くらいだろうか？ 或いは、この『雛祭り』は、それを兼用しているのかも知れない。

4月になれば、新しい学級が編成されてしまうのだ。

「全く……どうして今日なのでしょう？」

少しどころか、心から陰鬱な気分で少女は左目にある眼帯に触れる。

その小さい布切れ一枚の下には、一目で他人にそれと解る、境界線が隠されていた。

そして、そこにある境界線の向こう　魔術だの魔物だのという、

非日常の世界の出来事が、今日という日の予定重複ダブルアップを引き起こしたのだった。

この国に存在していた真祖しんぞを討伐するために、ある宗教団体の派遣した退魔部隊。それが振り返りに遭い壊滅したのだ。

その真祖　吸血鬼の最強種を排除すること。それが彼女に与えられた任務……ではなかった。

それは既に、2人組の何者かによって討伐されているのである。

それでは気を重くしている彼女に課せられた役目とは一体？

それは、その魔物との戦いに於いて犠牲になった件の教団の信者

を一人、探し出すことだった。

犠牲、になった。

しかし何も、その探し出すべき遺体は、野ざらしにされているわけではない。そんな状態の亡骸を回収するだけのために、彼女が駆り出されるはずはないのだ。それだけが目的ならば、警察にでも任せてしまえば良いのだから。

では何故にチドリが動かねばならないのか？

その遺体は、一度回収された後に霊安室から消えたからである。

消え去った、その修道士の遺体　その発見と原因究明。

それが所属する組織から、帰宅直後に与えられた任務なのだった。彼女は高校生という表の顔とWICKウィックに属する魔術師という顔を持つのである。

ダークライトストーカー
『行灯陰陽』。

それが、その世界でのチドリの名前である。

さて、果たして先の愚痴は誰に対するものだったのか。

「チドリちゃん、チャンスよ！　頑張つてね」

なんて、同一人物の言葉が耳鳴りの如く遠くに聞こえる。それはチドリの胸の内に秘めた想いを知る彼女からの応援エールだったのだろう。しかし、その言葉は重く、重く押し掛かるのだ。

「……パフェルフアムさんも参加ですよ……当然……」

それは先日、宣戦を布告して来た同じクラスに在籍する日本産純正フランス人の恋敵の名前であった。何がチャンスなのだろう。これでは好機到来などは程遠く、絶体絶命である。

しかも、危惧すべきは彼女だけではない。チドリの想いの人は、異常フラグ持ちなのである。果たしてクラス中の女子に対して、何個の攻略フラグを立て済みなのだろうか？

チドリはそれを考えるだけで目眩を覚えてしまう。或いは新たな攻略フラグが、今日、その時に立たないとも限らない。寧ろ、立つ可能性は高い。否、立つに決まっている。

その少年が動いた物語に於いて、彼に新たに惹かれなかった女性キャラはいないのだ！（つい先ほど完結した物語に於いて、初の例外が一名生まれたことを彼女は知る由もない）

小刻みに振るえる少女の小さい体。それは寒さによるものでは当然なかった。

「……ある程度の辛苦は甘んじて受け入れましょう。私は無所属フリな身分ではありません。悲しいかな、今回のように涙を飲む機会もあるでしょう……いや、しかし！ しかし、パフェルファムさんにそれを味合わされるのだけは辛抱なりません！ 私なんか私なんか、背中合わせで座るだけで満足げな表情させられて我慢させられたなのに……なんで！？なんで、彼女には頬にkissが許されるのですか！？少なくとも私の目の黒い内は彼女にだけはこれ以上、オイシイトコロを譲るワケにはいかないのです！ 私だつて！ 私だつて、時津さんとあんなことや、こんなことを！

そうなのである。だからこそ、なのだ。チドリは同じクラスの時津きつ彼方に想いを寄せているのである。

その言葉の内容は意味不明ながらも、だからこそチドリは憂鬱となのであった。

ぞくり。

辺りに人の気配を感じていなかったからか、それとも、この街がチドリの暮らす街から離れているためだったのか。

思わず口走った本音（？）の直後に、冷たい視線を感じ、チドリは生命の危機を感じる。

慌てて、視線の元を、背後を振り返り、構えを取る。

眼帯に細い指先さえ、伸ばしていた。

その眼帯の下にはチドリの切り札が隠されているのである。

しかし、それは危険極まりない切り札なのだ。無闇矢鱈と行使できる代物ではない。事、このような、いつ何時に一般の人間が現れそうな場所では。

しかし、それほどの危険性を、確かに彼女は感じたのだ。

冷たい視線。黒い人影。そこに佇むのは果たして。

違う。あの恐怖ではない。カナタを想うカナタの後輩のカナタの同僚の長髪黒髪の少女ではない。

そこに立つのは黒一色に身を包んだ少年だった。創り物のように美しい顔立ちをした少年だった。

その左手に握られているのは竹刀袋である。

そして。

冷たい風に彼のその左手首に在った小さな銀色の鈴が、澄んだ小さい音色を聞かせていた。

その黒依の少年と、チドリの視線が交わる。

少女は頬を染めた。いや、要らぬ言葉を聞かれた、恥ずかしさなのだが。

少年はただ無表情に

(コイツ、今、鼻で笑ってやがりませんでしたか!?)

それは単に少女の錯覚だったのだろうか？ しかし、確かめ術もなければ、確かめる気もチドリにはない。

視線が交錯したと思った刹那、少年は少女を嘲笑ったかどうかは別にして、即座に背を向けて消えたのである。

(別人 そうね、ここにいるワケがない、って、あれ？ あの人は、このまえの滝口?)

とりあえず、ほつと胸を撫で下ろすとチドリは気を取り直す。

「……しかし、美里^{ヤンデル}さんに殺^ヤられないように注意しないといけませんね……」

と、内心を吐露するように独りごちると、

「……………？ ……何で私がヤンデレなんて異次元の言語を理解しているのでしょうか？」

自身に疑問を向ける。

「バカなコトをやっている時間はありませんね。夜が来てしまいましたか」

直後、零したその顔は凜として、ぼやいていた少女のものではなかった。

世界の裏に生きる魔術師のものである。

チドリは首から下げていた方位磁石のペンダントを手の中に収め持つ。

それは『羅針盤』という魔術道具^{マジックアイテム}であった。そのペンダントの用途は、あらゆる魔の探索である。

「神聖四文字・A R L T。方角は北の支配者・ウリエル。シンボルである砂によつて、我が宿敵の在処を示せ」

続け咳きながら、スカートのポケットから小さな小瓶を取り出す。

その中に在るのはデルポイ神殿の十字中央の砂を基本^{ベース}に作られた彼女特製の聖砂である。

行灯陰陽は小瓶のコルクを外すと、羅針盤の蓋を開けて聖砂の中に流し込む。

そして、その上にそつと、四つの結び目を作った細長い注連縄を置いた。

彼女の手によつて行使されるのは、東洋の呪詛と西洋の魔法儀式を組み合わせた術式。

それはお堅い老害に言わせれば外法。そして、ある者に言わせれば新たな陰陽道の、否、在るべき陰陽道のカタチ。

「我が名、行灯陰陽^{ダイクライトストーカー}が命じる」
小さいながらも、確かに力を秘めた言葉。

西洋魔術においても、東洋魔術においても名前は重大な役割を示す。

東洋魔術、即ちは言霊^{ことたま}。名前とは、その存在を縛る最小の呪^{しゅ}なのである。

尤も、行灯陰陽^{ダイクライトストーカー}が告げた名前の意味は前者。

西洋魔術としてのもの。名前の秘めた魔力の開放を意味しているのだが。

「鬼を探せ」

亡骸では決してなく、鬼を探せ、そう彼女は言った。

そして、『その事実』を証明するかのように羅針盤には変化が見られる。

意思を持った生き物のように聖砂は動き、注連縄は磁針に絡みつく。

それに因って北を指すはずの赤針が指したのは北西。

「鬼門ですか 何とも今日はツイてないようですね……」

中国最古の地理書『山海経』が元になっているとされるとされる忌むべき方位、鬼門。鬼が出入りするという方角。

しかし、彼女の言うツイてないとは意味が異なる。

その方角に進めば、ますます想いの少年からは遠退くのだ。

早急に事を片付けて、カラオケに参加しようという浅はかな望みは益々薄れてしまう。

「飛べ(ダドーラージャア)」

落胆を裏の顔に隠し、チドリは梵字^{ぼんじ}で『大鳥^{ガルーダ}』と書かれた何の変哲もない半紙を投げると命じた。

チドリの魔力に、瞬く間に仮初の生命を得る紙片。

それは紛いなく式神であった。

本来、陰陽道は日本の魔術であり、その術式の基本言語は当然日本語である。

しかし、それをサンスクリット語で組む彼女の意図は。頭上をくるりくるりと舞う式に、チドリは命じる。

「我が使役魔^{ファミリア}よ。鬼を見つけよ」

見知らぬ街。

想いの少年が関わった事件。その事後処理。
簡単に終わると思われた彼女の任務は、こつして本格的に開始さ
れた。

現代陰陽師譚 〓 貳

「May - 3 . Fri / 20 : 00」

「流石はルネイスです（月城氏H P t o p平成19年10月ver .
）。節度というものを知っていますね。私たちはアレくらいで止めておいて、世木だのにヤキモキさせるのが人気を維持しつつ、さらに新規ファンを獲得するコツなのですよ！ 直接的なアプローチをするなんて浅はか者のすることです！ お色気担当は真のヒロインにはなれないのです！ …… ああ、因みに滝口譚のヤキモキキャラである琴音さんは、本編でチラリと触れられた冬季大会ための合宿に、今まさに参加しており、この街にはいらっしやいませんので、今回は全くもって登場致しません。3のラストで告白なんて大胆なコトをしときながら、一応はその後日設定である今回において、その後の二人については一切触れられずと、何かと『滝口譚』の女性キャラの話となると琴音さんに話題が集中するそうですし、私の本当の作者は、瑞穂さんがお嫌いらしく、彼女の出番がある方がいいらしいのですが、今回も悪しからず、です」

唐突に怪異を語った、見慣れぬ街に行く少女の足は重い。

その約半分近い面積は、山地を開拓して創られた街である。

長崎、神戸などの所謂『坂の街』として名前の通った都市ほどではないが、この街も件の土地に入ると当然ではあるが、途端に坂道が多い。

呟いたチドリの言葉は、そんな歩速を鈍らせる傾斜に対する愚痴のほずだったのである。

「……？ 今日私は少し思考がオカシイのでしょうか？」

だが口をついた言葉が、余りにそれと掛け離れていたために、小首を傾げると眉間を細い指先で押さえ、チドリは呻く。

「……冷静に。冷静に、です。落ち着きましよう。敵は夜魔。なの

ですから」

その標的を行灯陰陽ダイクライトストーカーは既に補足していた。地理に戸惑い、その分だけ時間を割いたのであり、現状、その任務は非常に順調なのである。

全ては彼女の予想したシナリオ通りだった。

ただ、それだけの事だったのである。

吸血鬼に見初められた者は、吸血鬼になる。

そんなことはオカルト知識に疎い人間でも知っていることではないか。

唯、その存在を、その事象を『現実』『事実』として受け入れることが出来るか、否か。同じく消えた遺体を、威信をかけて追っているであろう警察と魔術師チドリとの違いはそれだけだったのだ。

「ルチア・ダレッツオ……その恋人であった男、ファビオ・インザ
ーキ」

それがその『さ迷う死体』（リビングデッド）の名前。

「……守っても攻めても活躍できそうな人フレイヤー……もとい、恐らくはルチアからの口沿えで雨月しんそに見初められた可哀相な人」

汚れた命へと墮とされた標的たすねびし。

人として吸血鬼に殺され、闇の命を得て吸血鬼として黄泉返る。

それが消えた死体の真相だったのだ。

あとは、その原因の廃除を行えば、つまりは彼を抹殺すれば、この任務も終了である。

何故ならば彼は既にWIKの認める保護対象にはないのだ。

犠牲者は、もう、出ている。

「……本来ならば陰陽寮が責務を負うべきなのでしょうが……」

だが、任務の終わりが見えたところで、どうやらクラスレクリエーションには間に合いそうもないらしいことをチドリは認識していた。

WIK。チドリはその組織の頂点に存在する魔術師に心頭していた。

だから、その人物から直接指示のあったこの任務については、彼女の期待に応えるためにも強い気持ちで望んでいる。

しかし、そのためにチドリは断腸の思いで恋愛感情を抑えたのだ。微妙な管轄分けのされた魔術世界。例えば今回の事例で言えば、警視庁というこの国の機関が関与している以上、余計な問題を発生させないようにするには、通常ならば同じくこの国の公の機関である陰陽寮が処理すべきことなのである。

しかし、現実には行灯陰陽が、世界の魔術調停機関であるWIKが動いていた。

これは事件の発端にWIKの調停役としての落ち度があったことに対する、埋め合わせ的な意味合いが強かったためである。

普通であれば末端の魔術師である者からすれば、そんな上層部の事情なんて知ったことではないと憤慨することだろう。

だがチドリは違っていた。恐らくは上層部の事情とは、尊敬を通り越し崇拜する彼女の研究意欲興味翻意であろうことを知っているからだ。憶測でしかない話であるが、事の発端の事件の裏では、何かしら特別な魔術（極めて珍しい類の力を元とする魔術であったり、古に失われていたと思われた魔術、或いは新開発の魔術等）が絡んでいたと行灯陰陽と異名を持つ少女は睨んでいるのである。

それは大多数のWIK関係者からすると、迷惑甚だしいことではない。しかし、チドリからすると天才である彼女がそうすることによってこそ、魔術世界の進歩発展、調和が訪れるのだと信じている。

だからこそ、我慢もでき任務を本心から完遂させようとも思えるのだ。

式神たる大鳥ガルーダが鬼を補足した場所は、この坂道の先。

そして、その終点にあったのは、この国では大きい部類に入るであろう教会だった。

霊園を有する、その広大な敷地は、これからのできごとを外部に漏らさぬようにするには、うってつけの場所である。

しかし、対象はそれを踏まえて動いていたのではない。
魔術を行使する戦闘の場所として好都合だったのは、あくまで偶然だ。

そこは数日前、滝口と陰陽寮の陰陽師が、彼の愛しい人を塵に帰した場所なのだ。

チドリは知る由もないが、故に対象はここを目指したのである。
凍てつくような光を、その白塗りの建物に刺す月の下。

無数の邪悪な気配を、ダイクライトストーカー行灯陰陽は感じていた。

それは、そこに捕食することで眷属を増やす吸血鬼がいたのだとしても、異常と思える数である。

今、この時も、それは増加していくのだ。

「……これは死者洗礼と同じ能力だともいいますか　!?!」

驚きを零しながらも、被害が拡大せぬように「人払い」の結果を構築する。これで一般人は「なんとなくこの場に寄り付きたくなくなる」わけだ。後は内部の教会関係者にんげんだけを心配すればいいわけだが……残念ながら、これだけの数の吸血鬼を感知しているのだ。絶望的と考えて妥当だろう。

その数の恐怖を可能とした鍵が、先のチドリの「死者洗礼カータクサツヴァーアと同じ能力」という言葉だ。

死者洗礼カータクサツヴァーア。

ハウンドブレッシャー

ユドヘッド・ヘルシング

それは殺戮狩人に狩られた十二真祖の一人の名前である。その真祖の中の真祖たるモノの持つ能力は「死者をグールに生まれ変わらせる」という厄介極まりないものだった。

この時間、墓地にこれほどの犠牲者となる「生きた」人間がいるはずはない。

だから、チドリはそこに元から在った「死んでいた」人間が下僕となり、動き出したと推測したので。

だが、違う。死者洗礼は疾うに滅びたのだ。そして。

「いえ。報告書で知る死者洗礼カータクサツヴァーアの能力は、こんな矮小なものはないはずです」

その真祖が、その能力を発動させた際には、瞬時に町中の遺体が食人鬼として、彼の忠実な従者として目覚めたのだという。

対して、そこにある『死者をグルに生まれ変わらせる』行為は、発動者を中心に僅か数メートル弱、極々限定的な範囲にしか効果を与えてはいないのだ。

しかし、厄介であることに違いはない。

このままでは、チドリは一人で数百体の吸血鬼を相手する羽目に陥って仕舞うのである。

「腑に落ちませんね」

疑問を抱くも、ダークライトストカー行灯陰陽は行動を開始した。

「白虎！」

コートの内ポケットから古めかしい紙切れを取り出し、中空に放ると力ある言葉を発する。

それに呼応して舞う紙片は白銀の光を生むと、直後にはそこに三対六枚の純白の翼を持った大虎が出現していた。

「行きますよ！ 白虎！」

その背を踏み台にし、チドリは跳躍する。教会の大きな門を跳び越える。

白虎は一つ吼えると、主に続く。

疑問を解くことは後でもできるし、何よりその答えを導くには情報も少なすぎるのである。

だから、ダークライトストカー行灯陰陽に迷いはなかった。

雨月。

イレギュラー吸血鬼が存在しないと認識されていたこの島国に、存在していた特異な真祖。

既にその存在が滅びてしまった今、その能力の全てを解析するこ

とは、最早、叶いはしない。

彼の持っていた能力は、魔術耐性のあるものさえも容易く操る『魅了の魔眼』（チャームアイ）である。その個体自体の能力は、その強力ではなく、故に能力の特性を活かした集団戦術を得意とした。しかし、安永時代の滝口四天王に深手を負わされ、眠っていた間に、新たな能力ちからに目覚めていたのだとしたら。

そして、当人がそれを自覚する前に消滅していたのだとしたら

。

前記の通り、最早、確かめる術のないことである。

雨月は特異^{イレギュラー}。西洋・東洋の他の吸血鬼のデータの総てが、そのまま適用できるかどうかすら不明な存在なのだから。

只、そこにある確かな事実は、雨月の遺した配下・爵級の一体が、特異な能力を備えていたということだけであつた。

「まったく……。最後まで厄介な種を残してくれたものね。ローマ十字教だの、イスカリオテだのを巻き込んだだけで事足りず、置き土産が十二真祖ユドベート・ヘルシングの擬似的な能力を持つに至つた爵級だなんてね……」
チドリの越えた鉄門の前に、その数十分後に現れた少女は長い髪をかき上げ、如何にも気だるげに呟いた。

「……気乗りがしないなら帰れ。邪魔だ」

そんな少女の横に立つのは黒一色に身を包んだ少年。

無表情に放つたその言葉は、彼の持つ雰囲気と一体となり、心底冷たい印象を抱かせる。

「ええ、そうね。それじゃ、アンタ一人で行つてきて……なんて言いたいけど、そうもいかないのよね……あの相手に貸しを作りっぱ

なし、つてのも寝覚めが悪くてしようがなかったし」

悪戯に微笑うと、先の少年の冷淡な言葉に全く怯んだ様子なく少女は返す。

「教会の中に、まだ生存者がいるかも知れないから、アンタはそっちをよろしく。私は行灯ダイクライトストーカー陰陽を追うわ」

「了解した」

続け、それぞれの役割を割り振った陰陽律法ソイサラーテキストという二つ名も持つ陰陽師に、退魔の武士は了承を告げた。

現代陰陽師譚 参

「May - 3 . Fri / 20 : 30」

肉が申し訳程度に骨に残った、食人鬼^{グール}というよりは骸骨鬼^{スケルトン}を地面から生じた岩槍が木つ端みじんに砕く。砕け散ったそれは『がしゃん、からから』という風な、まるで理科室の骸骨標本を悪戯つ子が無理矢理にダンスさせるような音を、辺りのスプラッタな景色の中にシニールにコミカルに響かせる。

だが、そんな第三者的に場の雰囲気を感じている余裕は、チドリにはなかった。

辺りを支配しているのは死臭、嗅覚が麻痺して感じられなくなった腐敗臭。ゾンビ映画のバットエンドさながらに視界という視界を埋め尽くす、死人、死人の群れ。

発動させたばかりの魔術の成果を確認する暇^{いとま}なく、行灯陰陽は次なる魔術^{アヴァニスタムラハ}を行使する。

「地柱！」

再び生じた岩槍に、腐肉をぶちまけ、数体の異形が滅びた。

だが。

「多勢に無勢ですか」

痛みとも、痒みとも、飢えともとれる呻きを合唱しながらチドリを取り囲む死人の数は、一行に減少する様子はない。

少し離れた場所、距離にすればほんの僅かな距離で戦う白虎が死した者の人垣で見えないほど、それは乙女^{チドリ}という新鮮で極上な生餌に群がっていた。

「全く……キリがありませんね ！」

辟易としながら、両手に一振りずつ握られた魔術儀式用のナイフを構えたかと思うと、チドリの姿は消え失せる。そして、次の瞬間に、その姿は数メートル先の墓石の上にあった。

つい一瞬前まで彼女がいた場所と、その現在地を結ぶ直線上の食人鬼の軀の一部が刺激臭を撒き散らし飛ぶ、或いは切り裂かれ、落ちる。

それは瞬歩という技術。陰陽道にある体術の一つだった。高速の移動術であり、空間転移を行っている訳では決してない。故に移動経路の敵を攻撃できていたのである。

しかし、今のはあくまで移動ついでに攻撃しただけだ。

この状況で、いちいち狙いをつけて瞬歩による移動攻撃を行って
いては、その隙に数の暴力に屈してしまうこと請け合いなのである。

「……こうも密集されては、満足に動　！？」

不意に足首を掴まれ、チドリはバランスを崩す。

直下。その手は地中から生えていた。その墓石の主が地中から黄泉返り上半身を覗かせる。

その顔は標的ファビオ・インザーキのものだった。

それが大口を開け、鋭い採血のための犬歯を少女の足首に突き立てようとする。

「白虎！」

正にチドリが噛まれようとした直前。主の声に上空へと飛び、急降下した翼を持つ幻獣ホワイトタイガーが刃物のような爪を薙ぎ、吸血鬼を強襲する。衝撃に捻じ切れる頸部。大きく開かれたままのファビオの首がどす黒い赤を撒き散らし、宙に舞う。

「　何！？」

眼帯に隠されてはいない目が、驚きに開く。

そこに映ったのは、飛んでいるファビオの首を生氣なく見つめる無数のファビオ。

今まで個体ごとに容姿も、纏った襤褸も違っていた死人の群は、一様に同じ姿になっていた。

その全てが、ファビオ・インザーキに変わっていたのである。

トリックスター

擬態！？

「ダークライトストーカー行灯陰陽が驚愕したのも無理はない。それはコトヘド・ヘルシング十二真祖の一人『レイ同属不浄』が持っていた能力だったからだ。

その能力は自分の従者を、自分と遜色ない分身に変化させる力である。

「でも！」

それが恐怖たるのは『最強種たる真祖の肉体性能と同等のものが増殖するから』。

式神の一撃で滅んだファビオは、彼に呪われた命を与えたモノと同様、個体性能に優れている吸血鬼ではないのだ。

しかし。どれが本体なのかが解らずに乱戦を続けることは、精神的にも肉体的にも後手へと導くのは自明の理であった。

加えチドリには現状を打破するにあたり、欠落しているものがある。

「灼ける（ラン）！」

投射したナイフがファビオの一体の眉間に刺さったかと思うと、そのサンスクリット語に反応してナイフを起点に爆ぜる。

確かに単体対単体で見れば、ダークライトストーカー行灯陰陽は、遙かにその吸血鬼の戦闘能力を凌駕していた。

が、あくまでそれは単体対単体という縛りに於いて、である。単体対多勢に於いては、それが絶対的な優劣には繋がりはしない。

ダークライトストーカー行灯陰陽は、いかなれば魔法戦士なのだ。

故にこの状況下にあつて決定力に不足していたのである。戦況を一撃で変化させる力に欠けているのである。

いや。敵がアンデット不死者でなければ、その眼帯の下のホンルオシャン紅螺旋が、その切り札と成り得ただろう。

その一目で日常との境と解る眼には、周囲の生者から見境なく魂を奪う力があるのだ。

しかし、吸い取る魂たるモノ 『アストラル体』を持たぬ食人鬼に対しては無効なのだった。それは元凶たる爵級吸血鬼には有効

な能力ではある。高度な知能、魔力を有する吸血鬼は、不死者とはいえ、そのアストラル体を持つからだ。だが、その本体きよつけんであるファビオ・インザーキは、この群れの中にはいないと考えるのが妥当であり、それが正解でもあった。

折れた枝を隠すなら森の中とは言いが、彼には森たる戦闘いくさ地帯に
いる必要性が皆無なのである。

わざわざ最前線の危険区域にのこのこと出てくる物好きな最高指揮官がどこにいようというのか。後方から彼女の力が尽きるのを待つだけ良いのだ。

そして、もう一つ。それは彼女の魔術師としての才能に因るものだった。

チドリは基本的には魔術師としては才能のある部類ではないのである。

正確に言えば。魔術を発動させるための鍵たる言葉は、長い詠唱文の中に暗号として隠されているもののだが、それを解読する能力が著しく低いのだ。よってその要点だけをまとめ、簡潔にし、短い詠唱で魔術を発動させることが彼女にはできないのである。

確かにチドリは、この一面を覆い尽くす死人を一蹴できる魔術を持っていかと聞かれれば、持っているし、行使もできる。

ただし、それには先の理由により、丸暗記している長文の詠唱スベリ魔術を行う必要があるのである。精神を集中し、複雑な印を幾度も幾度も繰り返し返す必要のあるこの行為を、誰のフォローもなしにどう行うというのか。

「ジリ貧ですね」

認めたくはない事実を客観的に受け入れ、ダイクライトストーカー行灯陰陽はばやく。

余裕はある。しかし、それが返って恨めしい。

余力のある現状、戦略的な撤退を行えば、自身の安全は確保できるし、それを成功させる自信はチドリには十分にあった。

だが、それを実行に移せば、この大量の食人鬼たちは街へと流れ、一夜にして多くの犠牲者を作るだろう。

チドリは、それこそが我慢ならないのだ。

一般の人間を魔術世界に巻き込むなど、力ある自分が守れないなど、許されることではない！

「……仕方ありませんね」

また一体、ファビオを殺すと諦めたように、覚悟したように呟く。思えば、早々に事を解決し、想いの人との思い出を一つ作るつもりが、ここまで時間のかかることになるうとは。

「今夜は私と夜通し遊んでもらいますよ！」

吼えるように叫ぶと、チドリは群れの中心へと踊りかかる。

朝日を迎えれば、夜の住人たる彼等はそれを嫌い、姿を隠す。少なくとも仕切り直しができるのである。そうすれば、明日の夜、援軍と共に犠牲者を出すことなく、この軍勢たる標的を討ち滅ぼすことができるはずだ。

だからこそ、今夜は一人で戦い切らねばならない。

それは少女のWIKの一員としての、誇りをかけた行動だった。

決意を込めた斬撃に次々と擬態吸血鬼は討たれる。如何に良質の業物のナイフとはいえ、刃こぼれが生じ、切れ味は鈍り始めていた。しかし、チドリはそれに構わず攻勢に徹する。刃を振るう。全戦力でかからねば、まずい。そう思わせる必要があるのだ。だから、攻勢に徹するのである。そうでなければ、戦力を分散させてしまう。分隊は間違いなく、人を襲ってしまふ。

気がつけば、ナイフは中央から真つ二つに折れていた。

苦しそくに肩で息をする行灯陰陽^{ダイクライトストーカー}。

「……流石に朝は遠いですね。でも」

しかし、未だ心は折れず。武器が駄目になったならばと、チドリは魔術主体の戦闘方法に変更する^{シフト}。

「^{アヴァニ}スタムラハ
地柱！」

そして、その魔術を行使した時。
ミリタリーバランス
戦力差に明らかな変化が生じていた。

チドリが行使した魔術では岩槍が一本生じるだけのはずだったので、直線に次々とそれが乱立しては、それ一帯の敵を滅ぼしたのである。

さらには、一瞬、驚き、隙を見せた少女に群がろうとした死人たちが炎の柱に巻かれ、灰へと変わる。

意志のある炎のようにそれは、少女を取り囲み、守るように空へと伸びていた。

「まったく。丸暗記なんて力技に頼って、しかも、『かな』ベースでいいものを、わざわざ『サンスクリット語』なんて回りくどい術式に組み直したりするから、応用が利かなくなるのよ」

それは隆起した岩槍により作られた二つの強固な壁に守られた道、食人鬼の群れを魔術によって殲滅して作られた道から歩いて来た少女の声。

眼帯をした自然な茶髪ナチュラルをサイドテールに結った陰陽師の少女の前に、真っ直ぐに伸ばした自然な茶髪ナチュラルを靡かせた陰陽師の少女は現れる。

ソーサラーテキスト
「陰陽律法　　!?!」

チドリは心底、意外であると感じられる声を漏らしていた。

それもそのはずである。彼女は陰陽寮の陰陽師なのだ。実行部隊としては、その代表的な魔術師と言って過言ではない。

彼女たちを動かさずに済むように、チドリWIKは動いていたはずなのに、何故　？

「借りを返しに来たわよ」

その抱いた疑問に答えるように、ソーサラーテキスト賀茂瑞穂かもみずほは口元を緩めて、そう告げた。

「……借り、ですか？」

しかし、当のチドリにはそんなものを作った覚えはない。

二人の周囲にあった炎の檻が弱まると、文字通り堰を切り、一つ

増えた極上の獲物を歓迎するかのようにフアビオたちは押し寄せる。

ダークライトストーリーカー
「行灯陰陽！ 貴女、確か式神を使えたわよね！？」

言いながらにそれを当て込み、瑞穂は指先で空間に五芒星を描いていた。

こくり、と頷くや否や、チドリは呪符を三枚、放る。

「青龍！ 玄武！ 朱雀！」

ダークライトストーリーカー
行灯陰陽の命じるままに、それは仮初の生命を得る。

先行して喚ばれていた白虎と合わせ、四聖獣とも呼ばれるそれらは、人間などよりも遙かに神格も霊格も高次元の存在であり助力してもらおうというスタンスならいざ知らず、本来、それらを使役することなど余程の特殊条件・契約下でないと不可能な事象である。

それは『かな』ではなく、『サンスクリット』という通常とは異なる言語体系のもたらした産物か、それとも、その外見にある通常の四聖獣との相違 背部にある純白三対六枚の翼の示す西洋魔術のもたらした特殊事象なのか。

それはその術式を独自に構築した行灯陰陽のみが知り得ること。

例えその四聖獣が、見かけだけの張りぼてとしても、わざわざそれを公言する必要もなく、また、真なる四聖獣だというのならば、それは陰陽寮が解析しきれではない式神行使の高みを、その組織の老害たちに外法使い呼ばわりされる似非陰陽師エゼが辿り着いていることを意味するだけの話である。

ただ、確かなことは一つ。

少なくとも、数日前に『エリート』だと彼女自身が称した陰陽律ソーサラーテ法キストよりも、行灯陰陽の方が遙かに式を扱う秘術には優れているということだった。

それぞれがそれぞれの司る方位に陣取ると、辺りを埋めるフアビオに吼える。薙ぎ払う。一掃する。

同時に四体の式神の召喚、使役。その代償に、チドリの精神力はごっそりと削られていたが、最早、それは問題ではなかった。

ダークライトストーリーカー
その行灯陰陽が作り出した安全なる時間に。

陣形の中央に位置する二人の陰陽師、そのもう一人たる陰陽律法ソイサラードキストが空間に晴明桔梗しほうせいを描き、短く短縮されつつも、直接世界の真理に触れ変革を生じさせる、力ある言葉を紡ぎ終えていたからである。

現代陰陽師譚 〓四〓

「May - 3 . Fri / 22 : 10」

ダイクライトストーカー
行灯陰陽が安全を確保し、ソーサラーテキスト陰陽律法が大規模攻勢魔術を行使、無数の対象を一気に殲滅する。

それはとりあえずの決着をもたらす連携であったはずだった。

それにより、ここにはいない爵級吸血鬼ファビオ・インザーキその本体以外の、ファビオ・インザーキ自体で構成された死者の軍勢を灰燼へと変えたはずだ。

「 終わり、ですか」

チドリの言葉を結論付けるかのように、今、その周囲には巨大な炎の渦が無数に連なり、天に届かんとする壁となつて猛り立っていた。

二人の魔術師の根源たる思想。陰陽道・陰陽五行説に於いて、世界を構成する総ての氣は巡り巡つていてという考えがある。

陰陽道の知識に疎い人間でも知っている者の多い『大極図』の示す、五行相生説ごぎょうせいじょうせつといわれるものだ。

火は土を生み、土は金を生み、金は水を生む。水は木を生んで、木は火を生む。そしてまた、火は土を生むわけである。

それは五行それぞれが互いに互いを生み合い流転し、万物は構成されているという循環の思想である。

ならば。その氣の流れを火行へと向け、コントロールすることが叶うのならば、目の前の異常地味現象は、何の不思議もなく、極自然に当たり前のこととして存在し得る現象なのであった。土行、金行、水行、木行。辺り一面に存在する万物の氣を火行へと流して、そこで力として発現させて仕舞えば良いだけのことなのだ。

と、五行秘術の理論として説明をしまえば、それは意とも容易く行える所しよい為だと思われるが、その実、やはりそうではない。

五行の氣に干渉する秘術は誰でも習得が可能というものではないからだ。

それには万物を構成する五行の氣の流れを、雜然とではなく、緻密に把握する感覚を有する必要があるのである。その氣の流れを自身に内包される氣により調節することが、五行を自在に操り、求める事象を生み出す核となるからだ。

では、氣の流れを読めたからといって五行の統べてを操ることが可能なかと言えば、そういう訳でもない。五行一つ一つにも適正は存在し、術者には得手不得手が生じてしまうのである。

五行総ての氣をコントロールし、思いのままに操ることが叶う術者など、世界中の陰陽師人口を見渡しても数人しかいない。通常は五行の内の一つも扱うことが叶うならば、それで十分素質があると判断されるほどだ。

加えるならば。

現在発生している事象には、一瞬にして膨大な氣の量を操る必要があつたはずである。魔術使用許容量を大きく持たない術者には発現不可能な事象なのだ。

五行行使の秘術は、陰陽道の歴史の中からすれば比較的新しい魔術である。元は仙道の秘術の一端を陰陽道に本格的に解析し、落とし込んだのが始まりであつたとチドリは記憶している。

「陰陽律法、とは上手く言つたものですね」

陰陽、その五行の理を思つままに律する者。その異名が示すのは、ただの事実なのだ。

残念ながらチドリには、現代の陰陽寮、特に退魔実行の術者に於いては習得することが標準となつていて、その秘術を行使することができない。

それを習得するだけの時間を、他の魔術習得　主に詠唱魔術の丸暗記。または不得手な『かな』による魔術を、まだ得意な方である『サンスクリット語』に再構築、さらには不足欠落部分を西洋魔術で補い独自の陰陽道魔術を確立させる　に費やし、作り出すこ

とができなかつたからだ。

或いは時間が許していたのならば、それを習得することができたのかも知れない。しかし、一つ、明確なことがある。

それは魔術暗号解析能力に乏しいチドリには、瑞穂ほど端的に魔術発動をさせる詠唱ができないということだ。

ソーサリーテキスト
陰陽律法は、ごく短じかい命令を下す形で詠唱を行っているが、
実際はかなり大まかな過程部分の詠唱を省略している。カット

例えば眼前の秘術行使に限定すれば、これだけの火力を産むのに対し、周囲に元から存在する火行の氣の量では当然足るわけがないのだ。故に、相生の循環からは一番遠くに位置する、大地に膨大に在る土行の氣を、火行にまで一つずつ変換する作業を彼女は行っていたはずなのである。

暗号解析の不得手なチドリは、瑞穂が略したその過程を一つ一つ、順を追って行使用していく必要性があるというわけだ。

それに何より、チドリには、瞬時に五行の氣を把握する感覚が乏しい。確かに素養も大きな要因ではあるものの、これは学習や経験に依るところも多いので仕方ないことではある。

だが、陰陽寮の退魔士として活動する陰陽師は、総じてそれに長けている。

五行の氣の流れに混ざる異質　彼らの言うところの『魔』を、
そうして感知しているからである。だから、この秘術は標的を感知するにも非常に有効なのであって、習得が標準と考えられているのだ。

才能という制限があつたとはいえ、WIKという世界的な組織で活動する故に、世界基準を考慮し習得する魔術を選択した陰陽師と滝口という退魔武士と連携する点も考慮し、日本という特定の地域で活動する故に、索敵と両立できる攻勢魔術を基準として習得した陰陽師と。

現状に安堵を感じていたチドリと、現状に焦燥を感じていた瑞穂。同じ体系の魔術師でありながら、二人の相違は、そこでも現れている。

た。

「ち！」

舌打ち一つ零すと、続け瑞穂は叫ぶ。

「行灯陰陽！ 臨戦態勢！ 魔術停止するわ！」

「え！？」

「いいから構える！ くるわよ！」

状況が把握できず呆気にとられたチドリに、瑞穂は怒号するや、火行へと流していた氣の流れを止め、魔術行使を停止した。

轟炎の向こう。そこにあつたのは。

「！」

声にならない驚きを上げつつも、チドリは反応していた。

驚愕すべき事実を突き付けられ、混乱をせずに行動を起こせたのは、これまでの実戦経験の成せる業だった。

チドリの目が捉えた現実。

そこには在ったのは、炎に巻かれ、焼失しているはずのファビオ・インザーキの群れだった。

それが炎の壁の消失と共に、再び生餌たる二人を求め、大挙して

来たのだ。

「陰陽律法、これはどういうことですか！？」

友軍に行灯陰陽は問う。

陰陽律法は炎の向こう、その状態を理解し、無駄な力の消費を避け、行使中の秘術を停止したのだとチドリは確信したのである。

爆炎の魔術に因り、その魔力しか感知できなくなっていたチドリとは異なり、五行の氣に依り、その闇の住人たちの蠢動を瑞穂は感知したはずなのだ。

「絶対領主よ」

乱戦の始まった戦場で、瑞穂は焦りを押し殺したように呟く。

それは十二真祖の中でも単独戦闘能力最強と謳われた吸血鬼の名前だった。

「絶対領主！？ じゃあ、この食人鬼は！？」

死者の群れの呻きに混ざり聞こえた陰陽律法の声に、ソーサラーテキスト 行灯陰陽は
反応する。

当然、彼女も知っている名前。いや。それは世界という舞台上で活動していた彼女こそ、より多くの情報を持つ名前だ。

「素敵に妥当でしょ!？」

単体では脆弱な『それ』を、意志のみの力で発動させた不可視の風の刃、岩槍、氷槍、火球で『とりあえず』滅しながら瑞穂は、自棄な笑みを浮かべる。

『それ』は裂かれ、貫かれ、燃やされ、破壊され、殲滅され。

だが、直後、『それ』は何事もなかったように元の姿を取り戻すと、再び少女たちの柔肌を、肉体を欲して牙を剥く。

「ゲール 食人鬼自体が外マントや杭に当たるといふんですか!？」

ありえない。そういう感情を出しながら、チドリも応戦していた回収した刃こぼれの著しい一振りの儀式短剣を頼りに、もしもの時を考慮し温存していた封魔の呪符を惜しげもなく使用する。

だが、自身の発言とは裏腹に、そう考えねば合点のいく答えはないのも理解していた。

エンシェンク・フラキア 絶対領主。肉体すらを捨て、真なる不死身の吸血鬼と化した真祖。その存在を構成していたのがマントと杭なのだ。

故にその真祖は、そもそも滅ぼす方法がなく、全吸血鬼の中で個体最強と判断されていたのである。

「塵も積もれば……じゃ、ないでしょう!？」 カータクサツヴァー 死者洗礼に始まり、

レインス・ヴァルヴェア 同属不浄、仕舞いには絶対領主ですか!？」

悪態を吐いたところで現状は変わりはない。

これは完全なるジリ貧である。

否。この状況を予測できた者が果たして存在しようか？

つい数時間前までは、それは何の固有特殊能力も持たない、特徴のない単なる爵級吸血鬼だったはずなのだ。それが次々と類稀なる超異常能力を発現させていったのである。

絶対に倒すことのできない死者の群れを前に。

遠い夜明けを待ちながら、多勢に無勢、そしてイカサマとしか表現できない標的の能力を相手に二人は奮戦を続けていた。

「ソーサラー・テキスト陰陽律法！ 何か打開策をお持ちですか！？」

疲労に太刀筋も鈍り、ますます一番に使用制限の長いはずの短剣の寿命は縮まる。予備として普段は使用しない懐刀であるそれも、いつまで使用に耐えうるのか、甚だ疑問であった。

「無いわよ！ 大体、アンタが五行の一つでも使えてれば、早々に本体が限定できて、こんな状況は起こりえなかったはずなのよ！」

目視できないながらも、比較的近い場所から聞こえた非好意的な声。

「人には得手、不得手があります！ そんな愚痴を今、言っても

ー

互いの状況を把握できず、自らの身を守るに精一杯の現状で、その言葉にチドリは違和感を覚える。

「ソーサラー・テキスト陰陽律法とは、賀茂瑞穂とは。」

「だから、アンタは『外法忌端』なのよ！ 才能ないなら陰陽道なんて捨てて、お得意なサンスクリット語で、マントラ真言でも何でもやってりゃよかったのよ！」

違和感とその答えを導き出そうとする思考に乱入するように、その少女からの次なる罵声が飛んでくる。

よくもまあ余裕の無い状況で悪口だけは矢継ぎ早にしつかりと出るものだとチドリは呆れに似た感情を抱いた。と、同時に怒りは込上がる。

「『外法忌端』？ まさか貴女も頭が固い口ですか？」

相対する陰陽師とは対象的に。チドリの怒りは静かに、しかし、重く重く迫るようなものだった。

確かに、チドリには才能がないのかも知れない。だが、それを如何にエリートだとされる陰陽師だからといって蔑まれる謂れはない。

チドリはチドリなりの陰陽道を構築し、歩んで来たのだ。

陰陽道は世界の総てを、その思想にて解析する学問に近い魔術体系であるはずだ。

だから、サンスクリット語を取り込もうが、西洋魔道を取り込もうが、それは真理。それは在るべき陰陽道の姿であるはずだ。チドリの信じる陰陽道のカタチであるはずだ。

だから。

だから、怒りと共に、再び違和感を感じる。

彼女は、彼女の、ただ一人の心からの理解者だった、はず、なのに。

そして、彼女は。

「……残念です。貴女は同世代、いえ、近代の陰陽師としては、もっとも優れた方だと思っただけですが……いつの間に老害に毒されましたか？ まあ、貴女は真つ当な才能もあるでしょうし、老人たちの受けもいいんでしょうが……」

決意したように、静かに毒を発するチドリ。

「……ですが、その実、私とそう大差ありませんよね？ 貴女の最も得意とする『五行秘術』だって、つい近世に確立されたもの。いかに古来から陰陽道に取り込まれていた仙道のそれを使っていますといったところで、対した歴史はないじゃないですか」

ファビオの群れの先。その毒を向けるべき相手。

チドリの誇りを、想いを、過去を、努力を侮辱した者。

「……それに、その『五行秘術』は貴女の1番忌み嫌う方の家系が確立したんでしたね？ 忌み嫌う方が直接仕込んでくれたんですよね？」

その死人の壁に見えない相手こそを、冷たく嘲笑して見せる。

混戦を生き残るべく、何をすべきかを的確に実行しつつ、チドリは瑞穂の挑発に乗った。

「May - 3 . Fri / 22 : 45」

「……それに、その『五行秘術』は貴女の一番忌み嫌う方の家系が確立した術式でしたね？ 忌み嫌う方が直接、貴女に『仕込んで』くれたんですよね？」

状況は決して芳しくは無い。しかし、自身に向けられた侮辱に、チドリは黙っていられるような腰抜けではないのだ。相応に、その侮辱を返さねば気が済まない。

そして、その報復として出た言葉。

それは癸チドリが知る、陰陽寮が誇るエリートとされる賀茂瑞穂の汚点だった。

いや。それはもはや、汚点というよりは禁忌タブーと言って差し支えない。

チドリについては平然と悪評を口にする老害と称される人種が、口籠り、見ぬ振り、知らぬ振りをする瑞穂の過去だった。

「貴方は忌み嫌う人間の手助けがあつてはじめて評価されている陰陽師 私よりも貴女こそが陰陽道を捨てては如何です？ あなたの方の仕込んでくれた以外の才能なんて凡庸に過ぎないのでしょう？」

検体。否。既ニソレハ献体ダツタノカモ知レナイ。

冷たく言い放った言葉が、ソレの心を深くエグく穿ったことは必至なのだ。チドリは確信している。

「癸！！」

怒りそのものを爆発させ、瑞穂は叫んだ。それは正しくチドリの予想通りの反応だった。

土御門霧柄つちみかど きりえ。『土御門』という姓は安倍家が室町時代以降に名乗った姓である。つまり彼女は安倍晴明あへのせいめいの血を引く直系の一人なのだ。

そして霧柄は、チドリの知る、魔術師としての現在最高の陰陽師である。

否。それはチドリ個人のみの認識ではないし、近代最高の魔術師としての陰陽師だった。歴史を紐解いてみても、彼女以上の陰陽師が何人いよう。

その所業は認められざるものでありながら、その所業の残した意味は功績として捉えれば、先祖たる安倍晴明にも劣らないのかも知れない。

彼女は賀茂瑞穂の師であり、そして。

怒りに任せた行動を取る瑞穂に、後先はなかった。

この場に辿り着くためにも、それなりに消耗し、さらには先の大規模な五行秘術行使を行ったのである。

精神的にも肉体的にも、チドリと同等か、それ以上に疲弊していたはずだった。

しかし、次々と徒勞と思われる魔術を、憤怒を晴らすかのように立て続け実行に移している。

「アンタ、私を蔑むなんていい度胸ね！ 正統な陰陽道のイロハもまともに行使できないクセに！」

「正統な陰陽道！？ 貴女も老害と一緒に履き違えていますね！ 陰陽道は総てを陰陽五行に解析するものですよ！？ その魔術体系のほぼ総ては元々、先人たちが『外』から陰陽道に取り入れたものだったから、今、貴女の使う秘術の多くも私と同じ外法ですね！」

ファビオの群れを互いが互いに盾にするように。

終には行灯陰陽ダイクライトスターカウンスラーデキストと陰陽律法の魔術は、互いを直接の標的として行き交う。

劣悪になるばかりの戦況。

二人の陰陽師が敵対したところで、只一つの存在を除いては何の利点メリットもない。

いたずらに消耗しあう少女二人に比べ、その巻き添えを受ける形でファビオたちは滅ぶも、覚醒したばかりの絶対領主ツェベシュ・フラキアの不死の能力により復元するため何の損失もない。

「大体、私は元からアンタが気にいらなかったのよ！ 何でアンタみたいな外道を正統に評価しようとする晴歌を避けるのよ！？ 怖いわけ！？ 自分のしてきたことを老害に否定されるのが！？」
それでも、互いにそれを止めようとはしなかった。

チドリはギリギリのところで僅かな隙間を利用し瞬歩で回避したが、瑞穂の行使した風の大渦は、つい今の瞬間まで彼女のいた場所で猛威を振るう。

これは謝罪で済むレベルの行為では当然ない。

下手をすればWIKと陰陽寮の友好関係を消滅させるに十分な事件と成り得る。

「チャホヤされてきただけの貴女に何が解ります！？ 逃げる！？ 御冗談を！ 世界を見た私にとって閉塞的な陰陽寮は、何の魅力も、学ぶべきところもないだけです！」

しかし、双方矛を諫めようとはしない。

対するチドリは、相対する陰陽師とはここでも明らかに対照的とばかりに、的確に小技を撃ち込んでいた。

瑞穂の魔力感知能力があと僅かでも鈍いものだったとすれば、今もファビオの頭部の代わりに爆散スプラッターしていたのは彼女だったはずだ。

事、任務に対しては冷静に冷徹に当たる彼女とて、そういう組織間の問題など見えてはいないように思える。

「晴歌はアンタに会うのを純粹に楽しみにしてたのよ！？ アンタにあの子の気持ち解る！？ 陰陽寮に幽閉されてると同じで、友達なんかいなくて！」

「なんですか？ 本音は嫉妬ですか！？ 貴女は自分よりも私に陰

陽頭の期待だの、好意だのを向けられているのが悔しいだけでしょ
う!? 浅ましい!」

安倍晴歌。現在、陰陽寮を統べる者の名前である。彼女は確かに
癸千鳥という陰陽師を高く評価していた。だから。だから、違和感
は確信に変わる。

「勘違いするな! 晴歌はアンタをアンタの意志を無視してまで無
理矢理に陰陽寮に引き抜こうだなんて考えてないわよ! ただ同じ
年代の陰陽師としての悩みも共有できる友人が欲しいだけでしょ
う!」

「そんなこと! そんなこと、言われなくても理解しています
! 私だつて! 私だつてハイそうですか、で会えるものなら当
に会っています!」

それでも。

それでも、組織的な問題や、外法忌端と面会したなどと、当の陰
陽頭に批判が向けられることを考えて足が遠のいていただけだ。

その遣り取りの為されるまでのチドリは、それに何となく気付き
ながらも、確信を持たずにいた。

それは賀茂瑞穂という少女を、直接的に知らない故に持てなかつ
た自信である。

本気で命の取り合いを繰り広げるようであつて。だが、チドリは
切り札を発動させてはいなかった。

それは。

それは、そのためだ。

瑞穂の指が印を結ぶ。それは果たして幾度目だろうか?

恐らくは彼女は感情的になったようでありながら、ただ、ダイクライトスト行灯陰
陽を信じ、イカ疲弊を続けていたのだろう。

だが、そのとき。ダイクライトスト晴明桔梗が空間に描かれた瞬間に、ソーサラーテキスト陰陽律法が
わら微笑つたのを行灯陰陽は見逃さなかった。

「貴女のこと、本当に気に喰わなかったわよ。今の今までわね
……でも、そういう風に貴女なりに晴歌のことを考えてくれていた

のなら、貴女を認めないわけにはいかないわね
「その口が、ぽつり眩く。」

「ごめんなさい。賀茂さん」
だから、チドリは非礼を詫びた。

演技といえど、侮辱する言葉を浴びせたことを、心から謝罪した。
「お互い様よ、癸。それに狙いを解ってくれたみたいだから、今回は特別に許してあげるわ」

そして、本心から認める。そういう意思が陰陽寮の陰陽師には見て取れる。

瑞穂の行っていたことは、誘き寄せ、だったのだ。

絶対的な優位を作り出せば、極上たる自分達を、えせのどうして吸血鬼ファビオは知能の低い、駒、スケーフゴート身代でしかない食人鬼ニセファビオに与えようか？

これ以上目覚める可能性のある新たな能力を開花させる前に、ファビオを補足するには、それは一番楽な、しかし非常に難度も危険性も高い作戦だったのだ。

しかし、標的は確かに網にかかった。それは自滅するばかりになった少女たちを襲うべく『ファビオ森』に紛れ戦場ここに現れたのだ。それを瑞穂は感知していた。

「金行を以って水行を生ず、水行を以って火行を減ず」
晴明桔梗は完成する。

「凍結せよ！」
金生水。そして水剋火。

魔力増幅を行い、行使した複合五行秘術。

周囲の空間に存在する火行の氣を急激に減退させた結果、それは当たり前前の事象として発生させられる。
瞬間。

一面を覆うファビオの群れは完全に凍結していた。
死者があるべき場所へと閉じ込めるように。魔術により突如と乱立させられた氷棺の一つ一つが、その全ての動いていた軀を強制的に封じ込めている。

そして、チドリは瑞穂の五行秘術が作りだした氷の棺の連なる世界に、一人動いていた。

その左目を塞ぐ眼帯に手をかける。

そこに在るのは右目とは違う色の瞳。黒い瞳孔軸にして、時計回りに螺旋を巻いた模様がそこに浮かぶ。

ホナルオシャン
「紅螺旋、発動」

メススパイラル
「色彩螺旋」の一種に、ダイクライトストーカー行灯陰陽は発動を命じる。

周囲の存在する者から強制的に生氣、生体エネルギーたるアストラル体を奪う魔眼。

それで事態は終焉を迎えていた。

「May - 3 . Fri / 23 : 00」

ソーサラーテキスト
「陰陽律法、よく紅螺旋の影響下で平気でしたね？」

静けさを取り戻した墓地で、その場所に似つかわしくない少女は、眼帯を元に戻しつつ訊ねる。

「……瑞穂、でいいわよ。その変わり、私も千鳥って呼ぶけど……いい？」

「はい」

瑞穂の提案をチドリは笑顔で了承した。

「別に対したことじゃないわ。いざというときの為に備えがあっただけよ」

そういつて彼女が取り出したのは、金属製の鏡、だった。

「護符、としての金鏡ですか……これは？」

「一応、オリジナルの禁呪を持つてるんだけどね。それを補助なし

で使うと負担がかかって本気で死ぬるから、そのために持ち歩いてるのよ……あのバカに関わる前は、こんな保険を常備する必要はなかったんだろうけど……まあ、今日のトコは感謝、ね」

さらりと奥の手を口外したのは、敵意が本当でない、という証明だとしても言うことが。

しかし、その言葉には嘘偽りはないようだった。それを続けた言葉が裏付ける。

「ああ。その禁呪はね、相生の流れを無理やり逆転させる術式だから、私も立派に外法使いだわね」

と。瑞穂は口元を緩めて、そう告げたのだった。

教会の入り口に二人が戻ると、そこには黒一色に身を包んだ少年がいた。

それは件の夜に奇跡を行使した剣士である。

「……滝口、ですか」

「ああ」

問うチドリに少年は、そうとだけ応えた。

「アンタの方には死なない死人がいなかった？」

「全部、斬り伏せた……それに何か問題があったのか？」

瑞穂の問いにも、極めて端的に答える黒衣の剣士。

後は無言。

目を瞑り、二人の成り行きを見守るといふよりは、さも用件があるならさっさと終わらせろ、と態度で告げている。

「……まったく。コイツは借りとか恩義とか感じてないのかしら？」
こと、こつという戦場であればこそ、この滝口の『絶つ意志』を込めた剣技は活きたはずである。

この滝口が傍にいたのだとしたら、戦況はかなり有利に楽に展開していただろう。

それは助けに来るとか、来れなくて申し訳ないとか、そういう素振りや少しは見せるといふ口ぶりなのだろう。

しかし、そうして少年を非難するも、どこか憎めない感情を瑞穂が漂わせているのをチドリは感じていた。

「別に私も貸しだなんて思っていないから、お気遣いなく。前回の件は我々WIKにも非があつたわけですから、当然のことをしたまでです」

だから、それに少年の態度にそう悪い気はしない。それはチドリの本心だった。

まあ、事情を知る前に乙女心の代償は某相手にしっかりと支払いさせてもらったわけだし。

「そう？ でも私はそうは思えないのよね……なんとなく、ね」
そう告げるも、どこか腑に落ちない素振りを瑞穂は見せる。

「……でしたら、今日の助力で十分ですよ。それでも、ダメですか？」

「ダメね」

「でしたら、今回の件の報告書……手伝っていただけませんか？ 陰陽寮の見解を報告していただきたいんです。ファビオ・インザーキとは何者だったのか……アレは吸血鬼という分類カテゴリーから確実に逸脱しています。果たしてアレは、どう分類すべきものなのか……」

「いえ。吸血鬼、よ」

考え込もうとするチドリを置き去りに、瑞穂は迷いなく断言してみせた。

「何故そう断言できるんです？」

「雨月が吸血鬼として判断されているからよ。雨月を親としてファビオは誕生した爵級だったのよ？」

「ええ」

「で、そもそも、その雨月自体が能力を完全に解明されていなかったんだもの。でも世間せかいは、それでも雨月を吸血鬼だと分類した。それなら、アレも吸血鬼でしょ？ そうじゃないなら、雨月自体も吸

血鬼ではなくなるわ」

「そんな乱暴な」

「いいじゃない。どうせもう消滅したのよ。雨月の血族は。なんなら十二真祖の能力を擬似的に持った件は報告しなきゃいいじゃないの。私たちが黙殺すれば、誰もわかりはしないわよ」

「……なんて無責任な」

「オホホ。何とでもお言い。終わったことはグズグズ考えない！」

「陰陽道を探求する者としてはどうなんですか……それ……」

しかし、呆れられようが、瑞穂はそれを流すと教会から伸びる坂の下へと視線をやった。

不意に、こちらに近づくと二つの光。

それは自動車のヘッドライトだった。

「お。ハイヤーが来たみたいね」

「ハイヤー？」

「そ。こんな遅くにトボトボと歩いて帰るのも大変でしょ？ だから足を確保しといたのよ」

それが近くで停車したかと思うと、扉が開き、一人の少年が姿を現す。

「ミスホ、オマエ、急に電話一本寄越して、車出せって命令口調でお願いすらくなく、さらには用件告げた途端にコチラの都合も返事も聞かず一方的に通話を切るたあどういいう見だ！？ こっちはなあ、クラスのレクレーションだの、こないだ雨月が車をスクラップにしたんでダチに借りに奔走だの、おかげで見たくもないダチと小学生の団欒を見るハメになるわ、クラスの連中からは抜け出た今でもメル送りつけられてまで非難轟轟だわ　って、アレ？　癸！？」

「……時津さん？」

不意に予想外の知り合いをそこに認めた二人が口をつぐむ。

「よ。元気？　彼方」

見つめ合う（チドリ主観）二人の空気を全くもって読まずに、瑞穂は軽々しく挨拶をして場を崩した。

「ちょ、おま、僕の苦情はフル無視で、謝罪一つなく、それが第一声かよ!？」

「まー、まー。男の子が小さいコトにこだわって四の五の文句を言わないの。千鳥をこんな時間に一人で帰すわけにもいかないでしょ? だから、呼んだのよ。そりゃ理由を告げずに切ったけど、まあ、事情はアンタなら理解してくれるでしょ? それにカナタは女の子をこんな夜遅くに見知らぬ街で一人歩きさせて平気なの?」

「う。そういう風に言われると……」

その言葉を濁して、この場に居る同姓であり反論相手の扱いに長けてるであろう少年に助けを求めようと彼方は視線を向ける。

事情は確かに解る。だが、最低でも文句の一つは受け入れさせて謝罪の一つは入れさせたい。大体、そういえば数日前に誤認で殺されそうになったときも謝罪なく、『ドンマイ』の一言だった気が……。

が、詩緒の対応は彼方でも十分に予想のできた反応があっただけであり、つまりは、無言で、無視ですか。

「……おっけ。オマエの態度は気に食わないけど、ミズホの言う通りだよ。それに癸にはいつも何かと迷惑かけるから、少しでも役にたつとかないとな」

カナタの了承を聞かや、チドリの表情がぱあっと明るく変わる。降って湧いた幸運。

諦めていたレクレーションは二人っきりの深夜ドライブ、デートと化したわけである。

これを幸運といわず、何と表現しよう。狭い車内に想いの人と二人きり、である。

「で、でも時津さん、め、迷惑でしたら、わ、私なんかには気を使わず」

しかし、裏腹な対応をしてしまう辺り、チドリは自分の性格を恨めしく思う。

出会って間もない相手に送迎を頼める(正確には『押し付ける』)

という) ような、横に居る新しい知人の凶太さが羨ましくさえもある。

「何言ってるんだ? どうせ帰る道だし、癸一人増えたところで全く問題ないよ。それに一人で帰るより話相手がいた方が楽しいし」
それでも返された言葉は、想いを寄せる少年らしいもの。

チドリはカナタのこういう飾らない自然体のやさしさがたまらなく好きだった。

そんな態度に自身の攻略フラグをまた一つ立てられてしまったことをはつきりと自覚しつつ、瑞穂にだけ聞こえるようにチドリは呟く。

「……ミ、ミズホさん。こ、これで十分過ぎるほど、貸しはナシです、ってそれどころか、こちらに大きすぎる貸しができたというか……」
「?」

他人に自分の本心を吐露するような発言は、幸運をもたらせた少女に思わず零したもののなか、それとも幸運な状況に浮かれてしまったせいなのか。

だが、色恋沙汰に絶対的に疎い少女は何をそれほどまでに感謝されているのかを理解できはしなかった。

二人を乗せた車の調子は頗る良いらしい。自動車のイロハを知らないチドリは、小気味よいエンジン音からそう感じていた。

セダンタイプの乗用車といえど、中の広さはたかが知れている。助手席に座るチドリのすぐ横、運転席には当然ながらカナタの姿があった。

気を付けなければ、自分の胸の鼓動を聞かれてしまいそうな場所に、想いの人がいる。

パワーウィンドウを開くと、最高のお膳立てをしてくれた少女の顔がそこにあった。

「じゃあね、チドリ。カナタ、安全運転で帰るのよ」

「ミズホに言われなくても無茶な運転はしねえ」

お約束とばかりに意外そうな笑顔を作り、そして、じゃあ、とばかりに手をひらひらと振ると瑞穂は2、3歩後退る。

「あ、あのですね、晴歌さんに近日中に会いに行きますので、お茶菓子を願いますとお伝えください」

そんな少女を突如と呼び止め、チドリは照れ臭そうに微笑った。

「おっけ」

「じゃあな。一応、渡辺にもよろしく」

微笑み返した瑞穂と、その後方で物言わず立っているだけの無表情少年を残し、カナタの言葉と共に、チドリと彼女の夢と想いと妄想とを大いに乗せた車は、教会から発車したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107d/>

聖譚曲、闇夜に響く ～現代滝口譚異聞～

2010年10月8日13時01分発行